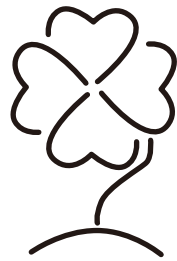


經 營 改 善 助 成
課 題 研 究 助 成

実 践 報 告 集

—— 令和 2 年度 ——



公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部

刊 行 の こ と ば

地球規模で広がった感染症、古くは100年前のスペイン風邪、最近では18年前のサーズコロナ、7年前のマーズコロナ、そして今回の新型コロナ・コビット19です。こうした世界的に流行した感染症を「禍」の文字で表現しています。この漢字は音読みでは「か」で、訓読みは「まが」「わざわい」と読みます。「わざわい」も漢字で表すと「災」と「禍」があり、不幸せや災難等の喜ばしくない事に使われています。特にこの「禍」は、誰もが予期していない防ぎようのない状況下、阻止できない状態の時に使われます。今回は正に「コロナ禍」です。私たちは、コロナ禍を決して忘れることなく、このコロナ禍の中で経験したことを今後の生活に生かすことが求められます。

昨年11月、「令和2年度小学校教育課程研究集会」に参加させていただいた折、保健部会では担任が養護教諭の専門性を生かした資料やワークシートを絶妙なタイミングで授業に組み込み、子供の発達段階に応じた、専門的な知識を分かりやすく理解させるティームティーチングの授業を参観することが出来ました。「ウイルスをしっかりと洗い流すには、どのように手洗いをしたらよいか」「新型コロナウイルス感染を予防するには、どのような生活をしたらよいか」等々、子供たちの課題解決の姿とコロナ禍の中、日常生活への実践意欲を、直に感じました。どのような状況の中でも、先生方が「子供の学びを止めない」教育活動の展開に敬意を表します。

ここに集録しました『実践報告集』は、令和元年度応募された経営改善論文58編(学校部門46編・個人部門12編)、課題研究論文の538編から、3回にわたる教育振興事業選考委員会で、慎重に審査された優秀な報告(論文・実践報告)です。今日的な教育課題に真摯に取り組み、その実践を積み重ね、経営改善論文や課題研究論文として応募くださいました皆様方に、心より感謝申し上げます。

今回の『経営改善論文』には、①教職員のチーム力を高めて、教職員の子供に対する信頼と肯定的な言葉掛けを重視し、一人一人がよりよく自立する姿を、学級・学年・学校全体に広める活動実践、②教師の本気の話し合いを通して、安全・安心な学校づくりを目標に、教師・子供たちの協働性を高める取組の活動実践、③理科教師の先行学習(授業の前半で知識を習得させ、後半は知識を活用して深く考える手法)を導入することによって、子供が「分かる」を実感することが出来た授業実践、等々、学校部門・個人部門を含め11編が集録されています。筆者自らが教育の一層の充実・改善に向け、意図的・計画的に取り組み、学校全体を動かす原動力になっていることに感銘を受けます。

また、『課題研究論文』には30歳以下の教職員を対象とした課題研究論文538編の中から、優秀作20編が集録されています。どの論文もA4版1ページに、若き教職員の授業構想・学級経営の取組がまとめられています。論文の中には、中学校への移行を考えた学習の手立てやICT機器の有効活用によって教科の特性に迫るなど、子供の深い学びの実現に向けた情熱を感じとることが出来ます。

本会は、令和2年10月26日(月)高志会館において、教育振興奨励助成贈呈式を開催し、『実践報告集』に集録、掲載された皆様方を表彰したところです。改めて、これまでのご苦勞とご努力に対し、心から敬意を表しますとともに、今後一層のご研鑽とご活躍をお祈りいたします。

ここに、『実践報告集』をお贈りします。お読みいただき、「現代の教育課題を適切に取り上げている実践」・「どこの学校でも取り入れてみたい実践」・「限られた紙面で読み手に伝える表現力(論旨や意見の明確化)」等々の観点に着目され、今後の学校教育の充実に生かしていただければ幸甚です。更に、教職員の皆様方の元気の源となり、子供たちの健やかな成長に繋がることを願っています。

本会の教育振興事業の推進にあたり、ご協力・ご支援いただきました教職員の皆様方や教育振興事業選考委員会の先生方に対し、深く感謝いたしますとともに、今後、更なるご指導・ご支援をくださいますようお願い申しあげ、刊行のことばといたします。

令和3年2月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部
支部長 小林 福 治

励ましのことば

令和2年度より教育振興事業選考委員会委員長を仰せつかりました神川と申します。就任にあたり、弘済会の歴史と理念を拝見しました。弘済会は創立とともに「明日を担う子どもたちのために」の理念のもと、教育に携わる全ての方々を支えてこられました。弘済会事業のおかげで、本県教育の今日があることに気付くと共に、「人生100年時代において、昔子どもだった者が、未来の子どもたちのために、できる事を考え伝え続けたい」という気持ちにさせて頂きました。

今回の「経営改善奨励助成」では学校部門に46件、個人部門に12件の合計58件の応募があり、最優秀賞1件、優秀賞2件、優良賞3件、個人奨励賞5件を選考しました。

最優秀賞の蛭川小学校では「児童の自己有用感を高める」ことを重点目標として教職員と児童が自立・共生を目指した積極的な活動を思考・創造しました。取組の結果、児童に「自分は誰かの役に立っている」という意識が高まるとともに、若手教員の教師力や教員同士の同僚性も向上し、相乗的に学校全体にも温かい風土を醸成することができました。

優秀賞の奥田北小学校は、「安心・安全な学校づくり」を目標として「命・絆・違い」を合言葉に、教職員に「本気の話し合い」ができる環境づくりを目指す取組です。その過程で、児童の発案から人を大切にするための「ひまわり憲法」が誕生し、児童も教職員も意欲、充実感、自己肯定感が高まっていく成果を確認できました。

個人部門で優秀賞に選考された五位中学校の土江田先生は、理科の授業を通して生徒の「分かる」が実感できる授業を目指し、4つの仮説を立てて取り組まれました。一つ一つの仮説を検証するための実践を計画・実行し、指導効果の客観化を試みた結果、先行学習の有効性を実感することが出来ました。さらに問題解決型学習との使い分けや授業規律の確立により、生徒の「分かる」実感を高め、ひいては理科が好き、学校が楽しいと感じる指導の可能性を十分確認することができました。

また、優良賞や個人奨励賞を受賞された研究のいずれからも、背景には真に子どもを愛し、学校が楽しく、安心して学び合える場所となるようにという熱い願いが伝わってきました。今回、学校司書の方からの応募があったことも経営改善への幅広い参画の可能性と心強さを感じました。

選考委員の皆様からは、どの研究論文も学校運営や授業研究に真摯に取り組む姿勢がうかがえ、読み応えがあり、審査を通して、大いに刺激を受け、力を頂いたという共通の意見を頂きました。私も同感で、厳しく変化する社会環境の中で、校長先生、教職員の皆様、そして児童・生徒たちの多様な課題に、積極的に学校全体を巻き込んで一体となり、創造的な姿勢で取り組まれていることに、富山県教育の未来に大いなる希望と明るさを確信致しました。

今後も弘済会におかれては、変化の著しい社会環境の中で押し寄せてくる様々な教育課題に果敢に立ち向かい課題解決を目指す学校や団体、グループや個人にエールを送り続けて頂きたいと思えます。そして本県の教育に携わる全ての皆様には、教育の振興、発展、質の向上のために、お力を発揮して下さいを心より期待しております。

最後に県内の教育現場のみならず日本全体や世界の子どもたちが、コロナ禍に代表されるような、変化が激しくリスクの予測しにくい人生100年時代においても、夢をもち続け生き抜く力を育み、たくましく成長してくれることを願ひまして、励ましのことばとさせていただきます。

令和3年2月

富山大学名誉教授
教育振興事業選考委員会委員長
神川 康子

教育振興奨励助成の主旨

公益財団法人日本教育公務員弘済会富山支部

弘済会の教育振興事業は、子供たちの健やかな成長を願い、研究・研修を実践されておられる、教育関係者及び団体等を支援する事業です。

ここに、本県教育の充実発展に寄与するため、次の助成を行います。

1 経営改善奨励助成

経営改善・工夫を研究テーマに掲げて取り組む学校や学年・教科等の部会に対し助成を行い、さらに優秀な報告(論文)に対して奨励金を給付します。

最優秀賞(1件)、優秀賞(2件)、優良賞(3件)、個人奨励賞(5件)

2 課題研究奨励助成

学校経営の一翼を担い、今日的な課題を掲げて研究実践に取り組む30歳以下(31歳以上の新規採用教職員は3年次まで)の教職員からの申請(595件)に対し助成を行い、さらに昨年度の報告(538件)のうち優秀な報告(研究)に対して、奨励金を給付します。

優秀賞(20件)、優良賞(30件)

3 教育団体研究助成

本県教育の一層の振興を図るため、幼・小・中・高校(園)長会をはじめ、教頭会、教育研究会、学校事務職員協会などの団体に対して、助成を行います。

教育団体研究助成(13件)

目 次

刊行のことは 支部長 小 林 福 治

励ましのことは 富山大学名誉教授
教育振興事業選考委員会委員長 神 川 康 子

教育振興奨励助成の主旨

◇ 経営改善奨励助成受賞論文

- ・教職員のチーム力で育む児童の自己有用感
富山市立蜷川小学校 校長 志 鷹 佐 吉 …………… 1
- ・本気の話合いによる安心・安全な学校づくり
富山市立奥田北小学校 校長 永 森 悦 子 …………… 5
- ・先行学習が生徒の「分かる」実感の獲得に及ぼす効果
高岡市立五位中学校 教諭 土江田 美 穂 …………… 9
- ・学力向上を目指すカリキュラム・マネジメントの実践
入善町立上青小学校 教諭 水 島 佳 織 …………… 13
- ・小規模校の強みを生かした学校経営の工夫・改善
富山市立古沢小学校 校長 松 田 康 子 …………… 17
- ・自ら考え、学び合う生徒の育成
富山市立奥田中学校 教諭 松 本 知 子 …………… 21
- ・児童一人一人がよさを発揮し、共に高め合う学級づくり
魚津市立清流小学校 教諭 寺 西 恵里佳 …………… 25
- ・子供たちが安心して過ごすことができる学校を目指して
富山市立熊野小学校 教諭 佐々木 晶 子 …………… 29
- ・読書のすすめ
富山市立杉原小学校 学校司書 佐 藤 千雅子 …………… 33
- ・温かく学び合う子供の育成
富山市立長岡小学校 教頭 柞 山 菜穂子 …………… 37
- ・教職員がチームとして機能する学校経営の在り方はどうあればよいか
富山市立新庄中学校 教諭 櫻 井 隆 光 …………… 41
- *令和2年度経営改善助成申請一覧…………… 45

◇ 課題研究奨励助成報告「優秀賞」

- ・主体的に関わり合い、共に学び合う子供の育成
朝日町立さみさと小学校 教諭 松 井 和貴子 …………… 49
- ・自分の思いや考えを表現し、主体的に学び合う児童の育成
魚津市立よつば小学校 教諭 蒲 地 良 介 …………… 50
- ・社会的事象に進んで関わり、社会的な見方や考え方を確かにしていく子供の育成
上市町立上市中央小学校 教諭 渡 辺 大 貴 …………… 51

・互いに認め合い、高め合う学級づくりを目指して 舟橋村立舟橋小学校	教諭 加藤 夕海	52
・学習への意欲を高める教材開発の工夫 富山市立豊田小学校	教諭 山田 愛弥	53
・自ら課題をもち、解決をはかろうとする子供の育成 富山市立広田小学校	教諭 加藤 由莉	54
・仲間や教材と関わり、自分らしい読みをもとうとする子供の育成 富山市立堀川小学校	教諭 犀川 かい	55
・互いの思いを尊重し、進んで関わり合い達成に向かう子供の育成を目指して 富山市立山室中部小学校	教諭 吉岡 真依	56
・国語科(2年生)の話す・聞く・読むを確実に身に付ける具体的な手立てについて 富山市立大久保小学校	教諭 柳田 朱音	57
・主体的に学習し、自信をもって意見を主張する子供を目指して 富山市立大庄小学校	教諭 杉本 茉由	58
・「自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい」人材の育成を目指して 富山市立中央小学校	教諭 小幡 拓馬	59
・支え合う学級風土をつくる学級経営を目指して 富山市立柳町小学校	教諭 番匠 拓也	60
・主体的に学習に取り組み、仲間と共にのびのびと表現する子供の育成 富山市立奥田北小学校	教諭 野村 早希	61
・主体的に関わり合う子供の育成 射水市立堀岡小学校	教諭 市村 光代	62
・友達と関わり合いながら共に高め合う児童の育成 高岡市立横田小学校	教諭 濱元 大輝	63
・自分の考えを見つめ直し、深める子供の育成 小矢部市立石動小学校	教諭 藤川 愛子	64
・天体学習における、モデルとシミュレーションソフトの効果的な活用について 小矢部市立大谷小学校	教諭 石野 昌太郎	65
・マット運動の集団演技における実践の工夫 富山市立楡原中学校	教諭 鈴木 友之	66
・学び直しと学び合いを通して、自ら学習する子供の育成 氷見市立西の杜学園	教諭 喜多 俊介	67
・生徒の主体性を引き出す製図の授業法について 富山県立砺波工業高等学校	教諭 島 勇佑	68
◇ 課題研究奨励助成報告「優良賞」		69
*令和2年度課題研究助成報告一覧		71

◇ 經營改善獎勵助成受賞論文

教職員のチーム力で育む児童の自己有用感

—「いきいき(自立)」「あったか(共生)」活動の推進を通して—

富山市立蛭川小学校 校長 志 鷹 佐 吉

1 はじめに

本校は、児童数700名を超える大規模校である。明るく素直で、のびのびと活動している子供が多い。しかし、全国学力・学習状況調査のアンケート「自分にはよいところがあると思う」という質問で、「当てはまる」と回答した子供の割合が、県平均を下回る結果(H30結果：本校40.7% 県：42.7%)となった。そこで、学校教育目標「かがやけ蛭川の子」の具現化に向け、「仲間と豊かに関わり、共に学び合うことを通して、自己有用感を高める子供の育成」を重点目標とし、教師と子供、子供同士のよりよい関わりの中で、以下のような子供の姿を目指した。

自己有用感が高まった子供の姿

- ①自分にはよいところがあることを知っている
- ②人を思いやることができる
- ③何事にも積極的になる
- ④人と協力しながら物事を進められる
- ⑤自分で考えて行動できる

また、本校の教職員は47人で、20代・30代の若手と経験を積んできたベテランがほぼ同比率の構成である。この構成を強みとし、ベテランの指導力を生かすことで、若手の学ぶ意欲を引き出し、教職員のチーム力を高めたいと考えた。チーム力を高めることで、一人一人の教職員がやりがいを感じながら協働して、本校の目指す子供像に迫ることができると考え、本研究を進めた。

2 研究の視点と研究内容

- 【視点1】教職員が共に学び合い、同僚性や教師力を高める研修体制の構築
- 【視点2】学校全体で、子供のよさを捉えて認める場の設定
- 【視点3】温かい関わりを生む児童会活動の活性化

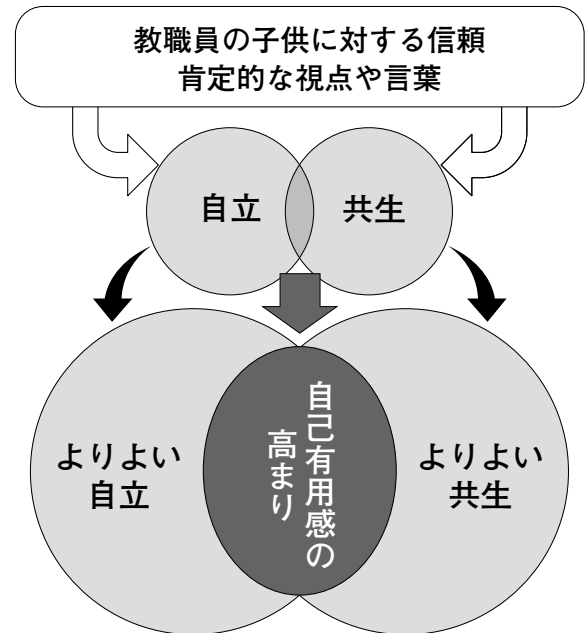
3 研究の実際

- (1) 【視点1】教職員が共に学び合い、同僚性や教師力を高める研修体制の構築

①目指す子供像の共通理解と明確な指導指針の提示

「子供たちの自己有用感を高めたい」という重点目標の実現のためには、教職員がベクトルを揃え、一丸となって取り組めるような明確な指導の指針が必要であると考えた。そこで、「自立」(自立の精神に溢れ目標に向かって挑戦する姿)、「共生」(心豊かに共に支え合う姿)という観点からアプローチすることで、自己有用感を高めることを目指し、子供にも分かりやすい合言葉「いきいき・あったか」を提示した。

チーム蛭川で子供の「自己有用感」を高めるために



一人一人がよりよく「自立」する姿を学級・学年・学校内に広めることで「共生」の輪が大きくなる。そのような関わりの中で自己有用感を高めていくことを目指す

子供にも分かりやすい合言葉

いきいき(自立)あったか(共生)

—教職員に示した自立と共生のイメージ図—

合言葉を基に教職員一人一人が、それぞれの立場で子供たちの自己有用感を育てるには、どのように支援することが必要かを考えることができた。また、子供たちにもこの言葉を提示することで、全校児童・全教職員みんなで「いきいき・あったかな蛭川小学校をつくっていこう」という意識を高めることができた。

②協働的な研修体制の構築

～この指とまれ研修の実施～

本校の教職員構成のバランスのよさを強みとして、経験豊富な中堅・ベテランが今まで培ってきた教育観や教育技術を若手に伝承していく「この指とまれ研修(全10回)」を企画した。

令和元年度 チーム蜷川「この指とまれ研修」講座案内	
その1 6月11日(火) みんなで笑い合える学級づくり -毎日の関わりでリフレッシュ- 講師 2年1組 ○○ ○○先生	その2 6月25日(火) ここがポイント！合唱指導 -小技あれこれ- 講師 5年1組 ○○ ○○美先生
その3 7月30日(火) 学級づくりのあれこれ伝授します -「輪りの会のメニュー」「席替えの仕方」伝授します- 講師 3年1組 ○○ ○○先生	その4 7月30日(火) 老田博士の「わくわく実験教室」 -4年「もの体積と力」- 講師 理科専科 ○○ ○○先生
その5 8月20日(火) 読み書きにつまずきのある 子供達の理解と支援 講師 通級指導 ○○ ○○先生	その6 8月20日(火) チーム支援で最強の応援団に！ 困った子供は困っている子供 ～一人一人の困り感を捉え、 困った行動に対処してみよう～ 講師 こぼと2組 ○○ ○○先生
その7 9月11日(水) 子供の言葉を大切に 関わりを生む板書 -子供の発達の読み方と書き方のコツ- 講師 4年1組 ○○ ○○先生	その8 9月25日(水) ボールは友達！サッカー指導 -技の上達・チーム力を高める練習法- 講師 6年1組 ○○ ○○先生
その9 10月9日(水) 子供が主役になる学級会 -学級会の前に、これだけはやる- 講師 6年4組 ○○ ○○先生	その10 11月5日(火) 「自分っていいな」と思える 道徳科の授業 -教材文と子供を重ねて教材研究しよう- 講師 1年1組 ○○ ○○先生

【「この指とまれ研修」案内】

この研修を企画するに当たっては、若手のニーズを把握することはもちろんのこと、中堅・ベテランの温かい学級経営の根底にある思いや優れた技術、専門性を生かすことができるようにしたいと考えた。また、自主的な気持ちを大切にするため、参加は、希望する講座への自主参加型とした。

第3回の「学級づくりのあれこれ伝授します」では、ベテランのA教諭が、席替えの仕方や子供同士が認め合える活動について講座を開いた。①人間関係を育てるため②学級全体が落ち着いて学習するためというA教諭が考える席替えの目的や席替えの方法を聞いた受講者からは、発達段階に応じて席替えの目的を伝えたり、子供の希望を反映させたりする等、新たな視点をもつきっかけとなったという声が聞かれた。

また、よいところ探しの方法の一つとして「Xさんからの手紙」を参加者全員で体験した。この体験で、ほめられる嬉しさを体感した新規採用教

諭は、2学期に自分の学級でも実践した。実践した理由を尋ねると、「大人である自分自身もほめられると嬉



【自分の席替えの秘訣を説明するA教諭】

しかったので、子供たちにもほめられる嬉しさを味わわせたかった。学級で行ったところ、子供たちが次はいつやるのと言ってくるぐらい楽しみにしている。」と笑顔で語っていた。さらに、道徳科の授業「短所は長所」とも関連して「Xさんからの手紙」を実践することで、子供たちが「自分では気付いていないよさを友達は見つけている。認められている。」という安心感をもったり、友達同士でよさを見付け合う温かい関係づくりにつながったりしたことを感じていた。

- ・自己肯定感の低くなりしがちな特別支援学級の子供たちが目を輝かせて取り組めそうな活動なので、是非やってみよう。人を褒める言葉が見付けにくい子供には、褒め言葉が書いてあるカードの中から見付ける方法がよいと思う。
- ・褒め言葉が溢れたり、手紙を通して自分のよさに気付くことができたりする場面が積み重なっていくことで、一人一人が自己有用感を感じ、自信をもって取り組むことができるのだと思う。自級でも継続していきたい。

—第3回「この指とまれ研」感想カードより—

他の9回の研修においても、日々の学級経営の中で知りたいことやすぐに実践できることを学べたことは、若手にとって実り多いものとなった。また、ベテランにとっても、自分が培ってきた指導を振り返り、継承できる喜びを感じる場となった。

教科や領域が違う全10回の研修であったが、根底に共通していたのは、子供のよさを温かく捉える姿勢や



【第4回研修の様子】

困っている子供に寄り添い支援をする構えであった。同じ職場で働く教職員の同僚性や教師力を高めて、子供の自己有用感を高めていくための具体的な方法を研修する場になったと感じている。

(2) 【視点2】学校全体で、子供のよさを捉えて認める場の設定

①教職員が子供たちのよさを発信する「いきいきあったかプロジェクト」

47名の教職員全員が以下のことをねらいとして昼の放送時間に、子供たちのよさや成長について語りかける「いきいき・あったかプロジェクト」を提案し、5月から12月にかけて実行した。

「いきいき・あったかプロジェクト」のねらい

【児童】

自分たちの姿を「いきいき・あったか」の観点から肯定的に捉えた放送を聞くことで、自分たちの日々の営みの中に「いきいき・あったか」な姿があることを再確認し、自信をもって心豊かに学校生活を送る。

【教職員】

子供たちの姿を肯定的に捉えることを大切にしながら教育活動を推進していく事の大切さを再認識する。また、他の教職員の放送を聞き、子供を捉える視野や視点の違いから、感じたり気付いたりする学びの場とする。

子供たちは、「いきいき・あったかプロジェクト」のテーマソング「パプリカ」の曲が流れると、「今日は誰がどんな話をしてくれるのだろう」と興味津々で放送を聞いていた。また、放送後には、担任を拍手で迎えたり、自分たちのよさを放送してくれたことに対して「ありがとう」と感謝の気持ちを表す姿が見られた。

11月の放送では、校務助手*のTさんが、始業前のわずかな時間を利用して奉仕活動「ちょこっとボランティア(ちょボラ)」を行う6年生に向けて以下のように語りかけた。

*校務助手とは、学校の環境整備などに従事する職員

みなさん、こんにちは！

いつも職員室や印刷室で仕事をしている助手のTです。みなさんの中にも顔を見たことあるなという人もいます。美味しい給食を食べながら、少しの間、耳と心を傾けて聞いてくださいね。

いろんな優しさが溢れる蠅川小学校・・・

私は数ヶ月前に左手を怪我して数日間包帯をしていました。そんな私に何人かの人『どうしたの？大丈夫？』『痛くない？』と心配そうに声をかけてくれました。何気ない一言がうれしい気持ちにさせてくれました。



また朝の時間、5・6年生が少しの時間を見つけて、進んで玄関や階段を掃除してくれています。そんな姿を見て私は、自然と温かい優しい気持ちになります。いつも学校のためにありがとう。そして、優しい気持ちにさせてくれてありがとう。

—校務助手Tさんからのメッセージ—

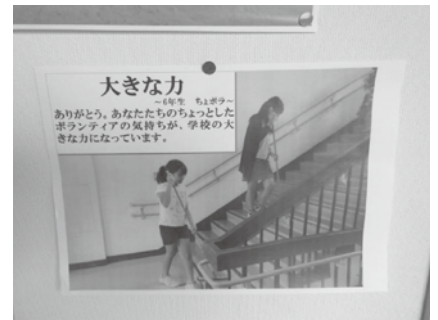
6年生にとって、Tさんからのメッセージは、その後の奉仕活動を継続していく力となった。この

ように普段、子供たちと直接関わるのが少ない教職員からも、自分たちのよさを放送されたことは、「自分も役に立っている」「自分たちを見守ってくれている人がいる」という自信や安心感につながっていった。

子供を肯定的に捉える感覚を磨き合い、それぞれの眼で捉えたよさを伝えることは、教職員と子供たちの心が響き合う取組となった。

②子供たちが自分のよさを自覚するための「ほめ写プロジェクト」

子供たちが自分のよさを自覚できるように、普段の学校生活の中で見られる素敵な姿を写真に撮り、一言メッセージを添えて掲示する「ほめ写プロジェクト」を行った。



【ほめ写プロジェクト】

このプロジェクトでは、子供が無意識に行っているよさを子供自身が自覚できるようにすることと、子供同士がよい姿を認め合うことができるようにしたいと考えた。

そこで、写真に添えるメッセージには、感謝の言葉とともに、子供たちのよさが伝わるキーワードを入れ、行動の根底にある「いきいき・あったか」な気持ちが伝わるように心がけた。

体育館渡り廊下に掲示された自分たちの写真を見た6年生は、「恥ずかしいな」と言いながらも「役に立つ喜び」「認められる喜び」を感じていた。前述でTさんが紹介した奉仕活動「ちょこっとボランティア(ちょボラ)」は、6年生のクラスから始まったものだが、今では他のクラスにも広がっている。自分のよさを認められることで、さらなる意欲につながる。よい姿を見た子供たちが「自分も役に立つことをやってみよう」とする姿につながったと考える。

学校全体で子供のよさを捉え、いろいろな方面から感謝の言葉を伝えることの大切さを再認識した。

③校長から子供や教職員への応援メッセージ発信

温かい学校風土を醸成する礎として、校長自らが、温かい言葉がけをすることを大切にしたいと考えている。そこで、学校行事の機会等、折に触れて、頑張っている子供たちや教職員への応援メッセージを発信し掲示した。

やま ぐに じょう た
山縣亮太選手

2016年リオデジャネイロオリンピック
4×100mリレー 銀メダリスト
2017年9月 全日本実業団対抗陸上選手権
10秒00(日本歴代2位)

いっ しょう けん めい
**一生懸命は
美しい**

これは山縣選手が小学生だったころ、当時の先生がくり返し話してくださった言葉で、今でも大切にしている言葉だそうです。
皆さんも、学習発表会に向けて、これまで一生懸命に練習を重ねてきましたね。見ている方にも必ずそれが伝わりますよ。
自信をもって…ステージに立ってください。

【学習発表会の掲示】

中でも、「一生懸命は美しい」「本気」というメッセージは、担任が子供たちに向けて話をする際にも使われるようになり、「一生懸命に頑張る〇〇さんを応援したい」という子供の姿につながった。

(3) 【視点3】温かい関わりを生む児童会活動の活性化
「蜷川ぼかぼかほっこりプロジェクト」

1学期からの教職員による様々な取組を通して、子供同士が温かい関わりのおよさを実感したことで、子供たちからも「全校で温かい関わりを大切にしよう」という思いが高まってきた。そして、2学期から運営委員会による「蜷川ぼかぼかほっこりプロジェクト」が始まった。



【ほっこりエピソードを掲示する運営委員】

【ほっこりエピソードの紹介】

・5年1組では、学級集会でゲームをしました。ゲームの罰ゲームは、ものまねでした。一人の女の子が罰ゲームをすることになったのですが、その女の子はものまねが苦手でした。すると、一人の男の子が「代わろうか」と言い、クラスみんなも「代わっていいよ」と交代することを認めたそうです。そのおかげで、みんなで集会を楽しむことができました。

【エピソードを聞いた運営委員の感想】

・この話を聞いて罰ゲームを代わった人も、それを認めた5年1組もみんなも優しいなと思いました。また、心がぼかぼかするいいクラスだなと思いました。
－「ぼかぼかほっこりプロジェクト」放送より－

このプロジェクトでは、各学級で心が温かくなった場面を運営委員がお昼の放送で紹介するものである。その後、紹介されたエピソードは、学級の集合写真と共に「ぼかぼかの木」コーナーに掲示された。

自分たちの学級の温かい関わりを見付け、それに対する肯定的なコメントをもらえるという双方向の関わりは、学級や仲間のよさを見つめ直すきっかけとなった。また、この「全校みんなで温かい関わりを大切にしよう」という思いは、放送委員会による「ありがとうメッセージ」や広報委員会による「学年版ぼかぼかの木プロジェクト」等に派生していった。

「いきいき・あったか」に加えて、子供たちの発

案した「ほっこり」の気持ちが温かな関わりや自己有用感の高まりを生み、児童会活動や異学年交流の活性化を促進したと考える。

4 研究のまとめ

(1) 成果

取組の成果は、子供の意識の変化に表れた。

「生活振り返りアンケートの結果より」※満点3点

質問項目	9月	12月
がんばって取り組んでいることがある	2.60	2.69
友達のがんばりを応援している	2.59	2.68
自分は友達や先生から大切にされている	2.59	2.60
自分は、誰かの役に立っていると感じる	2.22	2.39

全体的に数値が上がっている。特に「自分は誰かの役に立っていると感じる」は、高い数値になった。

この子供の意識の変化を生み出したのは、以下の手立てを講じ、教職員の意識を高めたことに起因するところが大きかった。

①教職員の目指す方向性を揃える

年度当初に「いきいき・あったか」の理念を提示することで、47名の教職員の目指す方向性を明確にし、全員が同じ方向でぶれずに自信をもって指導・支援にあたることができた。ベクトルを揃えて取り組むことは、子供たちや児童会活動の「全校で温かい関わりを大切にしよう」という意識に繋がっていった。

②教職員の同僚性・チーム力を高める

温かい学校風土の中で、子供の自己有用感を育むには、教職員同士が信頼関係を高め、協働して取り組もうという姿勢が必要である。今回のOJT研修は、相互理解を深め、謙虚に学び合う機運を高めるものとなった。このチーム力の高まりが、「肯定的な視点で子供のよさを捉え、温かい言葉がけをする」という子供のよさを認める温かい学校風土の醸成に相乗効果をもたらしたと実感している。

(2) 課題

平成30年度からの様々な取組において、「チーム蜷川」としての一体感や、子供たちの自己有用感の高まりを感じている。

今後は、このチーム力を生かして、特別な支援を要したり、不登校等の問題を抱えたりしている子供の自己有用感を高めるには、どのような関わりや支援が必要かについても、研鑽を積んでいきたい。

本気の話合いによる安心・安全な学校づくり

— 教職員と子供たちの参画意識を高める学校運営の取組から —

富山市立奥田北小学校 校長 永 森 悦 子

1 はじめに

本校は、全校児童数375名、学級数14学級である。平成27年度にコミュニティ・スクールモデル校の指定を受け、平成29年度にはコミュニティ・スクールとなり、地域とともに歩む学校として5年目を迎えた。

平成30年度4月着任当時の本校は、学校全体が落ちつかない状況がみられ、次のような課題が見受けられた。

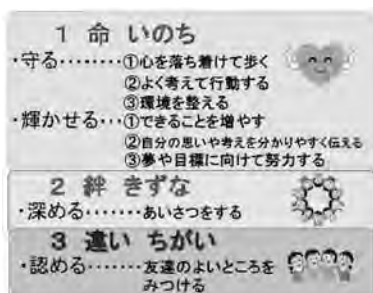
- ・学習に落ち着いて取り組めない子供たちの存在が、他の子供たちに自主的・積極的な活動を展開しにくい雰囲気をつくっていた。
- ・教職員は、子供たちの個々の問題行動への対応に追われ、それぞれに思いはあったが、学校としての対策が十分とは言えない状況にあった。

そこで、「安心・安全な学校づくり」を目標として、教職員・子供たちの自主性を引き出し、協働性を高めることによって、教育環境改善に取り組むことにした。

以後、2年間にわたる実践を報告する。

2 学校運営における基本姿勢

筆者は担任時代から「子供たち一人一人のよさを引き出し輝かせる」「いじめは絶対に許さない」を基本として教育実践を行ってきた。このことは校長となった現在でも変わらない。合言葉「命・絆・違い」を掲げ、教職員・子供たちのよさを認めてほめるなどの実践を積み重ねることにした。(右図)



子供たちのみならず、教職員であっても「聞いてくれない」「やらされている」という意識をもつと、意欲や希望をもって仕事や活動を行うことはできない。常に問題を自分のこととして捉え、考えることが大切である。そのため、教職員や子供たちの意見を引き出し、本気で「自分たちで安心・安全な学校をつくる」という意欲を育み、実践を積み重ねることを根本の願いとして学校運営を進めることにした。

3 学校改革の柱

学校改革の柱は、次の3つとした。

- (1)「本気の話合い」…教職員の意識改革
- (2)既存の組織「学校づくり会議」を活性化…子供たち自身の手で学校をつくりかえていく(自浄作用)
- (3)校長からの提案

- (1)教職員は多彩な個性をもっている。その個性を学校運営に生かしていきたい。個人が問題意識をもっている一人の努力だけでは学校全体に波及せず、根本的な問題の解決には至らない。そこで教職員間で意見交換し、解決策を見いだしていく「本気の話合い」を行うことにより、学校全体の問題を共有し、積極的に向き合っていくことができるよう意識を高める環境づくりを行うことにした
- (2)コミュニティ・スクールである本校では、「学校づくり会議」が年2回行われる。これは、学校運営協議会の委員の方々と子供たちが「自分たちの学校」について意見交換し合う場である。このような形態の会議は珍しいと言われているが、形骸化しているように見受けられたため、この会議を子供たちの積極性を引き出す場に変えていくことにした。
- (3)教職員・子供たちの状況を日々観察する中で、必要と思われる活動を校長から提案し、進めていくことで、よいスパイラルを生み出そうと考えた。まず教職員・子供たちのよいところを捉えて伝え、学校全体をポジティブな雰囲気にする。トップダウンはできるだけ避け、教職員・子供たちが自分たちの意見や取組によって学校が改善していくことを感じ、一人一人が参画意識をもてるようにすることを心がけた。

4 具体的な取組

(1)「本気の話合い」<H30.5月>

問題行動やけがなどが多いため、臨時に話合いの場をもつことにした。目的は、教職員が学校の現状を共通理解することと、その対応についての協議にあった。しかし当日、出張で参加できなくなり、会議を教頭等に任せ帰校後、話合いの結果を

聞いた。すると特に具体的な意見は出なかったと報告を受けた。これではだめだと感じ、もう一度全員を集合させ、「みんなで協働して取り込まないと問題解決にはつながらない。本気で話し合おう」と提案した。これが「本気の話合い」のネーミングの基になった。担任は日々問題点と向き合い「何とかしなければならない」という切実な思いを実はもっていた。思いを話すことができる場が必要だったのである。筆者の提案を受けて個人々々の成功した事例が次々と紹介され、それを基に本校の実態に合う具体策を決めることができた。以下、具体的な活動を列挙する。

①褒め言葉シャワーの実践(1年～4年) <H30.5月～>

子供たちの自己肯定感が低いことが行動に悪い影響を与えているのではないかという意見から、褒める場を設けることになった。また、言語化することが子供たちの言語環境を整えることにつながると考えた。実施のポイントとして、各担任が自分なりの工夫を加えることができたようにした。

②異学年縦割り班活動の実践 <H30.6月～>

6年生がリーダーの役割を担うことで日頃の言動に良い影響があるのではないかという意見により、異学年縦割り班活動(ひまわり班活動)を行うことになった。

ア「毎月1回わくわくタイム」(13:05～13:40)

縦割り班活動では、6年生が中心となり活動し、振り返り活動の司会もする。

イ縦割り班による全校遠足(富岩運河環水公園)

6年生がリーダーとなり、現地で班ごとに活動するとともに、行き帰りも含めて安全を見守る。

上記①②の活動を全校で確実に実施するとともに、問題が発生した場合には、間髪を入れず「本気の話合い」を行い、具体策を考え全校体制で進めていくことにした。この後、本校独自の具体策が生み出され、取り組まれていくことになった。

③「家族あったかハートデー」の誕生<H31.1月～>

様々な問題行動が起きることについて、学級懇談会の場で「学校で今起きていることを知れば親として子供と話ができ、何か役に立てるかもしれない」という意見が出された。そのことを基に、校長から「学校で起こっていることを保護者に知らせ、家族間で話合いできないか」と投げかけた。全員で「本気の話合い」を行った結果、毎月1回実施している家庭学習週間中の土日に「家族あったかハートデー」という名称で、家族で話し合う日を設定することとなった。テーマは学校か

ら提供し、その時起きている問題について親子で話し合うことができるようになった。

④「ノーメディアデー」の実践 <R1.6月～>

小学生にもネットを経由したゲームが浸透しており、本校でも子供たちの間でトラブルが起きていた。そこで、「本気の話合い」を行った結果、以下のような長期に渡る具体的な対策が提案された。

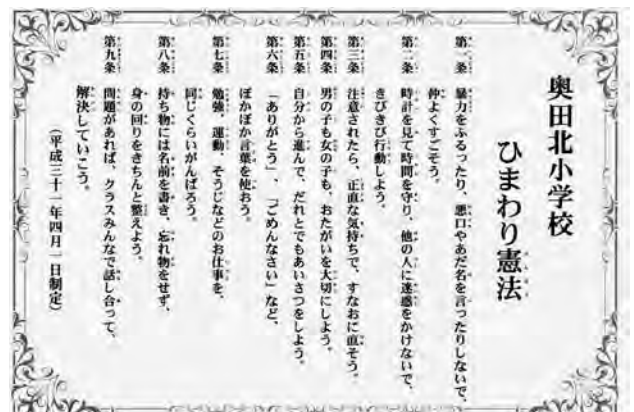
- 6月・「ノーメディア・読書デー」の意識化。図書委員会とタイアップ
 - ・学習参観において「ネット利用・ネットモラル」についての授業を実施。(中・高学年)
 - ・参観後の保護者懇談会でネット利用の実態について保護者間で意見交換 → 家庭での話合い
- 7月・家族あったかハートデーで「ネット利用について」をテーマに話合い。
- 9月・外部講師を招聘。「ゲーム脳について」講演(中・高学年対象)
- 11月・学校保健委員会：保健委員会の発表および外部講師の講演のテーマ「メディアとの付き合い方」
 - ・学校保健委員会後、1週間各家庭で取組・保護者アンケート実施。

この学校の取組が、次年度のPTA活動「ネット利用について考える」につながっていった。

(2) 学校づくり会議

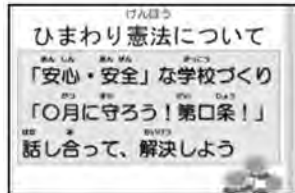
これまでの学校づくり会議は、児童会役員が司会を行い、参加する子供は6年生代表、委員会代表だけであった。そこで、全校の子供たちが学校をつくる一員であることを自覚するように、学校づくり会議に参加するメンバーを「全学年・全学級代表」へと変更した。テーマは「安心・安全な学校づくり」とし、各学級で話し合ったことを、学級代表が持ち寄り意見交換することにした。会議の場では、各学級の意見を提案し、学校運営協議会委員(地域・保護者代表)からも助言を頂き、実践に結び付けるようにした。

平成30年度1月第2回学校づくり会議の中で、「4年生が6年生に注意すると、6年生から「乱暴な言葉」を言われた」という問題提起があった。そのため、そのことについて話合いが行われることになった。



6年生から「社会で学んだ憲法をつくったらどうだろう」と提案があった。会議後、ひまわり委員会や6年生が中心となって考え話し合い、3月末に「ひまわり憲法」が作成された。(前頁下図)

平成31年度初めの「本気の話合い」において、ひまわり憲法を子供たちに浸透させていきたいという意見が出された。具体策として、4月から各クラスにおいて「〇月に守ろう第〇条」として、「今月はひまわり憲法第〇条を重点に守る」(右図)という取組が始まった。



その年の第2回学校づくり会議は全校公開で行った。(右写真)

「安心・安全」な学校をつくることを、子供たち一人一人に自分のこととして捉えて欲しいと考えたからである。



その後の学校づくり会議でも、毎回、地域・保護者の代表者とともに、真剣な意見交換がなされており、参加する子供たちの主体性や積極性を高めることにつながっている。

(3) 校長からの提案

子供たちの実態を把握した上で、実施したらよいと考えたことを提案し下記①～⑤を行った。

①第1回全校道徳(H30.6月)

全校道徳の導入時に、休憩時における様々な場面

を描いた一枚の絵を提示する(右写真中央部)。子供たちは、されたら嫌なことの順に番号をつけ、理由を付箋に書く。その付箋を右写真のように絵の外周部に貼り、縦割り班毎に一人一人が説明する。



これで人により「されたら嫌なこと」の認識は違うことが明らかになる。これを踏まえて、これからどのようなことに気を付けて生活していけばよいかを話し合う。子供たちは人により感じ方は違うことを認識し共有できた。

また、グループの話合いでは、リーダーである6年生が司会を担当する。下学年を前に、役割を果た

さざるを得ない状況に導くことが成長につながる。実際に、6年生の貴重な体験の場となった。

教員においても、全体司会を担当することで、指導力が高まることを期待した。



グループで司会する6年生

全校道徳で「自分と感じ方が違う人がいることを常に考えて行動してください」と話した後、最後に先生方に起立してもらい「奥田北小の先生方は、みんなのことを大切に思っています。何かあればいつでも、どこでも、だれにでも相談してください」と子供たちに語りかけ締めくくった。

全校道徳は、H30年11月に「いじめ」をテーマに、R1年1月「きまりを守る」をテーマに実施した。

②全校児童へのプレゼンテーション

着任してからすべての始業式では合言葉「命・絆・違い」を基に具体的な行動を指針として示している。また終業式では、これまでの子供たちの活動・活躍を写した写真をもとに、合言葉に照らしながら、プレゼンテーションを行っている。「一生懸命な姿」「心を動かされるような活動」などの写真を示して語りかけることは子供たちの心に「次も頑張ろう」という思いを育んでいる。

認められている自分たちの姿を映像の中に見付けることで自己肯定感が高まると共に、問題点の共通理解やよい方向に向かって解決していこうとする自主性が生まれていると感じている。

このプレゼンテーションは子供たちのためだけではない。各学級での取組の紹介は、担任の指導や支援のよさを認めたものであり、教職員のやる気を引き出すものと期待している。また、学校全体の動きを「見える化」することで取組を振り返る機会となり、教職員間における価値観の差や温度差を少なくし、新たな目標やアイデアが生まれることを願っている。

③いじめ調査を始める(H30.10月～)

同年9月に、放課後「学級委員がいじめをしているかも」という紙片を拾った子供が職員室に届けてくれた。紙片を見て、即座に、下図のいじめ調査を毎月実施することに決めた。このねらいは、従来の学期毎の調査を毎月実施に変更することで、子供たちの

いじめアンケート

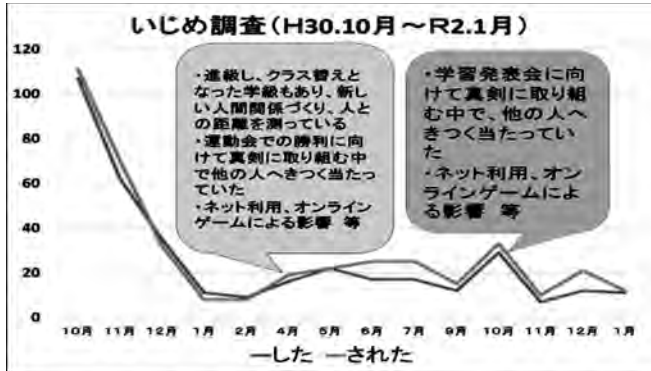
() 学年 () 組 名前 ()
 わたしは、いじめを・・・

した	見た	聞いた	された	ない
----	----	-----	-----	----

※あてはまるところに○を書きましょう。いくつ○がついてもいいです。

様子を細やかに把握するという目的と、危機を敏感に感じるセンサーを教職員・子供たちが常に働かせ対応して欲しいという願いを込めている。また、形式は○をつけるだけの簡単なものに変更した。

毎月の調査結果を基に、即座に子供たちから話を聞き、丁寧に対応していった結果、いじめの数は減少していった。(下グラフ)



④「まとめ」の掲示

学校づくり会議や外部講師の講演、学校保健委員会などの取組をまとめ、児童ギャラリーに掲示した。子供たちのみならず教職員も掲示を見ることで常に振り返り、意識することができるように配慮した。

⑤こまめな情報収集

教職員に取組の進捗状況をこまめに聞く。聞かれた者は、言葉にすることで経緯や効果を論理的に考え、やりとりの中で計画や実施内容に不明瞭な部分があることに気付いたり、新たなアイデアを思いついたりする。取り組む際のポイントを指導する場合もあるが、これを継続していく過程で次第に力量が高まる。

5 取組の成果

(1) 教職員の変容

平成30年度からの「本気の話合い」では、教職員が意見交換し、具体策を打ち出し、共通理解をして、確実に実行に移すことにより、成功体験を積み重ねてきた。また、始めはうまくいかなかったも、その都度の話合いで柔軟に軌道修正することも経験した。令和元年度は引き続き「本気の話合い」において建設的な意見交換がなされ、見通しのある具体策が速やかに決定され、全職員が役割を担って実行されていくようになり、同僚性が高まってきた。生徒指導上の問題が減少し、時間的にも精神的にも余裕が出てきた。

教職員の参画意識が高まり、各自が担当している分掌の仕事においても、「本気の話合い」のような積極的な意見交換がなされ、具体策が打ち出され、実行され始めた。

(2) 子供たちの変容

ひまわり憲法が、子供たちの生活の中に浸透し、ひまわり憲法を基に、子供自身が自分の生活について振り返ったり、周りの友達に決まりを守るための声かけができたりするようになってきた。

ひまわり委員会の子供たちは「挨拶カウント」「挨拶自己紹介」など、次々とアイデアを出し、挨拶運動を楽しく積極的に進めることができるようになり、大きな声で、笑顔で挨拶ができる子供が増えてきた。

学校づくり会議における5年生の意見

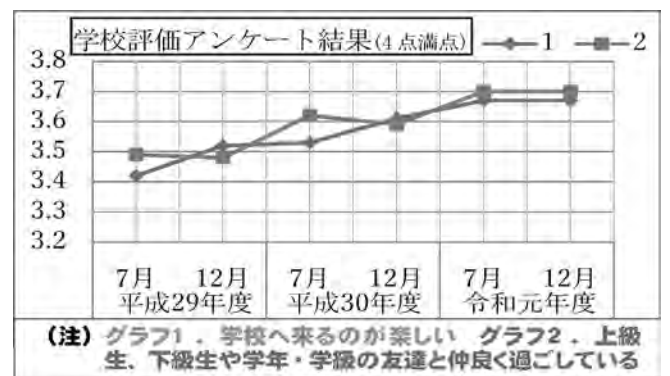
1学期の全校道徳で「されて嫌なことは人それぞれ違う」ということを多くの人が気付きました。「自分がされて嫌なことは、相手にもしないようにしていきたい」という意見がたくさん出ました。

全校道徳をしてからは、合言葉の「違い」を意識して相手のよさを見付けたり、相手のことを考えて行動したりしようとする人が少しずつ増えてきていると思います。

学校づくり会議に長年出席していただいている富山大学の先生からは「昨年度の第1回では子供が自分の言葉で意見を言っていた。話合いの視点が明確であった」「第2回では、子供たちが堂々と意見交換をし、真剣な話合いが行われていた」と評価していただいた。

6 終わりに

学校が徐々に安心・安全な場となりつつあることが下記のグラフからも推測できる。



(注) グラフ1. 学校へ来るのが楽しい グラフ2. 上級生、下級生や学年・学級の友達と仲良く過ごしている

自分の意見が認められ実践に活かされていくことが、子供たち、教職員の意欲、自己肯定感、充実感につながっていく。「本気の話合い」での子供たちや教職員の新しい発想や行動力に驚かされることが増えてきた。今後も、子供の実態、教職員の個々の力量と特性を把握し、そして家庭や地域を巻き込んで、合言葉「命・絆・違い」を掲げて日々、実践を積み重ねていきたい。

先行学習が生徒の「分かる」実感の獲得に及ぼす効果

— 中学理科の授業改革による実践を通して —

高岡市立五位中学校 教諭 土江田 美穂

1 はじめに

生徒が学校で過ごす時間の6割以上は授業である。「友達とのおしゃべりが楽しみ」「部活動をしたい」という生徒もいるが、そんな時間はわずかである。生徒が本当に「学校は楽しい、学校に行きたい」と思うには授業が面白くなければならぬ。また、多くの生徒は「実験は好き」であるが、その半分以上は「理科は好きではない」と答える。その理由は「分からないから、難しいから」である。そんな生徒たちに「分かる」実感を味わわせたいという思いを長年抱いていた。

昨年春、内地留学で先行学習(授業の前半で知識を習得させ、後半は知識を活用して深く考えさせる手法)を提唱する鍋木良夫先生(授業高度化支援センター)の元で研修する機会を得た。そこで、これまでの問題解決型学習とは異なる先行学習でアプローチする授業改革を実践し、その効果を研究することにした。さらに、生徒に「分かる」を実感させるには、深い学びを促す対話的なクラスをつくるための授業スキルが必要と考え、合わせて研究することにした。

2 研究主題設定の理由

(1) 問題解決型学習の課題

生徒に課題と時間を与え、さあ考えなさいと言っても本当に課題解決に取り組めるのはほんの一握りの生徒だけである。高学力生徒の多くは、既存の知識として習得済みであることが多い。一方、低学力の生徒は知識が不足しているため考えることができず、ただ時間が過ぎるのを待つことがほとんどだった。

また、課題や予想を立てるのに多くの時間がかかり、深める時間がなくなったり、まとめまで至らなかつたりすることも多かった。

(2) 先行学習の価値

予習をすると「間違いを恐れず挙手できる」「友達の見解を聞いて理解できる」など安心して学びに向かえる。また、知っているからこそ実験の際の見方がより焦点的になり、深く理解したいという気持ちが強くなる。そして、何よりも知識

の習得に悩んだり気付きを待たたりする時間を必要としないので、時間を短縮できる。さらに、その時間を活用課題に取り組みさせることで、深い学びに至らせることが可能となる。

3 仮説

研究主題に迫るため、次の4つの仮説を立てた。

【仮説1】 授業冒頭に予備知識を与えて考える土台を整える(先行学習を行う)と生徒は主体的に考え、活動することができる。

【仮説2】 授業前半で習得した予備知識を活用して解く問題(活用課題)を与えると生徒は協働し、対話して考えを深めることができる。

【仮説3】 授業冒頭と終末での2回の自己評価(理解度評定)と振り返りをさせると生徒は理解の深まりや進歩を自覚し「分かる」を実感することができる。

【仮説4】 教師が対話的なクラスをつくる授業スキルを身に付けると生徒は互いに学び合い、考えを深めることができる。

4 研究実践の内容と方法

仮説検証のため、令和元年度1年生93名、3年生54名を対象に9月から次の①～⑨の実践を行った。

(1) 【仮説1】に基づく実践

①長期休業中の課題として、次学期に学習予定の教科書のまとめの文章や図を視写させる。

②生徒が予習したり、教師が授業冒頭で単元の重要箇所(教科書のまとめの部分など)を教えたりして、生徒にあらかじめ学ぶ内容を知らせる。

(2) 【仮説2】に基づく実践

③1人では解決することが難しい教科書を超える活用課題(チャレンジ問題)を生徒に与え、3つの立場(一人で考える・友達と考える・先生に教えてもらう)から自己決定させた後、取り組ませる。

(3) 【仮説3】に基づく実践

④授業(単元)冒頭で共書きした直後と授業(単元)終末時に5段階(1「ぜんぜん」分からない・2

「少し」分かる・3「まあまあ」分かる・4「かなり」分かる・5「説明できる」くらい分かる)で自己評価させ、理解度がどの程度変わったかを実感させる。(2点評価)

- ⑤授業(単元)終末で自己評価後、授業(単元)冒頭に共書きした文章について「振り返り」をさせる。
- ⑥大単元の終了時にまとめとして分かったことを「～とは～だと分かる」という表記で箇条書きさせる。

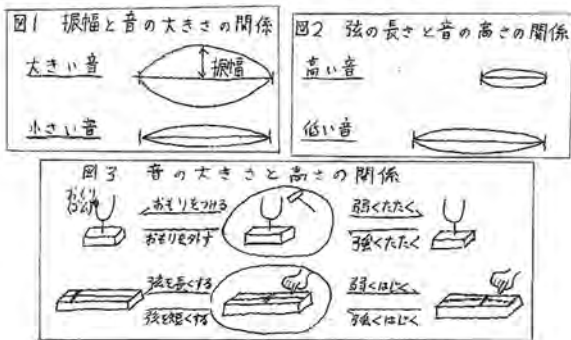
(4) 【仮説4】に基づく実践

- ⑦教師が重要箇所をしゃべりながら板書し、それを生徒に同時に聴写(共書き)させる。
- ⑧話し合いがしやすいよう隣同士をくっつけるなど、座席配置を工夫する。
- ⑨隣同士の話し合い活動(バズ・セッション)を取り入れたり、離席して解き方を教えてもらったりさせる。

5 実践結果と考察(仮説の検証)

(1) 実践授業例(1年 音の大きさと高さ…2時間)

- ①習得させること：「音源の振幅が大きいほど音は大きくなり音源の振動数が多いほど音は高くなる」こと。
- ②予習内容：教科書P166図1～図3の視写。(下図)



- ③活用課題：2つのガラスのコップに水を入れて、スプーンでたたくと音がする。高い音が出るのは水が多いときか少ないときか。

④活動内容

㊦上記の習得させることを共書きさせ、共書き文についての理解度を自己評価させる。(表1)(1回目)

表1 理解度評定の基準

5	分からない友達に分かるように言える。
4	共書き文中の言葉同士の関係が分かる。言葉に関係する言葉をはっきり思い起こすことができる。
3	共書き文中に知らない言葉はない。
2	共書き文中に知っている言葉が1つ以上ある。
1	共書き文中に知っている言葉が1つもない。

㊦共書き文中の(振幅・振動数などの)重要語句やオシロスコープによる音の波形や振動している弦のストロボ撮影写真など、図についての補足説明をする。

- ㊦モノコードを用いて、弦の振動と音の大きさや高さの関係について生徒実験を行い、確認させる。
- ㊦活用課題(チャレンジ問題)を与え、3つの立場から自己決定させ、考えを深めさせる。
- ㊦もう一度共書き文についての理解度を自己評価させ(2回目)、振り返りをさせる。

⑤実践授業を行った感想

チャレンジ問題で「先生に教えてもらおう」を選択した生徒たちはノートを持って集まり、教師の説明を熱心にメモする姿が見られた。説明後、クラスメイトに教えるよう指示すると、喜んで教える姿が見られ「ちゃんと教えたよ」と報告してくれた。いつもは教えてもらうばかりの生徒たちが、時々説明に詰まりながらも、生き生きとクラスメイトに教える姿が見られたり、教わる生徒も説明が理解できないと真剣に質問する姿が見られたりした。そして、どちらも満足感あふれる笑顔を見せてくれたことがとても印象的だった。

(2)生徒からの評価

先行学習を取り入れた授業の実践①～⑨について、自由記述による事後アンケートを行ったところ、どの実践もある程度の評価が得られた。(表2)

表2 生徒が有効だと思った取組(%)

実践	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
1年	66 ※1	47	15	34	23	26	47	52 ※2	42
3年		65	39	52	35	24	41		52
平均	66	54	24	41	27	25	45	52	46

(※1:1年のみを対象 ※2:1年の1クラスのみを対象)

特に【実践②】では、1年、3年共に高い割合で、生徒が最も効果があると答えた。

実践②についての自由記述より

- ・予習で分からなかったところを、授業で注意深く聞くようになった。
- ・内容を理解した上で実験などの実証にうつることができるので、何のための実験か、どうしてこうなるのかなど、+αで考えられるようになり、頭に入りやすい。

【実践③】では、1年の評価は高くないが、3年の約4割の生徒が有効と答えた。3年の評価が1年より高かった理由として、3年では授業規律が確立されており、高学力の生徒を待たせることなくチャレンジ問題にじっくりと取り組めたことが考えられる。

実践③についての自由記述より

- ・基本が分かっているか確認できる。
- ・習ったことが活用できるか確かめられる。
- ・考えることができ楽しかった。解きがいがある。

一方【実践⑤】では、有効と答えたのは3割弱の生徒に過ぎない。「振り返り」をさせる時間が十分に確保できなかったことが原因と考えられる。

実践⑤についての自由記述より

- ・分かることと分からないことがはっきりした。
- ・書くことで何を理解したかが分かるようになった。
- ・もう少し振り返りの時間を長くしてほしい。

(3) 先行学習の効果(仮説ごとの傾向)

以下は実践①～⑨に対する主な考察である。

仮説1 主体的に考え、活動する生徒

【実践①】生徒の自由記述より、視写することで予習のよさに気付いたことが分かった。予習した内容を授業で学ぶため、学習機会が2回以上に増えること。予習して分かった部分と分からなかった部分が明確になること。より意識して授業で学ぶので記憶に残りやすくなることなどが理由として考えられる。繰り返し学ぶことで習得すべき知識の定着につながったと感じたのではないかと思う。

【実践②】実験前に答えが分かるとつまらなくなると心配する生徒も最初はいたが、回を重ねるにつれ予め学習する意味を理解し、納得して取り組む姿が見られるようになった。また、最初に予備知識を持つことで、安心して主体的に活動する生徒が増えた。さらにノートから、実験に対してより焦点的・分析的な見方をすることができるようになったと感じることができた。

仮説2 協働し、対話して考えを深める生徒

【実践③】「先生に教えてもらう」を選択する場合、高学力の生徒は自分の考えを確かめるために、低学力の生徒は素直に分からないから、聞きに来ていた。一斉指導の中では「どう考えても分からない」とやる気なさそうに座り時間が経過するのを待っていた生徒が本当に学ぼうと目を輝かせて質問に来た。その時の顔は本当に真剣そのもので、この姿が見られるようになっただけでも活用課題を与えた価値はあったといえる。

学力が中間の生徒も、友達同士で盛んに話し合い、学び合っていた。それでも分からないときは教師に教えてもらいに来た。説明を聞いて分かる。「なーんだそういうことか」と満足げに戻っていき、たった今自分が教えてもらったことを友達に教える姿が見られた。生徒の中には「チャレンジ問

題が楽しい」「これまで理科は嫌いだったけど、好きになった」という声も聞かれるようになり、他人に「教えてもらう」「説明する」という行為を通して、楽しく学習することができ、さらに理解をより確かなものにするのができた。

しかし、活用課題では学習指導要領を超えた内容を取り扱うことが多く、頻繁に取り入れることは厳しい。また、授業のどの場面でも活用課題を用意できるわけではない。

今後の課題としては、活用課題の内容や取り入れるタイミングなどを工夫し、メリハリのある授業展開とすること。活用課題にしっかり取り組ませるための時間を確保することなどが必要である。

仮説3 進歩を自覚し、「分かる」を実感できる生徒

【実践④】半分以上の生徒は終末の自己評価が冒頭より1段階以上上がった。(表3)2段階以上上げた場合は、「振り返り」を見ても明らかに理解度が深まっており、「分かった」を実感できていた。しかし、評価を1段階上げて、さほど理解が深まっていない場合や逆に理解度が下がる場合もまれにある。そんな時は個別に指導し、どこでつまずいているのかをはっきりさせると、自己評価を修正して上げることもあった。

授業の冒頭と終末の2回評価することで「自分は今日の授業を通して学びが深まった」とメタ認知させ、次の学習への意欲を高めたり、「理解度が深まった」ことを実感させたりすることができた。

表3 自己評価の変容の割合(%)

変容	変容なし	1段階 up	2段階 up	3段階 up
1年	20	53	26	1
3年	14	60	24	2

【実践⑤】終末で自己評価を2段階上げたり、高い評定になったりした場合には「振り返り」をしっかりと書く生徒が多い。「〇〇がわかった」ではなく、「〇〇とは△△が□□することだと分かった」という表記で書くよう指導すると、個々の表現に微妙な違いが見られ、教科書の丸写しではなく、この生徒は本当に「分かっている」と感じ取ることができた。「振り返り」の内容や書く量については、自己評価との関連性があると考えられる。

今後の課題としては、「振り返り」をさせる時間を十分に確保することや毎時間の「振り返り」の方法、その評価の仕方を工夫する必要がある。

【実践⑥】始めは時間を与えても何を書いてよいか分からない生徒もいたが、箇条書きにする内容が増えたり、図やグラフ、式などを入れて説明した

りする生徒も見られるようになった。ワークシートの穴埋めをさせるのではなく、すべて自力で書くしかりとした表現力が必要だと痛感した。

今後の課題としては、自分で考えて自分の言葉で書く指導を重点的に行い、書く力を伸ばす必要がある。

仮説4 学び合い、考えを深めることのできる生徒

【実践⑦】1分間視写テスト(教科書の本文を1分間で何文字視写したかの調査)の結果、より高学力(評定)の生徒の方が視写文字数が多いと分かる。(表4)

表4 1分間の視写文字数と評定の関係

評定	5	4	3	2	1
1年9月	54.5	53.9	49.6	43.1	37.8
3年9月	55.0	51.9	49.5	49.3	32.0

つまり、書く力が学力に相当関係しているといえる。さらに、4ヶ月間での視写文字数の増加率は、低学力(評定)の生徒の方が大きくなった。これは、共書きでの聴写や振り返りなど、書く機会を増やすことで視写文字数の増加につながったと考えられる。(表5)

表5 1分間の視写文字数の増加率(%)

評定	5	4	3	2	1
1年	116	121	117	129	135
3年	111	109	107	252	240

共書きを始めて5ヶ月が経過すると、約3分の1の生徒が教師とほぼ同時に書き終わられるようになり、共書きのできる生徒は増えた。残りの3分の1の生徒も少し遅れて(1~5分後に)書き終わることができた。しかし、残りの3分の1の生徒は書き始めるのが遅かったり、聴写する意欲がなく、板書を見ながら遅れて視写したりしていた。

今後の課題としては、全員が同時に書き始めるようにすることや聴写する意欲の乏しい生徒、ノートを書こうとしない生徒への指導の工夫などがあげられる。

また、共書きの際に、「学習の要」となる重要語句などを朱書きさせている。確実な理解につなげるための朱書き部分を選び出す判断基準を明確に持ち、生徒の学習が深まるように支援していきたい。

【実践⑧】この人となら話し合いができる、質問できると思う生徒を3人挙げさせるソシオメトリーをとって近くの席には必ず話し合いができる生徒を配置した。担任をしているクラスでは、さらに席を隣同士くっつけ、すぐにバズ・セッションができる環境を整えた。

席は、仲の良い友達が近くにいた方がよいと答えた生徒が半数以上いたが、一方的に教えたり、教わったりする関係ではなく、互いに教えると教えられる役割がチェンジできるように学力の近い生徒同士で話し合うことがより望ましいと考える。

【実践⑨】活発に話し合える環境を整えたことで、ためらいなく、男女問わずすぐに話し合いができるようになった。高学力の生徒は説明する力がつき、理解が深まった。学力が中間か低い生徒は、教えてもらうことによって確実に理解することができ、みんなが「分かる」を実感することができた。

6 成果と課題

(1) 成果

仮説1~4に基づく実践①~⑨の結果、概ね先行学習による効果を実感することができた。生徒から「考えることが楽しい」や「分かるようになった」という声が聞かれたことは自分自身の自信にもつながり、大きな充実感を得ることができた。より効果的な学習にするため教材研究に時間をかけるようになり、大変やりがいを感じている。

(2) 課題

どんな発言、発表も受け入れてもらえる安心できるクラスでないと、先行学習で授業を展開しても深い学びに到達しないことを再確認することができた。今後は授業規律の徹底を実践していきたい。また、「振り返り」での立証は十分に確認できなかったため、表現力をつける指導に重点をおいて書く力を高めた後、改めて検証していきたい。

7 おわりに

実践を通して、先行学習による授業展開の仕方や教師による補足説明によって成果に大きな差が出ると気づき、教師の力量が問われていることを実感できた。また、すべての単元において先行学習が効果的なわけではなく、先行学習に向いている単元と向かない単元があることも実践して気付いた。今後は、先行学習一辺倒ではなく、問題解決型学習と先行学習を巧みに使い分けることのできる二刀流を目指していきたい。また、先行学習という指導法の効果をより客観化する根拠データの質的向上を目指すと共に、授業規律を確立できる自分自身の授業スキルの習得と生徒の「書く力」の向上を目指し、継続して生徒が「分かる」を実感できる授業を実践していきたい。

学力向上を目指すカリキュラム・マネジメントの実践

— 豊かな教育活動を創造する教務主任としての実践を通して —

入善町立上青小学校 教諭 水 島 佳 織

1 はじめに

学力向上は学校の使命であり、教員にはその目的に向かい日々努力を求められている。しかし、業務が多様化、複雑化し、教員の多忙感が増す一方である。いかに学力向上策を進めていくかは大きな課題である。令和2年度から全面実施される新学習指導要領の基本理念を実現するためにも「カリキュラム・マネジメント」は必須であると述べられている。ここ数年でクローズアップされた学校の「働き方改革」も意識しながら、本校での取組を見直してみることにした。

2 主題・副題の考え方

カリキュラム・マネジメントとは、

- 1 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- 2 教育内容の質の向上に向けて、児童たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- 3 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。(文部科学省HPより)

そこで、教務主任の立場で本校での教育活動をこれら三つの観点で見直し、実践することにした。

3 カリキュラム・マネジメントの実践

(1) 系統的・教科横断的な視点

① 理科におけるカリキュラム・マネジメント

本年度、3～6学年までの理科を担当した。全学年を指導するにあたり、年間指導計画、教科間の系統性を確認した。すると、3学年「比較」4学年「関係付け」5学年「条件制御」6学年「推論」のように身に付けなければならない問題解決能力の系統性があることを学んだ。そこで、日々の授業でもその系統性を意識して計画・実践することにした。

授業を進める中で、授業の流れ【図1】を改善した。導入では簡単な実験を行うことで「不思議だな」と感じたことを基に「課題」を設定した。その

課題を解決するために予想を立てて実験を行った。



【図1】学習の流れ

<グループごとの課題による実験>

5学年「ふりこのきまり」と6学年「水溶液の性質とはたらき」では、共通の実験ではなく、グループごとに追究したい課題を設定し、実験を行った。実験後、結果と考察の発表の際、キーワードを板書に位置付け共有した。

<まとめと振り返り>

各グループの実験の結果と考察から、全体的にどんなことが言えるのかを話し合いを通して言語化していった。予想と異なる結果に驚いたり、既習の内容と関連付けたりして表現していた。

単元の終末には、この単元で分かったことをまとめ、知識を整理し、定着させる姿が見られた。【図2】

塩酸に金属を溶かした液を蒸発させて出てきたものは、元の金属の性質とは違う。また、塩酸は、金属の性質を変化させる。

【図2】6学年 ノートでのまとめの例

<活用としてのおもちゃづくり>

3学年「明かりをつけよう」「じしゃくにつけよう」の学習の終末でおもちゃづくりを行った。学習で身に付けた知識を活用する姿が期待できるためである。電流の回路ができていないと明かりがつかないなどのトラブルには、何が原因か考え修正する＝プログラミング的思考を行う姿が随所で見られた。

<定着を図る流れ>

単元末にテストの予定を知らせると、家庭学習で自主的に復習する姿が見られた。誤答ケア(間違い直しやポイントの確認)を学習の中に位置付けた。【図3】



【図3】誤答ケアの流れ

誤答ケアの重要性と、いつ取り組むとよいかを

他の教員にも広めた。火・金曜日の朝の活動の時間（登校から朝の会までの約20分間）【図4】が有効だと分かった。

月	火	水	木	金
読書	レベルアップ	体力	なかよしタイム	クラスタイム

【図4】朝の活動メニュー

＜理科観察実験アシスタントとの連携＞

毎週2回勤務の理科観察実験アシスタントには、授業内容に合わせた実験器具、用具等の準備、片付け、授業中の実験・観察のサポートのみならず、次年度の授業を見据えた器具・用具・材料等のリストアップも依頼し、使いやすい理科室環境づくりに努めた。

＜次年度の課題＞

思考力向上には、児童の関わりを生んだり、思考を深めたりする発問や言葉かけが必要である。どの教員の力量も高まるように教科に即したある程度普遍的で効果的な発問や言葉かけを研究したい。

② 総合的な学習の時間におけるカリキュラム・マネジメント

3学年では、社会科で学校のまわりの様子を学習した。校区の学習をする中で、天然記念物、農家、施設等との出会いがあった。その学習と関連付けて「入善町のたからもの」の単元を設定し、学習した。

5学年では、学校田での稲作と併せてバケツでの稲栽培を行った。成長の様子を観察しながら栽培し、収穫、脱穀・糲摺りを全て手作業で体験した。また、地域の「しめ縄保存会」を講師に招聘し、しめ縄づくりを体験した。これら一連の学習を通して、稲作の奥深さ、苦勞、人々の知恵を学ぶ学習となった。

児童の思いを繋ぎながら、教科と関連付けていくことで時間を生み出すことができる。また、体験学習を取り入れる単元構成により、児童にとって、「主体的・対話的で深い学び」が可能となると考える。そこで、次年度に向けて気付いたことを書き入れ、カリキュラム・マネジメントを進めていくことにした。【図5】

3学年	4学年	5学年	6学年
わたしたちがえらぶ入善町のたからもの	祭りのいいところを見つけよう(次年度は3学年へ)	近くて遠い稲	もったいないプロジェクト
社会科 地域学習	社会科 地域学習 ⑧ 環境教育	社会科 農業 家庭科	家庭科

【図5】総合的な学習の時間のテーマと教科との関連

③人権週間における全校道徳の実施



【図6】全校ゲーム

12月の全国人権週間に合わせて、人権教室、人権集会を行っている。人権教室では、人権擁護団体の方を招聘して下学年は紙芝居、上

学年はいじめについての作文の朗読を聞き、人権について考えた。また、企画集会委員会が運営した人権集会では、「あったかエピソード発表」「劇・人権について考えよう」「全校ゲーム」【図6】等を通して、全校児童が同じ時期に人権について考える機会を設け、共通体験をすることで、人権意識の高まりが感じられた。【図7】

- ・自分もこんなことをしているかもしれない。
- ・わたしは相手の気持ちを考えているかなと思いました。
- ・ちゃんと思っていることを伝えたらいいと思いました。
- ・これからの給食当番やなかよしタイムで仲良くしていきたいと思いました。

【図7】児童の振り返りより

④ 年間指導計画の可視化と朱書きによる更新

各担任には、学期ごとに年間指導計画の単元の入れ替えや内容の変更等の朱書きを依頼している。また、次年度から始まるプログラミング教育を見据えて、どの単元でプログラミング的思考が可能かどうか、実践を基に記録してもらっている。【図8】

	9月	10月	11月	12月
理科	5 陽と月の形	6 大地のつくり 7 かわり続ける大地	8 ぶこのはたらき 9 水溶液の性質とはたらき	9 水溶液の性質とはたらき
家庭	5 楽しくソーイング(10)めざせ! 買い物名人(8)		6 くふうしようお	食事
総合	最高学年として輝こうーみんながってみんないー地域が輝くために一人一人ができること、もったいない、どうする??			プログラミング的思考

【図8】年間指導計画の朱書きの例

⑤ 各種教育と道徳教育との関わりの見直し

各種教育と道徳教育との関わり一覧を全教職員が使用する印刷室に掲示している。【図9】各種教育と関連付けた計画にしたことで繋がりを意識できると共に、各担当者が当事者意識をもって見直すことができる。このことにより、学校運営への参画意識の向上が期待できる。また、この反省を生かして次年度の計画立案をすることになっている。

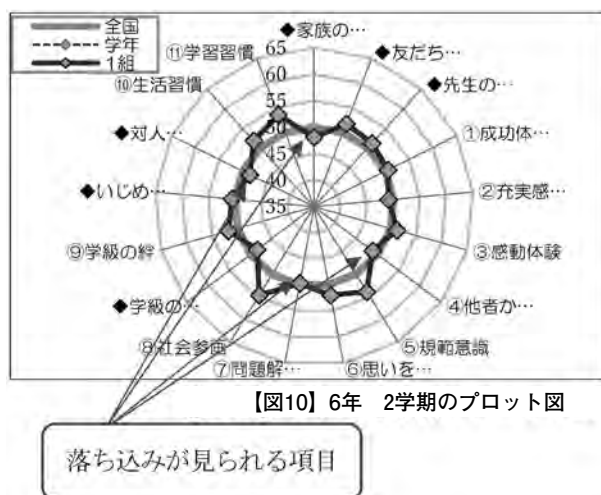


【図9】各種教育・道徳教育との関わりの見直し

(2) 各種データに基づくPDCAサイクルの確立

① 「i-check」を活用した学級経営

入善町では今年度からQ-Uに代わりi-checkを導入した。導入初年度ということもあり、データの読み取り、分析には皆不慣れであった。入善町教育委員会主催の研修会に参加し、伝達講習という形で各学級のデータ【図10】を分析し、学級経営における具体策を策定する研修を行った。



【図10】6年 2学期のプロット図

学級として落ち込みが見られる質問やいじめに関する質問への回答を分析することで個別対応が必要な児童や、学級として意識して取り組まなくてはならないことが明確になった。【図11】

- ・友達や教師の支えを感じられるような関わりをする。(相互評価や朱書き等)
- ・友達関係で悩んでいる児童の面談を早急に行い、思いを聞く。
- ・学級の人間関係づくりに関するエクササイズを取り入れる。
- ・学習規律を見直し、徹底する。
- ・一人一人への対応と同時に全体を高める。

【図11】担任の方策

担任や授業担当者が当事者意識をもってi-checkを分析し、クラスの状態に応じて具体策を考えることで、学級経営や授業に生かすよう共通理解した。一度の活用で終わらせず、PDCAサイクルを循環させることで効果が期待できる。

② 学習部会での振り返り

学習部会では年に2回アンケートを取って振り返りを行っている。授業力向上の研修、学習部会での反省で課題となったのが「児童の効果的な関わり合い、学び合いが生み出せないこと」である。学校としてどのように話し合う姿を育てていくかの系統性を共通理解する必要があるという考えに到達した。そこで、新学習指導要領に基づく教科書のカリキュラムを参考に「話す、聞く」学習の系統性を整理することにした。

(3) 人的・物的資源の活用

① 全校で行う「沢スギの日」の活動

本校校区には、国の天然記念物「杉沢の沢スギ」があり、全校児童が継続して春と秋の2回「沢スギの日」として地域学習をしている。



【図12】沢スギの日の学習

1～4学年は生活科や理科、社会科としての学習、5・6学年は特別活動の勤労生産・奉仕の活動として位置付けている。ここでも、各教科等との関連を図りながら、地域の素材や人材を活用して学習している。本年度は学びの履歴を記録することで学習の系統性を明確にすることと、学習時間がより効果的になるように地域の方との打ち合わせを密にすることを改善した。

② パソコンサポーターを活用した研修



【図13】タブレット活用研修

来年度は、プログラミング学習が導入されることにより、教員の不安感が大きい。そこで、パソコンサポーター勤務日の放課後に、タブレット

を活用した授業法についての研修会を設定した。【図13】教員自身がタブレットに触れることで実際の授業場面を想定し、パソコンサポーターに質問しながらスキルを身に付けている。

③ 英語専科教員の授業参観

外国語、外国語活動も全面実施に備え、英語専科教員の授業参観の時間を設定した。

参観者は、学習の流れ、ALTとのやりとり、電子黒板の活用の様子を参観し、参考にしていった。その中で、「電子黒板の活用方法の研修がしたい」

「ALTとの打合せをする時間設定が必要になる」「評価のことを考えると、担任をしながら複数クラスの外国語を担当することは難しい」などの意見が聞かれた。打合せ時間の確保や授業担当の決定、今後の研修の参考とした。また、今年度の教材教具、評価の文例は資料としてデータベース化し、次年度以降も活用できるように蓄積する。

(4) その他の取組

① 保護者・地域との連携



【図14】学年便り

担任は、児童の頑張りを学年便りで積極的に発信している。【図14】行事や学習での様子を伝えることで、保護者からは「頑張っている姿に安心した」「うれしく思う」などの感想が寄せられ、双方向のコミュニケーションツールとなっている。

同様に、教務主任は学校便りの執筆を担当し、定期的に発行している。学校生活の様子やそれぞれの担当者が発行する各種便りはホームページにも掲載している。

② 学力向上の環境づくり

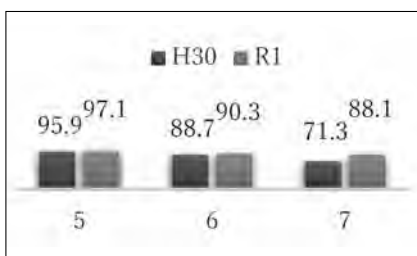
富山県総合教育センター学力推進チーム作成の「チャレンジ問題(3~6学年)」を印刷し、解答と共に並べ、誰でも自由に問題を選びチャレンジすることができる場を設定した。【図15】色刷りした解答も置いておくことで、自分で○付けや間違い直しができるようにした。また、取り組んだプリントを記録し、担任からスタンプやシールをもらって励みにしている。児童は、家庭学習、授業での補充学習で活用している。



【図15】チャレンジコーナー

4 実際の結果と考察

(1) 児童の意識の変化

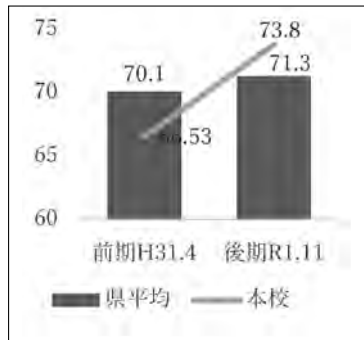


【図16】児童の意識

学校評価アンケート5「授業中、先生や友達の話をしっかりと聞いている」6「家で、学年の決まった時間、

勉強している」7「授業中、自分の考えや意見を発したり、友達の考えを聞いたりして学び合っている」に「よくあてはまる」「だいたいあてはまる」の合計ポイントのH30、R1推移は【図16】の通りである。いずれもポイントが上昇している。家庭学習強調週間の取組や研修の成果が見られる。

(2) 学力調査結果

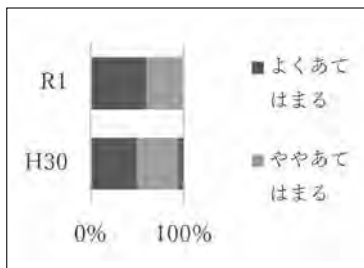


【図17】学力調査の推移

6年理科学力調査の県平均点と本校の平均点を比較した。

【図17】4月実施では県平均を下回っていたが、11月には2.5ポイント上回った。誤答ケアや知識の定着を図ったことの結果が見られた。

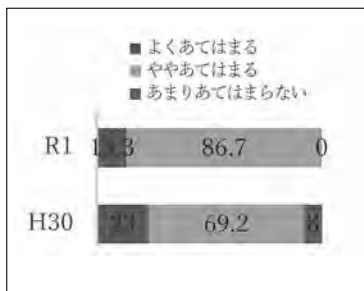
(3) 保護者の評価



【図18】保護者の評価

1月実施保護者アンケート【図18】で「学校は学力の向上に向け、指導の工夫に努めている」に対して「よくあてはまる」のポイントが上昇し、「ややあてはまる」を合わせると100パーセントに達した。保護者は学校の姿を肯定的に捉えていることがうかがえる。

(4) 教員の評価



【図19】教員の評価

教員の「指導方法の工夫をしているか」【図19】に対して、よくあてはまるは10ポイント減少したがややあてはまるを合わせると全員が努力していると答えている。今後も、教員のモチベーションを保ちながら、実践していきたい。

5 終わりに

校長の学校運営を具現化するために、どのように教育活動をデザインしていくとよいのか、日々手探りの状態であった。過去の取組を生かしつつ、新しい視点で見直し、改良しながら共に実践した職員に感謝する。

小規模校の強みを生かした学校経営の工夫・改善

富山市立古沢小学校 校長 松田 康子

1 はじめに

本校は呉羽丘陵の豊かな自然に恵まれ、富山市ファミリーパーク、富山県呉羽青少年自然の家等の施設もあることから、地域との連携事業や体験学習等、地域のよさを生かした教育活動が続けられてきた。

児童数の減少により平成28年度から複式学級を有することになった。30年度からは複式学級2学級となり、今後もこの編制が続く見通しである。

特色ある教育活動が展開できるよさを残しつつ、学校を取り巻く様々な環境の変化に対応し、学校規模に見合った持続可能な教育課程をつくっていくことは本校の喫緊の課題であると考えた。

2 研究主題と研究内容

学校体制の変化が教職員に大きな影響を与えていることを感じていた。教職員への「多忙化解消につなげるためのアンケート」や、保護者への「学校評価アンケート」から、次のような実態が見えてきた。

- ・担任、特に複式学級担任に強い負担感がある。(地域との連絡調整に手間が掛かる。複式授業の進め方が分からない。校務分掌が多く多忙感がある。)
- ・みんなで取り組もうという結束力が落ちている。(学校教育目標等に対する教職員の目標達成意識に温度差。異動の影響、経験の差も大きい。)
- ・保護者は「複式になると先生の目が行き届かず学力が落ちるのではないか」「異学年の子供が学級にいて、友達関係は大丈夫か」と不安に思っている。

そこで、「児童と教職員が明日も来なくなる、活力ある学校」を、小規模校の強みを生かした教育活動の推進と、教職員がやりがいを感じながら協働できる体制づくりを通して目指したいと考えた。

○研究主題

小規模校の強みを生かした学校経営の工夫・改善

○研究内容

- (1) 地域、学校の特徴を生かす教育課程の編成と授業改善
- (2) 学校評価を機能させてつくる協働体制
- (3) 学校の抱える課題を生かす教育活動

3 研究の実際

(1) 地域、学校の特徴を生かす教育課程の編成と授業改善

① 地域団体との連携学習の見直しと充実

本校のすぐ側に富山市ファミリーパークがあり、年間を通して利用している。特に次の活動は地域の貴重な材を生かした本校ならではの事業である。

- ・ホクリクサンショウウオの里親活動(6月)
- ・「呉羽丘陵にホテルを呼ぶ会」とのホテル保護活動→カワナ放流、ホテル観察会(6月)
- ・「悠久の森」での学習発表(8月)

校長として会議に出席した際、これらの連携事業には地域の現状や活動に対する関係者の思いや願いがあることに気付かされた。しかし、学校側は、カワナ放流は当日のみの参加、「悠久の森」の発表は前年度の実践を作り直して、といったように、活動の価値を感じているものの、恒例の行事に児童を参加させているというような状態だった。これでは、地域のよさ、価値ある体験の機会を児童の成長に生かせていないと考え、児童が主体的に地域に関わり、体験を通して学ぶ持続可能な学習として成立させられるよう、指導計画の見直しを行った。

- ・複式学級3,4年生の総合的な学習の時間で、ホクリクサンショウウオとホテルを1年交代で中心の学習材にし、1学期完結型の単元学習とする。
- ・「悠久の森」では1学期の学習成果を発表する。

この見直しにより、次のような事前学習や活動も行うことができた。

- ・カワナ放流前に事前学習として、家族、地域の方への聞き取り調査や調べ学習をする。
- ・放流するカワナを自分たちで採集し放流する。
- ・ホテル観察会への参加呼びかけ、観察する際の注意喚起を3,4年児童が行う。

学校から積極的に、児童に経験させたいこ

とや学んでほしいと考えていることを地域の方々に伝えることで協力を得ることもできた。自分たちで調べ、話を聞き、考え、体験したことで、これらの連携事業は「させてもらう活動」から「自分たちが責任をもって行う古沢小の大切な学習」に変わった。

児童が地域への愛着や環境保護への関心を深め、「悠久の森」や、「富山市SDGs－ESDシンポジウム」で堂々と発信する姿に、価値ある体験学習ができた成果を感じた。



【写真1：カワニナ放流】

② 複式学級の授業改善

小規模校では、教師と児童が信頼関係を築きやすく、学習の個別指導を丁寧に行えるという長所がある。しかし、教師が細やかに丁寧に支援することが、児童の主体性や課題解決する力、話し合う力等の育ちを阻んでいるということはないだろうか。教師主導の授業から脱却することが授業改善の課題であると考えた。

そこで、グループ学習や学習リーダーを立てた学習を積極的に取り入れることで、「楽しくて力の付く」授業を目指し、児童の「自力」を育てていこうと考えた。研究の重点にしたのは、次のようなことである。

- a 児童が主体的に学び、見通しをもって学習を進めるための学習計画の工夫と学習環境づくり
- b ねらいを明確にした、ペア・グループ学習と全体学習へのつなぎ及び授業における教師の役割の見直し
- c 学習リーダーの育成

a 学習計画の工夫と学習環境づくり

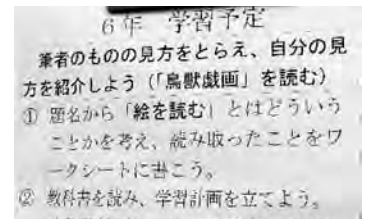
- ・導入の段階で、児童と話し合いながら学習のゴールを意識した基本の学習計画を考える。
- ・ねらいを明確にもち、児童の学習状況に合わせて柔軟に学習計画を見直すなどしながら、児童主体の学習を展開する。
- ・学習予定(単元を通した学習計画)や、学習の足跡を掲示し、さらに、本時の授業の流れ(学習活動と時間配分等)、学習ガイド(話し合いの進め方、声のかけ方例等)」を用意する。

上記のように、間接指導時(わたり)には児童同士で学習に取り組めるように、直接指導

時には、機を捉えた関わりができるようにと意識して手立てを講じた。

教師が授業改善に取り組んだことで、児童も、自分たちの考えをもとにして自分たちで学習を進めていくという授業スタイルを意識し、主体的に取り組む姿が見られるようになってきた。

【写真2：学習予定】



b グループ学習と教師の役割

グループ学習を積極的に取り入れ、互いの考えを伝え学び合う場を大切にしたい。学び合うには自分の考えをもつこと、自分の考えを整理し伝えることが必要と考え、グループ学習の際に、付箋、ホワイトボード等を活用し、考えを視覚化する手立てを取り入れた。

【写真3,4：グループ学習】



研修会では、教員が複式学級の児童になったつもりでグループ学習を行い、間接指導時の学習リーダーの役割や直接指導に入る際の教師の指示や発問等を吟味した。実践的な研修を行うことで、グループ学習時の学習課題、教師が関わる際の構えや役割の重要性について考えを共有することができた。

今後も、児童が主体的に考え、対話的に学ぶ授業づくりを目指し、教員の意識改革、授業力の向上に継続して努めていきたい。

c 学習リーダーの育成

今まで、丁寧に担任に関わってもらったことが当たり前だった子供たちにとって、担任が離れる(間接指導)時間帯に、学習リーダーを中心にグループで学習を進めるのは難しいことである。始めのうちはやはり児童だけでなく、教師にも戸惑いがあった。教科や学習内容によりグループ学習のねらいや進め方も変わるが、児童の授業に対する意識を変え、教師が助言しながら、話し方や聞き方、話し合いの進め方等のスキルを育てていくことが必要である。低学年の内から学習リーダーとして

の成功経験を積み重ねることで主体性を引き出し、課題解決の能力を育てていきたい。

【写真5：学習リーダー】



複式の授業研究を核にして、児童が意見を交わし合い、考え合う授業を目指してきたことで、教師は、意図的に、児童に任せたり待たたりできるようになってきた。児童の聞く力、話す力等も少しずつだが育ってきている。

しかし、次のような課題も明らかになった。

- ・二つの学年の系統性を考え、指導事項を揃える単元構想の仕方もある。様々な視点で、ねらいをもって指導計画を再編する必要がある。
- ・児童が関わり合って学びたくなる、切実感のある学習課題をつくることが重要である。
- ・話し合い方や書く力等のスキルを段階的に育てるための、「育てたい言語能力」の系統表や、手立ての開発と共通理解
- ・保護者の理解を得るための働きかけ

これらの残された課題の解決を目指し、引き続き授業改善に取り組んでいきたい。

(2) 学校評価を機能させてつくる協働体制

○ 学校評価の改善

学校経営の改善には、客観的に学校経営を評価したり、教育活動のPDCAサイクルに積極的に関わったりして、実態(児童、保護者、教職員、地域)に即した柔軟な学校経営を行うことが必要と考えた。学校評価を実効性あるものにしたと考え、次のような視点で、評価アンケート項目の見直しを行った。

- ・学校教育目標、学校アクションプラン等とのつながりがあるか。
- ・児童や教職員、保護者に学校の教育の方向性を示すものになっているか。
- ・児童と教職員は自己評価、保護者の評価は学校にとっての他者評価になっているか。

また、学校評価アンケート(表ア)とは別に、毎月児童向けに学校生活の振り返りアンケート(表イ)も行った。児童にとって身近な「約束」に対して自己評価することで、児童の主体性を引き出すとともに、担任が結果を学級経営に生かせると考えたからである。

表ア：学校評価アンケート(年2回実施)

○H29、H30のアンケート(11項目)から削除した質問

- ・学校がきれいになるように掃除を一生懸命している。
- ・早寝、早起き、朝ご飯が身に付いている。
- ・先生の教え方は分かりやすい。

★R1はアンケートを7項目に減らし、目指す子画像、アクションプランに関わることに限定

- ・学校へ来るのが楽しい。
- ・学校で学習するのが楽しい。
- ・学校の仲間と助け合って活動している。
- ・進んで運動したり体を使って遊んだりしている。等

表イ：「古沢っ子の約束」10項目 (下記は抜粋)

始まりの時刻を守ります

廊下、階段では、静かに歩きます

相手の心を考え、温かい言葉を使おう

気持ちのよいあいさつをしよう

正しい鉛筆の持ち方で丁寧に字を書こう

相手の話を聞いて、サインを送ろう

今年度、ねらいをもって評価内容を見直したり、アンケートを連続させたりしたことは、学校として目指していること、学校教育目標達成に向かう教職員の意識、そして、児童自身の意識も高めることにつながった。行動観察や結果からでは捉えにくい実態や思い、願いをアンケート等で掴んで、学校・学級経営の改善に生かしたり、教育活動一つ一つに対して、そのねらいや実施方法等を共通理解して臨んだりすることを大切にすることで、小規模な本校の強みである機動力を発揮させることができたと考えている。

(3) 学校の抱える課題を生かす教育活動

学校規模の変化で、これまでと同じやり方で教育活動を行うことが難しくなっている。また、教員が、企画力や指導力、授業技術を磨く機会が少なく、出張等に対して十分な補充体制を組めないといった問題も感じていた。

- ・地区別児童会の見直し、代表委員会の廃止
- ・夏期休業中の宿泊学習実施
- ・クラブ活動(クラブは1つ)の担当の輪番制
- ・職員室で全員で行う「よさみつけ」の継続
- ・毎週1回は研修会や共通理解の場の設定

これらは、多忙感の軽減や、「全校児童を教職員全員で育てる」「教育活動のねらいを全員が理解して全員で取り組む」体制をつくること、また、全員で教師力、授業力等を伸ばすことを目指して取り入れたことである。

さらに、本校の次のような特徴を生かし、様々な体験教室や地域の方との交流活動等を、新たに「古沢っ子チャレンジプロジェクト」として教育課程に位置付け、実施した。

- ・長所：一人一人に、活躍の場をつくることのできる(時間、回数等も含めて)
- ・短所：多様な考え方に触れる機会、知識や興味関心を広める機会が少ない。

「チャレンジプロジェクト～達人に学ぶ～」

- ・朗読
- ・パステル画、フラワーアレンジメント
- ・鉄棒、卓球
- ・門松、竹とんぼ、竹鉄砲作り、昔遊び 等

児童にとってこのプロジェクトは、「学校に来ると楽しいことがある」と感じることに繋がったようである。教員にとっても、達人から指導法を教わったり、授業だけでは見えない児童のよさを新たに発見したりするよい機会となり、豊かな体験がもたらす成果を実感した。

【写真6：フラワーアレンジメント】

【写真7：卓球教室】



これらのプロジェクトの中には、あえて、担任が出張等で留守になる日に設定し、残った教員で指導補助をした活動もある。こうすることで担任は授業が遅れる心配をせずに安心して出張等に出掛けることができ、加えて、他教員から子供たちの頑張りや成長、よさ等を伝えられることで、児童理解を深めることもできた。

4 研究の成果

「学校評価児童アンケート」(表ウ)と、「古沢っ子の約束アンケート」(表工)のどの評価項目も達成率(※)が上がった。自信をもって「A評価」を選ぶ児童が増えたことに成果を感じている。特に、学校行事や授業研究が連続した月の数値が最も

高くなったことから、教職員が目標等を共有し、授業や教育活動の充実を図ったことが、児童の満足感、達成感につながったと考えている。

表ウ：学校評価児童アンケート(抜粋)の達成率	7月	12月
学校へ来るのが楽しい	57	70
学校で学習するのが楽しい	61	72
学校の仲間と助け合って活動している	45	56
進んで運動したり体を使って遊んだりしている	79	95

表工：「古沢っ子の約束」アンケート(抜粋)	4月	1月
始まりの時刻を守ります	55	62
廊下、階段では、静かに歩きます	53	58
相手の心を考え、温かい言葉を使おう	67	71
正しい鉛筆の持ち方で丁寧に字を書こう	49	55
相手の話を聞いて、サインを送ろう	58	59

※全員「A評価：当てはまる」を選べば達成率100%とした

<明らかになったこと>

- 地域のよさを生かした教育活動を、子供にとって価値ある学び、豊かな体験ができる機会とするには、学校が地域と願いを共有し、積極的にカリキュラムをマネジメントすることが必要である。
- 少人数だからこそ伸ばすことができる力がある。授業における教師の役割を捉え直し、授業改善を続けることが、関わり合い、主体的に課題解決に向かう子供たちを育てることにつながる。
- 教育目標の実現には、実効性のある学校評価を行い改善の方向性を具体的に示すことが必要である。参画意識が高まれば、組織は活性化し、協働体制を生むことにつながることを期待できる。

5 終わりに

小規模校の課題を解決し、よさを生かすための方法を模索しながら「児童と教職員が明日も来なくなる、活力ある学校」を目指してきた。教育の方向性、活動自体には、地域や保護者、教職員からも好評価が得られ、児童の「学校へ来るのが楽しい」という言葉に成果を感じているが、働き方改革、多忙化解消の視点から残された課題も多い。

今後は、小規模校の課題解決に向かう教職員が、やりがいや自己有用感をもち、主体性や創造性を発揮できる「協働する学校」を目指して、一層、経営改善に努めていきたい。

自ら考え、学び合う生徒の育成

— 学び合いを通じて —

富山市立奥田中学校 教諭 松本知子
(R1 富山市立北部中学校での実践)

1 はじめに

本校は平成22年度より「学び合い」の実践を始めて今年で10年目を迎える。稿者が本校に赴任したのは7年前の平成25年4月である。赴任したときには学習院大学文学部佐藤学特任教授の提唱する「学びの共同体」の学校改革を本校のビジョンの軸にすえ、生徒の学ぶ意欲を高め主体的な学習を引き出す授業改善のための研修を進めていた。月1回の授業研修会と年3回の外部講師による研修会を行うなど、現在取り組んでいる研修スタイルの原型がほぼ整っていた。

本校の取り組みは、協同的な学習を通して生徒に分かる喜びや学ぶ楽しさを実感させ、落ち着いた言動と生涯にわたり学び続ける態度を育てることを目標としている。また、子供たちにコミュニケーション力・協調性・主体性等社会を生きる力を身につけさせたいと考え、現在もどうすれば生徒同士の協同的な学びが成立するのか、授業実践を通して研究している。

本校は富山市の北部地域位置し、4小学校から生徒が集まる、学級数19、全校生徒数576名、教員数37名の中規模校である。生徒は素朴で素直で、地域の特性としては子供同士の協力で、仲間同士で楽しくやるのが好きである。このことは、連帯学習を進めていく「学び合い」の学習スタイルとよくマッチしている。

2 主題設定の理由

佐藤教授「学び」を中心とする授業の考え方

- ・生徒同士、生徒と先生が聴き合う関係をつくり学び育ち合う場にする。
- ・個と個をつなぐ授業を創造する。
- ・同僚性を築く校内研修を行う。

以上の考え方をもとにし、教員一人ひとりが実践を重ねることで、自ら考え学び合う生徒の育成ができると考えた。

(1) 授業改善(一斉授業から協同学習へ)

全ての生徒の学びが成立するためには、教師が一方的に教え込む教師主体の一斉授業から、生徒

同士の協同的な学びのある授業(協同学習)に、授業を変える必要がある。教員は、一斉授業のスタイルを変えることに抵抗があるが、研修や授業実践をとおして「学び合い」の意義を周知し、協同的な学習が行われるようにしたい。

生徒は友達の学びが支援できたとき、本当に嬉しそうな表情を見せる。生徒同士の間関係づくりと協同学習には相互に関連し合う部分があり、相乗効果が期待でき、落ち着いた学校生活にもつながる。

(2) チーム「北部」として

本校は中規模校であり、教諭の数も多い。学校組織の中で多くの教諭の知恵と力を合わせ、生徒に学ぶ力をつけさせることが大切である。そのためには全職員が研修課題や理念を共有し、全校体制で授業改善に取り組むことが、必要である。

3 研究の視点と研究内容

- ・授業で自ら考え学び合う生徒の育成を図る。
- ・授業力向上を目指した研修の場を設定する。

視点1 校内研修会の充実と全職員の共通実践

- ・共通理解で実践の効果の向上を図る。
- ・外部講師より、授業の視点や展開について指導を仰ぎ、教師の見識向上を目指す。

視点2 授業力向上

- ・授業の狙いに沿った学習課題を設定する。
- ・授業改善…学習課題の提示と生徒理解や授業の進め方を工夫する。
- ・聴き合う場を作る…ペア、グループを活用。

視点3 小中連携

- ・小中学校それぞれの指導法や生徒理解の方法を理解する。
- ・発達段階に応じた生徒の育成を目指す。

4 取り組みの概要

視点1 校内研修会の充実と全職員の共通実践

(1) 主な取り組み (平成30年度)

- 4月10日 研修会
- 4月19日 公開授業

5月25日 授業研修会

金沢工業大学基礎教育学部 白木みどり教授

6月19日 公開授業&授業研修会

富山大学人間発達科学部 増田美奈先生

7月30日 夏期小中合同研修会

静岡県 田子浦中学元校長 稲葉義治先生

9月28日 公開授業&授業研究会

東部教育事務所 指導主事

海見純先生 若島毅先生

10月31日 公開授業&授業研究会

富山大学人間発達科学部 増田美奈先生

1月22日 公開授業&授業研修会

東部教育事務所 指導主事 西尾光生先生

2月14日 研修会

※令和元年度は、県中教研特別活動の授業を引き受け、特別活動の授業を重視した研修を行い、研修会の回数も増えた。

(2) 校内研修の充実

授業では「目を磨く」ことが大切である。教員には「学び合い」について研修を重ねている教員と、4月に転入し、「学び合い」に初めて出会った教員がいる。第1回の研修会、公開授業で、学習課題やグループを入れるタイミングなどを、経験してもらい、その後の研修を通して、「学び合い」への理解を深めてもらった。「学び合い」を始めて7年目の平成28年度には、入学時、「学び合い」に初めて出会うまく学びができなかった生徒も、2年生3年生と学年が上がるに従い、学びが上手になっていくという学校になった。令和元年度は、学びに熱心に取り組んでいた教員が多数転出し、「学び合い」の経験の浅い教師も増えたので、より研修の必要性が高まった。

(3) 全生徒全職員の共通理解共通実践

① 4月第1回校内研修会

「話し合う」とは…班で考えをまとめ、班の考えとして誰かの意見を発表する。

「学び合う」とは…班で出た考えを元に、自分の考えを修正しながら確立する。

「学び合い」は「話し合う場」ではなく「聴き合うことから学ぶ場」であることを共有した。

② いつでもグループ活動ができるために

年度当初の職員会で、授業での座席配置は移動教室を含め、男女混合で市松模様の3~4人のグループができるようにすることを、全職員で確認した。さらにグループになったと

きに机の高さが同じになるよう配慮し、令和元年度までに机の高さが全校で統一された。

③ 『「わかる」の4つの発達段階』と『みんなで学び合うために(5箇条)』を全教室の同じ場所に掲示した。

「わかる」の4つの発達段階

わかった人は、説明したつもりなのに伝わらないと、一生懸命になれます。そこに、わかった人のさらなる学びが生まれます。

第1段階；わかったけど、説明できない段階

第2段階；わかったことを、説明・発言できる段階

第3段階；わかったことを説明したら、わかってもらえる段階

第4段階；友達の学びを支援できる段階

みんなで学び合うために(5箇条)

- 1、わかりにくいとき、グループや近くの人に「ねえ、ここどうするの?」と質問しましょう
- 2、自信がないとき、グループや近くの人に「これでいいのかな」と相談しましょう
- 3、質問、相談されたとき、お互いが納得できるまで一緒に考えましょう。
- 4、自信のない友達の意見を、みんなで耳を澄まして聴き合ひましょう。
- 5、みんなで意見をつないで、考えを交流し、学習課題に迫っていきましょう。

視点2 授業力向上のために

生徒の理解が深まる授業の4つの要素

- ・学習課題を提示する
- ・プレートを利用し、モノを入れる
- ・ペア、グループを活用する
- ・まとめやふりかえりを必ずする

(1) 学習課題の工夫とジャンプ課題(理科での実践)

学習課題…模型を使って分子モデルを考える

ジャンプ課題…アルカンの分子モデルを考える

(高校での学習内容)



グループの中で様々な意見が交換される。学習を進める中で、化学式のルールの理解が深まり、化学式を元に模型を使った構造モデルで考える

ことができるようになった。

班ごとに発表し合うと、分子量が多い物質には、異性体も考えることができる事を見つけることができた。

(2) 授業改善

- ・「学習課題」や「まとめ」のプレートの活用



【家庭科】

全教科同じプレートを使用することで、学力低位の生徒でも、授業のねらいとまとめ（振り返り）が確認できる。生徒間の、考え方や知識の共有にも有効であった。

- ・モノを入れる

具体物があることで、やってみたいという意欲づけを図り、知的好奇心の高まりにつながった。



【数学科】

また、具体物は生徒の思考の助けになり、話し合い活動の潤滑油としても役立った。

(3) ペア・グループの活用

小グループで相談する場を作ることで、生徒に自信が生まれた。生徒の声なき声やつぶやきを、意見発言として引き出し、授業理解につなげることができた。友達の考えなどを聞くことにより、自分自身の考えを深めることができた。



【英語科】

視点3 小中連携

平成28年に、学力向上市町村教育委員会推進委託授業の実践教育拠点校指定を受け、校区の4小学校と連携して「小中9年間を支え育てるために」をテーマに合同研修に取り組んだ。「聴く」「授業改善」「学習規律」「家庭学習」を共通のキーワードとして各校で研修し、夏期研修会で成果を共有した。夏期研修会は平成29年度平成30年度と継続して行った。

◇平成28年度の実践

- ・小中合同の挨拶運動や、中学校の定期考査時に小中一斉のノーメディアデーを実施した。小中で兄弟がいる保護者からは好評であった。

- ・学習規律は、小中同じであることが改めて確認され、小中とも教諭の自信につながった。

◇平成29年度の実践

- ・学ぶ姿を形成するために小中がいかに連携すべきかを議題に、「いつ、何を、どこまですべきか」小中それぞれの立場から要望や悩みを出し合い、実践可能な具体策を話し合った。
- ・小中互いの思いや悩みがよくわかった。中1ギャップを生まないためにも、小中の指導の一貫性と連携は必要である。

◇平成30年度の実践

- ・夏期研修会で、稲葉先生に来校いただき、「学習課題」について研修を行った。小中連携も3年目を迎え、初年度小学校6年生だった生徒は中学2年になっている。追跡できる生徒の現在の姿も交えながら、情報交換できた。

5 研究の成果と課題

(1) 外部講師の招聘より

外部講師を招聘する事で、校内研修で実践していることの再確認や修正を行い、教員の研修に対する意欲の向上を図った。また、同じ講師を年2回～3回招くことで、研修の途中経過や達成されていること足りないことが前年度や前回



と比較して、指導してもらえた。教師に新たな気づき生まれ、学びを深める指導技術や授業力を向上することができた。

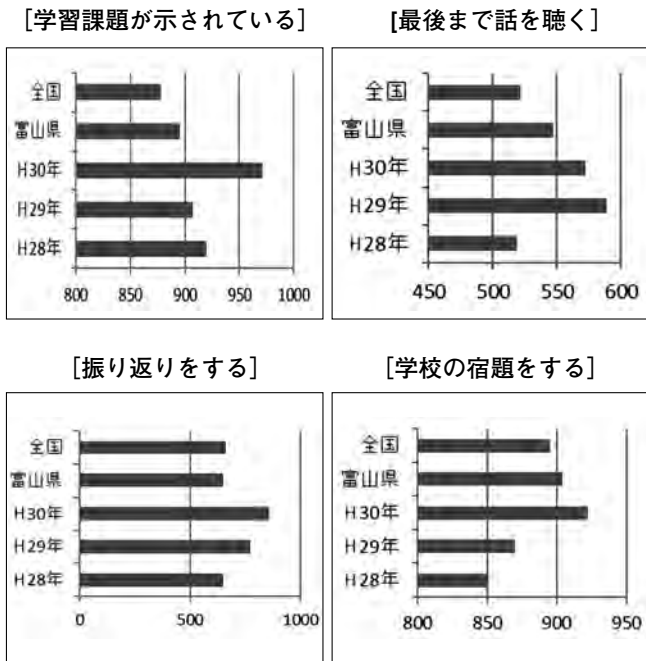
講師 増田先生講話より

(令和2年1月22日研修会)

- ・課題がシンプルだと、思考が複雑になり、学び合いが成立する。課題が複雑だと、思考はシンプルになる。
- ・生徒自身が、他の生徒に援助要請をする力があると、学び合いが成立しやすい。
- ・生徒が何をすればよいかを、しっかり伝える事が大切である。モノを入れると、生徒の学び合いが始まっていた。
- ・生徒は仲間の声をよく聴く。学ぶことが楽しいと思える授業づくりをすることが大切である。

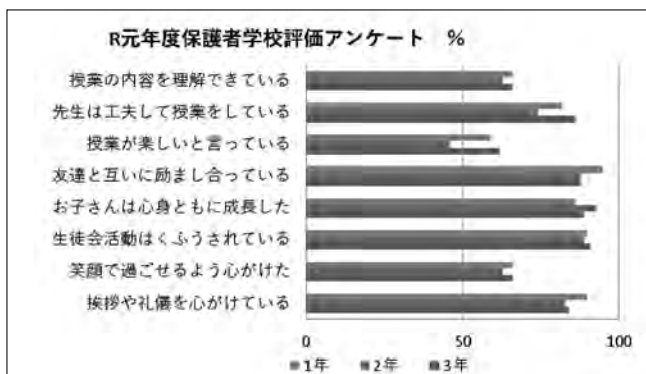
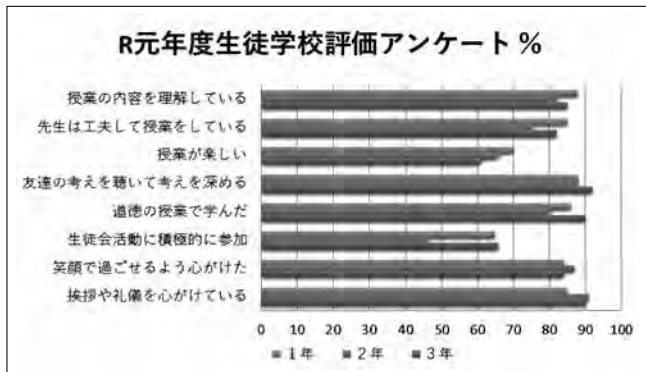
(2) 生徒アンケートより

生徒の学習に対する取り組みについてアンケート調査を行った。結果は平成30年度全国学力調査と比較した。(数字は100%を1000と表示した)



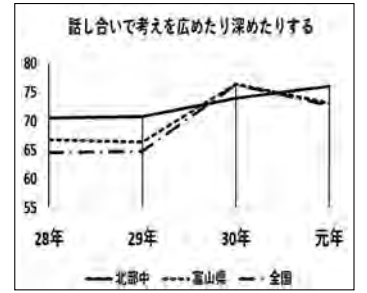
(3) 生徒・保護者による授業評価

アンケートは、年に2回、無記名で実施している。「友達の考えを聴いて自分の考えを深める」項目が、学年を追う毎に学びの成果として現れていて、研修の成果が伝わっている。学校に対する厳しい声もアンケートから読み取れるが、真摯に耳を傾けたい。

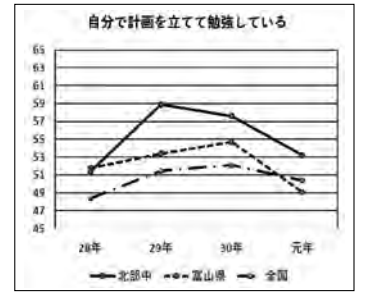


(4) 全国学力学習状況調査より

話し合いで自分の考えを広めたり深めたりする項目は、年を追う毎に増加しており、成果が現れている。自分で計画を立てて勉強している生徒も平均を上回り、自主性が養われている。



学び合いは学年が上がるにつれ成立している。学び合いは、授業の中に必然的に思考・判断・表現・コ



ミュニケーションの繰り返しが起こり、その能力を高めるには有効な授業法である。教師は生徒から学ぶという姿勢で、計画的かつ継続的に実践すれば、教師と生徒との関係性も良好になり、自ら考え学ぶ生徒の育成につながる。

6 終わりに

研修を担当して7年の間に校長は替わった。どの校長も、「学び合い」に理解を示し、それを学校経営に取り入れるだけでなく、自分自身の持つ指導や研修のノウハウを伝授し、研修をサポートしてくれた。若手教員の多くは、授業改善に向けて積極的である。一方、新しく赴任してきた教員のなかには20代に大学で学んだ指導法から抜け出すことができず、授業改善に対する思いが弱い職員もいる。全教員に、「学び合い」の手法と良さを伝えるのには時間がかかる。

今まで学びに取り組みその有効性を知る教師集団が、学びの良さを生徒の実態で示すことで、教師の『学び直し』研修に対する意識改革を図っていきたい。『学び合い』は生徒同士、生徒と教師、教師と保護者との関係の向上に役立つ。教師集団の研修する意欲の持続を図るには、教員の多様化もあり課題もある。また、生徒の学習習慣・学習意欲は向上してきているが、学力向上は、まだ満足できないこともある。

継続は力なりで、新年度からもこれまでの蓄積を継続し、一方本校生徒の実態をもとにした改善を加えながら、更なる授業改善のため研修に努めていきたい。

児童一人一人がよさを発揮し、共に高め合う学級づくり

— 学級活動を通して —

魚津市立清流小学校 教諭 寺 西 恵里佳

1 はじめに

本学級には明るく元気な児童が多く、学習や様々な活動に一生懸命に取り組んでいる。休み時間には、短い時間であっても外遊びや体育館での遊びを積極的に行う児童が多く、体を動かしたり友達と一緒に遊んだりすることを楽しみにしている。だが、一人一人の考え方の違いが大きく、遊び方のルールをめぐる意見の対立があったり、他の人の考え方を受け入れられずにトラブルになったりすることもある。

下学年までの学級活動では、順番に計画委員を経験し、お楽しみ会等を計画してきた。3年生になり、自分たちが集会の内容を立案・計画し、それを実践することを楽しみにし、学級会にも前向きに取り組もうとする児童が増えた。しかし、積極的に意見を発表する児童がいる一方で、ほとんど発表しない児童もいる。また、自分の意見を一方的に主張したり、友達の発表の途中で口をはさんでしまったりするなど、話合いのルールを守ることができない場面も見られた。

そこで、児童の実態から様々な課題についてみんなで話し合い、実践し、振り返り、そして改善するという過程を大切にしながら、自分たちで課題を解決していく喜びや達成感を味わわせたいと考えた。そして、学級活動を通して合意形成を図る経験を重ねることで、さらに学級全体が温かい雰囲気の中で1つにまとまっていくことを期待して本研究に取り組んだ。

2 研究の視点

視点1 よりよい集団活動につなげるための指導過程と手立ての工夫

- よりよい学級にしていこうとする意識を高めるための手立てとSPDCAサイクル

視点2 合意形成を目指す話し合い活動のための手立ての工夫

- 児童の実態や発達の段階に応じた学級会の運営
- 全員が自分の考えをもって話し合いに参加するた

めの学級会カードの活用

- 提案者の思いに寄り添って考えるための教師の働きかけ

視点3 よりよい生活・人間関係づくりに活かす評価の工夫

- 年間を通じた掲示の工夫

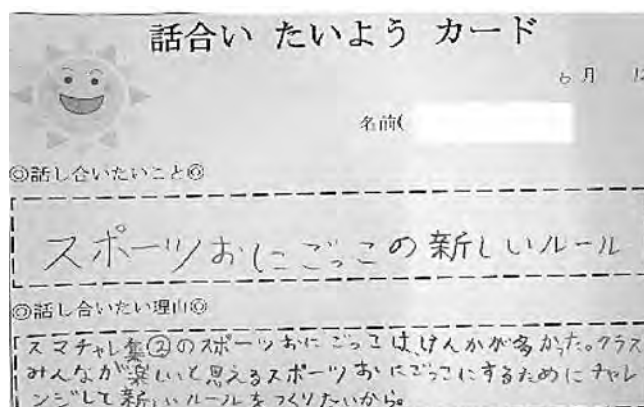
3 研究の実際

【視点1】

- よりよい学級にしていこうとする意識を高めるための手立てとSPDCAサイクル

議題ボックスの活用

自分たちの発案について話し合い活動を経て実行する楽しさを味わうために、議題ボックス「話し合い太陽ボックス」を設置し、提案を募った。その際、「学級目標の3つのキーワードがさらにレベルアップするために学級みんなでできそうなことを提案していこう」と呼びかけた。議題に取り上げられた児童からは、みんなの意見をたくさん聞くことができよかったです、という満足した声が聞かれた。みんなで話し合うことの楽しさが学級全体に広がり、議題ボックスに議題を入れる児童が増えた。ま



【議題ボックスとカード】

た、日々の中で「これを直したらポカポカ(学級目標のキーワード)ポイントが上がるよ」など、児童が進んで課題を見付けるようになった。

例 <スマチャレ集会3の実践>

スマチャレ集会では、問題の共有と提案(S)→計画(話し合い)(P)→実践(D)→振り返り(C)→活動全体の見直し(A)→提案(S)というサイクルを繰り返す中で、前回の活動での経験を基にした意見が出始めた。

「スマチャレ集会3」のスポーツ鬼ごっこでは、学級会の話し合いで決まったルールで実践し、前回の集会よりは改善されたものの、まだ「ちくちく言葉」が聞こえてしまうという問題があがった。児童からもう一度話し合おうという提案があり、もう一度、SPDCAサイクルに従い、よりよい集会にするための新たなルールづくりについて話し合った。「“タッチ”と声をかけることでタッチされたことに気付けるようになったことはよかった。それでも審判が見てくれたら安心する。審判を増やせば1人で審判をしている先生も楽になる」という考えから、新しく教師のサポート役としてミニ審判を加えることに決まった。その後の実践では、トラブルは無くなり、学級会の提案理由である「クラスみんながもっと楽しいと思える時間」を実現することができた。この「スマチャレ集会」を通して、児童は話し合うことの大切さや楽しさ、見直しをすることのよさを実感することができた。

例 <愛校活動の実践>

「挨拶の輪をもっと学校中に広めたい」という提案を基に、朝に行う挨拶運動について話し合う場を設け、SPDCAサイクルに従い活動を進めた。

これまでの挨拶運動では、進んで取り組んでいるのは一部の児童だけで、他の児童は仕方なしに挨拶をしているという問題があった。児童から「まずは自分自身が挨拶をすることを楽しむことが必要だ」という発言があり、もう一度活動全体を見直し、話し合いを経て実践へと進めた。そして、新しく「挨拶ビンゴ」の活動を取り入れることに決まった。登校後すぐに学校の1階から3階まで挨拶をしに回ることでビンゴを目指し、積極的に他学年の児童や教師に挨拶をする児童が増えた。そのことが児童委員会や教師から賞賛されることにつながり、挨拶への意欲が一層高まった。



【挨拶運動の様子と挨拶ビンゴカード】

【視点2】

○児童の実態や発達の段階に応じた学級会の運営

「学級会の進め方」プリントの提示

司会の児童が自信をもって学級会を進行できるよう「学級会の進め方」のプリントを活用して話し合いを進めた。「学級会の進め方」には司会者のせりふや活動の流れ、発表内容のポイントを記した。司会者も参加者も流れやポイント等を随時確認しながら意欲的に学級会に参加していた。また、学級会前には進行への不安をなくすため、司会者グループと教師が手順や仕事の内容等を綿密に打ち合わせした。学級会当日は、教師の発言をできるだけ控えながら、司会者グループの発言を多くするように支援をした。学級会の振り返りカードには、司会者グループとしての役割を果たした喜びを書く児童が多かった。

動作化の導入

様々な意見が出たときは、それぞれが提案するルールのよさや価値を理解し合えるよう動作化を取り入れた。

<スポーツ鬼ごっこの話し合いにおける「比べ合いタイム」での実践より>

- ※A,D,Eは、タッチする際に鬼が「タッチと言う」意見の支持者
- B,C,Fは、フラッグをつけて「“取った”と言って鬼がフラッグを取る」意見の支持者

- A：体育のフラッグフットボールのとき、フラッグを取られても気付かなかったことがあった。
- B：「取った」って大きな声で言えばいいよ。それか、周りの人が教えてあげたらいいよ
- C：それに、フラッグが取られたら取られた感を感じる。
- D：タッチだと体に触られるから、すぐ気付けるよ。

T: みんなはどう思う? 実際にやってみて、考えてみようか。

(中 略)

E: ぼくは体育のとき、フラッグが取られていることか分からなくてそのまま走ってしまい、友達に「ちくちく言葉」を言われたことがあった。

F: 私は「取った」と言いながらフラッグを取るようにしたら、うまくいったよ。

この後、A～Dの4人が前に出て、フラッグを使ったり、手でタッチをしたりして発言内容について説明した。動作を見て考えが整理され、体育での経験も想起しながら発言する児童も出てきた。このように、話し合いが滞ったり考えの違いを理解できなかつたりした際に、動作化を取り入れることにより具体的にイメージすることができ、実感を伴って話し合いをすることができた。

○全員が自分の考えをもって話し合いに参加するための学級会カードの活用

学級会カードに、事前に自分の考えをまとめるようにした。自分の意見を書く時には、経験を入れながら理由を付けまとめることにし、教師が朱書きを入れたり励ましたりした。そうすることで児童が意見を自由に出し合う「出し合いタイム」では、理由を付けて自信をもって自分の意見を話すことができた。

○提案者の思いに寄り添って考えるための教師の働きかけ 一目当ての確認とフリートーク

児童が互いの意見を理解し合うための「分かり合いタイム」に入る前に、提案理由に立ち返り論点整理を行った。提案の中で最も大切にしたいことは「スマチャレ集会2」を踏まえて、みんなを大切にすることを表す「ポカポカポイント」をアップさせたいという願いだった。論点整理で教師が「ポカポカポイント」について触れ、提案理由を想起させることで、多くの児童が話し合いの目的に改めて気付くことができた。その後の「分かり合いタイム」では、ポカポカポイントをアップさせるという目的を意識して活発に話し合いを進めていた。

<「分かり合いタイム」でのフリートークより>

A: タッチで体に触られる人が気付いてすぐスタートに戻って、何回もゲームに参加できるから、たくさんみんなと関わってポカポカポイントがアップするよ。

B: そうかもしれないけど、フラッグだと取られたかどうか目で見ではっきり分かるから喧嘩にならないし、もっとポカポカポイントがアップするよ。

A: フラッグが取られたことに気付かないで走ってしまったら、またそれで喧嘩になるよ。それなら、体に触られてすぐ気付けるタッチのルールの方が喧嘩しないで仲良くゲームができると思うよ。

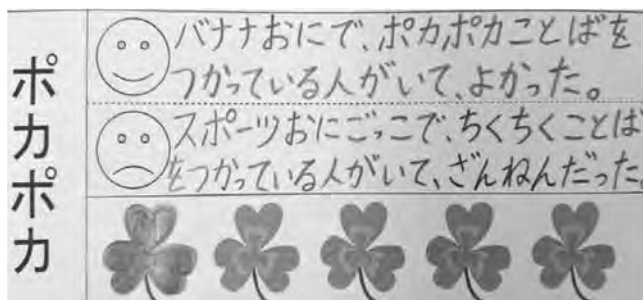
B: そういう考え方もあるね! 分かる気がするよ。

このように、整理した板書を見ながら、違う立場の友達と意欲的に話し合う姿が見られた。

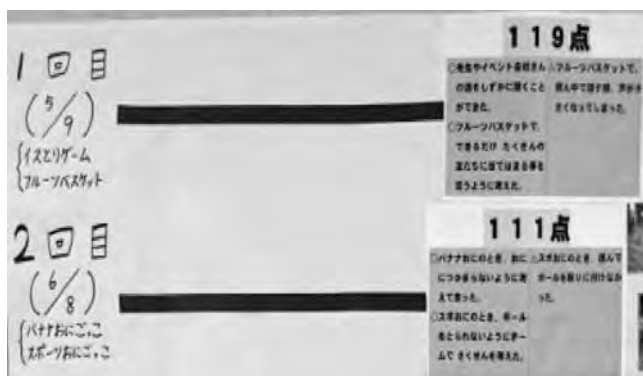
【視点3】

○年間を通した掲示の工夫

3回行った「スマチャレ集会」の振り返りカードには、観点ごとの点数とその点数を付けた理由を記述する欄を設けた。付けた点数を全員分合計し、棒グラフで表して教室内に掲示した。1回ごとに一目でどの観点が大きく伸びたか、これからどの観点をレベルアップしていくと良いかという課題を明らかにすることができた。



【振り返りカード】



【クラス全体の集会の振り返り】

『クラス全体の集会の振り返り 1回目 5/9
イスとりゲームとフルーツバスケット』

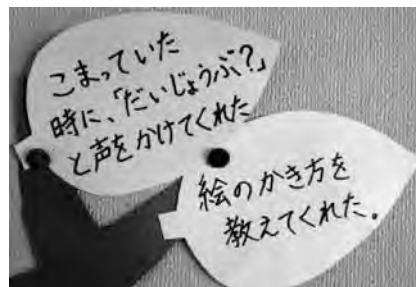
119点	
○先生やイベント会社さんの話をしずかに聞くことができた。	▲フルーツバスケットで、真ん中で話するとき声が小さくなってしまった。
○フルーツバスケットで、できるだけくさんの友達に当てはまる事を言うように考えた。	

『クラス全体の集会の振り返り 2回目 6/8
バナナおにごっことスポーツおにごっこ』

111点	
○バナナおにごっこするとき、おにつかまらないように考えて走った。	▲スポーツおにごっことき、進んでボールをとりに積極的に行けなかった。
○スポーツおにごっことき、相手にボールをとられないようにチームで作戦を考えた。	

(クラス全体の点数と、その理由として多かったもの 児童の振り返りカードより)

また、4月から学級目標の3つのキーワードについて友達や学級全員が頑張った姿を「葉」に書き、木を成長させていく掲示の取組も行った。この「葉」の茂り具合が学級の頑張った成果と捉えられるようになってきている。「スマチャレ集会」の棒グラフと木の葉の茂り具合から「ポカポカ」(みんなを大切に作る木)があまり良い結果ではないことが分かった。自分たちの課題に気付き、どのように改善していこうかと考える姿が見られるようになった。



【学級の木】
一個の取組
(葉に、よい取組が書かれた学級の木)

4 研究の成果と課題

(1) 成果

<視点1について>

- ・議題ボックスを常設したことで、児童が学級の課題を見付け、それを意欲的に解決しようとする姿が多く見られた。
- ・SPDCAサイクルに沿って話合いや集会活動、愛校活動を実施することで、児童は自分たちの学級目標の達成に向かって学級をよりよくしていこうと意欲的に活動に取り組んだ。

<視点2について>

- ・児童は経験に基付いて理由付けしたり動作を取り入れたりして自分の考えを伝えると、相手によく伝わるのが分かり、他の教科の学習や様々な活動においても実践できるようになってきた。
- ・フリートークの場を効果的に設定することで、考えを表す場が多様化し、どの児童も自由に生き生きと自分の考えを伝えることができるようになった。

<視点3について>

- ・学級目標の達成度や活動の振り返りの結果を学級全体と個人の2つの観点から棒グラフ等で視覚的に示すことで、成果や次の課題、目当てが明らかとなり、具体の解決法を考えてその後の話合いや活動に意欲的に取り組むことができた。

(2) 課題

- ・AorBの話合いばかりではなく、様々な議題設定の仕方や話合いの過程、決定方法について工夫する必要がある。
- ・児童にとって必要感のある話合いとするために、日頃から学級の課題を意識させ、自分たちはどんな姿を目指すのか、そのためにどんな活動にしたいのかについて一人一人にしっかりと意思をもたせる必要がある。

子供たちが安心して過ごすことができる学校を目指して

— 生徒指導の立場からの一考察 —

富山市立熊野小学校 教諭 佐々木 晶 子

1 はじめに

日々の学校生活の中で、ちょっとした言葉や何気ない行動から、子供たちの間でトラブルが起きることが多い。そのときに子供たちが、自分たちで問題を解決していけばよいのだが、なかなかお互いが納得のいくように解決しないとき、教師が解決の糸口を探ることになる。

最近では、自分の感情が優先して相手の話を落ち着いて聞くことができなかつたり、良好な人間関係を築くことが苦手だったりする子供が増えてきている。そういう子供にとって、身近にいる教師がよい相談相手となり、どのようにして友達と接していけばよいのか共に考え、支えとなることで、安心して学校生活を送ることができる。

そこで、子供の心に寄り添うために、教師が子供の心を理解し、どのようにアドバイスをしていけばよいか指導力を高めると共に、子供自身も友達とのつきあい方や自分の心を見つめ直す力を付けていくことができるように学校全体で取り組んできた。

2 研究の視点

(1) 子供の悩みや問題把握の仕方

子供が問題行動をとったり悩みがあったりしたときに、誰かに相談してくれると問題の解決が早い。特に教師側にメッセージとして伝わることで、問題を客観的に捉え、問題解決のためのプロセスを共に考えることができる。そこで、子供たちに学校生活について定期的に振り返る時間を設けることにした。

(2) 子供の気持ちに寄り添う対応の在り方

どのように子供と対話をしていくか、それぞれ子供によって対応は違って来る。担任だけが子供に関わるのではなく学年主任や養護教諭、スクールカウンセラーや管理職など複数の大人が関わり合うことで、よりよい方法を探りながら、問題解決に取り組んできた。

(3) 周囲の子供たちの心を育てる対応の在り方

子供自身に心のゆとりがなかったり、なんらかのストレスをかかえたままだったりすると、子供

同士のトラブルが起きやすい。同じ学年の子供たちのよりよい姿を知る機会を設け、自分と重ね合わせて考えることができるようにした。

特に、「人権週間」を子供の心を育てるよい機会と捉え、思いやりの心が育つように計画を立てた。

(4) 教員の資質・指導力が高まる研修の在り方

本校では、若手の教師が多く勤務している。子供との関係は良好ではあるが、子供から悩みを相談されたときに的確なアドバイスができるように、子供との関わり方についての校内研修を計画した。

3 研究の実際

(1) 子供の悩みや問題把握の仕方

① 教師側から見た子供の実態把握

担任には、クラスの子供たちの様子を客観的に見つめるために、富山市学校教育指導方針に掲載されている「いじめ発見チェックリスト」を参考にして、毎月月末に教師が子供一人一人に対して振り返りを行っている。

子供によっては、友達に命令的な言動をしたり、教職員の話を素直に聞き入れることができない場面を見たり聞いたりしていたので、本校の子供の実態に合うように「他の子供に対して命令的な言動をする」「教職員の指導を素直に受け取れない」という項目を付け加えて使用している。

担任が振り返った後は、生徒指導主事が担任が捉えた子供の様子を全てまとめている。毎月の子供たちの様子をまとめることで、担任をしなくても実態を把握することができるようになった。また、この情報を職員が共有することで、複数の大人の目でその子供を意識して見守ることができるようになった。

② 子供が発する言葉からの問題把握

教師が子供の様子を振り返ると同時に、子供自身も困ったことがないか、「心の相談アンケート」を書き、今月の自分の生活について振

り返っている。自分が困っていることだけでなく、友達が困っていきそうだと思う場合についても書いてもらい、教師の見えないところで悩んでいる子供を早期に見付けるようにしている。悩みを書いている児童が特定されないように、今月の楽しかったことについても書くなどして、アンケートを書いているときに必ず全員が文章を書くように配慮をしている。

最初は、楽しかったことを書く子供が多かったが、毎月行うことで、自分自身の悩みだけでなく友達の様子で変だと思ったことや、下校のときの様子、家族のことなどを書くようになり、多面的に子供を捉えることができるようになった。

心の相談アンケート 年 組 名前	
このアンケートはあなたや友達が、気持ちよく学校生活をおくるためのものです。(書いてくれたことは、だれにも見せません。)先生に話したいことがありますか。○を付けましょう。	
1、友達の言葉	2、勉強が難しい
3、友達の暴力	4、休み時間がさみしい
5、放課後の遊び方	6、家族のこと
7、自分の体のこと	8、そのほか
9、なし	
※ ○を付けたことの内容を教えてください。(「なし」の人は、楽しみにしていることや、最近うれしかったことを書きましょう。)	
※ 友達の中で、「困っているみたいだ」「いやな気持ちになっていきそうだな」という人はいませんか。教えてください。	

子供にとって相談したい人はいつも担任というわけではないので、誰に話を聞いてもらいたいか教師の名前も書いてもらい、後日時間を取って面談を行っている。アンケートに書くだけでなく、書いた内容について話を聞いてもらえることは、子供の心の安心につながった。

このアンケートも校長、教頭、教務、生徒指導主事が全て読み、全校児童がどんなことについて悩んでいるか把握している。そして、毎月悩みを書いている児童とその内容について生徒指導主事がまとめ、次の月と見比べて悩みが解決したかどうかを確認している。

毎月、教師と子供がお互いに学校生活を振り返ることで、教師は意識して子供たちの行動を見守るようになったし、子供自身も教師にどんな些細なことでも伝えていんだという安心感につながり、心の中に悩みをため込まないようになってきている。

(2) 子供の気持ちに寄り添う対応の在り方

① 担任を支えるバックアップ体制

教師が心に悩みをもっている子供に対して、実態を正確に把握していないと、どのように対応していけばよいのか分からない。学校へ行くことに対して抵抗をもっている子供については、なおさらである。

担任一人だけで登校しぶりを起こしている子供に対応していると、担任自身も精神的につらくなることがあるので、学年主任や養護教諭、生徒指導、教務、教頭、校長と交えて、どのように子供にアプローチをしていくかケース会議を開き、対応の仕方について話し合っている。ケース会議を開くためには、家族構成や過去の出席状況、得意なことや苦手なこと、本人がどんなことで困っているのかということなどをあらかじめ調べ、本人の学校での様子を共有している。

スクールカウンセラーも週1回来校しているので、保護者とスクールカウンセラーの面談をつないだり、担任が保護者に子供の様子を聞いたたりして、よりよい手立てがないか考え、子供自身が少しでも前向きに過ごすことができるように努力をしている。

② 子供の心に寄り添う教師の支援

「心の相談アンケート」で悩みを書いている子供には、時間を見つけて個別に話を聞いているが、それ以外にも学期末に全員面接を行っている。一人ずつじっくりと話を聞くことで、会話の中から困っていることや悩んでいることはないかよく聞き取ったり、子供と担任の心の絆を深めたりする時間になっている。

教育相談のときだけでなく、休み時間や給食時など、子供がリラックスしているときに何気ない話をして、その子供が今何を考えているのか、友達とはどんな関係なのか気にかけるようにしている。

教師が、子供と1対1で話をすると、今まで見えなかったことに気付かされたり、意外な一面を知ること



【給食時の会話の様子】

ができ、子供を多面的に捉えることができるようになった。日頃の会話を積み重ねることによって、子供との信頼関係を築いている。

(3) 周囲の子供たちの心を育てる対応の在り方

① 「人権」を意識させる取り組み

毎年12月4日から10日まで人権週間となっている。本校では、そのときに合わせて人権に関する集会や人権にまつわる話の読み聞かせなどを行っている。子供にとっては「人権」という言葉は抽象的なので、その言葉を使ったときに意味を理解できないと思い、子供たちが少しずつ人権についての内容が理解できるように計画を立てた。

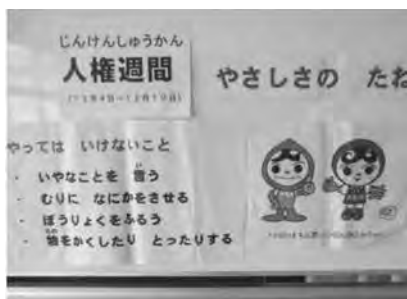
人権についての説明や人権についての優秀作文の紹介、人権に関する図書の本の読み聞かせなどを行って、相手を思いやる心の大切さを意識し、人権について考える時間を設けた。

人権週間の取り組み

- ・人権週間が始まることのお知らせ
- ・「友達とのよい思い出」についてカードに記入し、教室に掲示
- ・人権週間の趣旨の説明と運営委員会から恵まれない生活をしている人の話と募金のお願ひ(全校集会)
- ・図書室に人権に関する本の掲示と本の紹介(放送)
- ・人権に関する作文の紹介(放送)
- ・「友達とのよい思い出」クラス代表の発表(放送)
- ・人権に関する児童集会
- ・命の大切さや思いやりに関する授業

まず、人権週間が始まる前に、子供たちが「人権」という言葉に慣れ、「人権」を意識することを目的として、1年生でも分かるような内容で全校放送を通して説明をした。

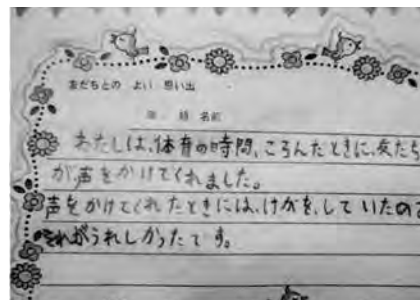
人権週間が始まると、全校集会で「人権」について詳しい説明を行った。より具体的に分かるようにキー



【人権についての説明資料】

ワードをボードに貼り出し、子供の意識に残るようにした。そして、友達からしてもらってうれしかったことや友達とのよい思い出などをカードに書いてもらい、各教室に掲示した。一人一人は何気

なく行ったことや、声をかけられたことが、相手にとってはとてもうれしいと感じていることに気付かされ、どんなことがよいと思ったのか熱心に掲示物を読んでいる子供の姿が見られた。



【思い出を書いたカード】

朝の会の後には、放送委員による人権作文の読み聞かせを行った。今年、「言葉」に注目して人権作文を選び、放送委員に読んでもらった。全校児童には、放送を聞いて思ったことを振り返りカードに書き、友達に対する言葉のかけ方の見直しを図った。

なかなか言うことができない「ありがとう」の言葉に対する思いや、不用意に言われた言葉で傷つく人がいることを作文を聞くことによって意識をするようになった。そして、言葉のかけ方や言い方によって、言われた方はどんな気持ちになるのか、考える時間となった。



【人権作文を伝える様子】

② 「人権に関する集会」で、さらに意識を高める

この時期の児童集会は、「人権」をテーマに集会委員会が中心となって子供の心に響く



【児童集会の様子】

ように、友達とのふれあいができるゲームや人権に関する本の読み聞かせなどを企画した。スライドを使って話をしたり、実際に委員会の子供が寸劇をしたりして、低学年の子供にも分かるように工夫されていた。楽しい活動だけでなく、静かに話を聞く時間もあり、心温まる集会となった。

更に、集会委員会から優しい言葉や言われてうれしかった言葉の募集が行われた。本校では、その言葉を「ふわぼか言葉」と名付け、言

われてうれしかった言葉だけでなく、こんな言葉をかけてあげたよということもカードに書き、掲示した。



【ふわぼかの木】

これは、子供たちがよく通る廊下に掲示したので、たくさんの子供が読んでいた。「ふわぼかの木」に書かれてある内容を知ること、子供たちはたくさんのおいしい言葉があることを感じる事ができた。

(4) 教員の資質・指導力が高まる研修の在り方

学級運営がうまくいくために、校内で構成的グループ・エンカウンター研修を行った。

校内生徒指導研修会の内容

～ 構成的グループ・エンカウンター ～

- (1) 構成的グループ・エンカウンターとは
- (2) どんなどきに行うか
- (3) 活用のポイントと留意点
- (4) エクササイズ例
- (5) 演習
 - ・おなじじゃんけん
 - ・聖徳太子ゲーム
 - ・私は誰でしょう 等

たくさん種類のエクササイズがあるが、通常の学級活動等で行うゲームと違うのは、最後のシェアリング(考えたことや思いを聞き合い、分かち合う段階)があり、これによって個々の育ちやお互いの心のつながりに結び付いていること、エクササイズの内容によっては、15分程度のものや45分間じっくりと活動するものもあり、そのときのクラスの状況によって取り組んでほしいことを伝えた。

教員同士で演習をしていると、相手が何を考えているのか推測するように意識したり、聞くことに集中したり、日頃の行動や話をしていることを思い出したりして、子供の目線になって活動することができた。

日頃は指示を出す側になっているが、このような演習を行うことで、リラックスした状態になること、自己理解の他にも他者理解や相手を受容す

ることの大切さを体感することができた。

また、特別に支援を要する子供が学ぶ力を身に付け、自分に自信をもつことも大切であると考え、「授業のユニバーサルデザイン」をどのようにしていくか講師を招いて研修を行った。

子供が、「授業が分からない」「話の内容が理解できない」「見通しがもてない」というところから問題行動を起こすようになる。そのときは、感情的にならず冷静に対応すること、注目を集めるための問題行動はさりげなく無視すること、禁止・否定語はなるべく使わない、よい行動を始めたら直ぐに注目してあげる、パニックになったらそばを離れることを学んだ。

各クラスには特別に支援をする必要な子供がいるので、この研修を通して子供の接し方の見直しを図るよい機会となった。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・「心の相談アンケート」や「いじめチェックリスト」を毎月行い、生徒指導主事が全校児童の悩みやトラブルを整理してまとめることにより、問題を教員が共有して対応することができた。早めの対応により、問題が小さいうちに解決することができた。
- ・教師が全員面接を行うことやケース会議、スクールカウンセラーと保護者や児童との面談を繰り返し行うことで、子供の気持ちに寄り添った対応ができるようになった。
- ・人権週間を子供の心を育てる大事な時間と捉え、いろいろな方向からアプローチしていくことで、子供たちが人権を意識するようになった。
- ・「エンカウンター」や「授業のユニバーサルデザイン」等の研修を積み重ねることにより、教師がどのように子供たちと接していけばよいか考える時間となった。

(2) 課題

- ・「人権」に関わる内容は、普段の学校生活の中で、常に教師が意識して子供たちに繰り返し発信していくことが大切である。
- ・登校をしぼっている子供に対しては、すぐに効果がある支援は見つからないが、保護者と気持ちを一つにして粘り強く対応し、子供や保護者を支え支援していくことが大切である。

読書のすすめ

— 杉原小学校図書館の環境改革と読書 —

富山市立杉原小学校 学校司書 佐藤 千雅子

1 はじめに

「図書館を変えます。」

4月の着任式で壇上から子供たちに宣言した。

児童数372名、各学年2クラスの杉原小学校。

図書館蔵書数は9300冊余り、図書館は校舎1階に位置する。階段が正面にあり、1階、2階、3階と分かれている教室とのアクセスも悪くない。入口から扇型に広がった館内は、両サイドの壁面に壁面据え付け5段書架とその手前に両面独立台形3段書架が配置され、中央にはカフェのような丸や楕円のテーブルが配されている。また、建物は北西に位置するために、本の大敵である直射日光は差さず、ガラスブロックからは、穏やかな日が差し込む。窓下には木のベンチが設置され、子供たちがゆったりと過ごせる環境になっている。児童数に対する図書基準冊数も満たしており、とてもよい読書環境にある。



休み時間の図書館風景

しかし、実際に業務を行ってみると、隙間なく本が詰まっている書架があるかと思えば、余裕のありすぎる書架があり、排架に問題を感じる図書館だった。また、昨年度までの貸出データからは、子供たちの読書傾向に、ある偏りが見えた。

この排架と子供の読書傾向の問題に関連性を感じ、排架の見直しを中心とした学校図書館環境の改善を行うことで、子供たちに幅広い読書経験を積ませ、読書活動の活性化につなげたいと考えた。

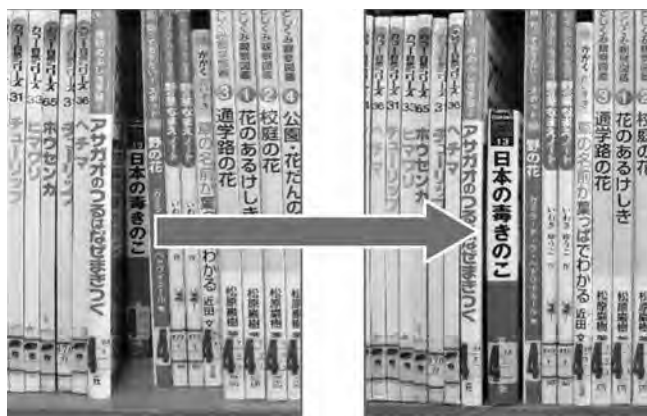
それが冒頭の宣言となったのであった。

2 目的意識をもって図書館利用ができる子供の育成

始業式での改革宣言で、既に図書館では一つ変えたところがあるので、見付けてほしいと子供たちに伝えたところ、翌日から大勢の子供が図書館にやってきてつぶさに館内を見回していた。

子供たちはいろいろな発見をして私に報告してきたが、それは前任司書が、分類の案内に工夫を凝らしていた掲示の数々だった。改めて図書館をじっくり見て、初めて気が付いたようで、せっかくの工夫が子供たちに周知されていなかった現状が伝わってきた。

また、本の数が増えた、新しい本が入ったと報告してきた子供にその根拠を尋ねると、今までなかった本があると答えた。今まで隠れていた薄い本、小さな本を目にすることで、感覚的に本が増えたと感じているようだった。しかし残念なことに、私に声をかけてくれた子供の中で、本が手前に揃っていることに気が付く子供は一人もいなかった。



手前に揃えることで存在を増した本

年度初めにクラス単位に行ったオリエンテーションで、図書館の一つ目の変化とは、本を書架の手前に出し、揃え方を変更したことだと子供たちに知らせた。本の背が揃うことで、大きな本に隠れがちな薄い本や小さな本も背表紙が読めるようになり、どの本も平等に利用者の目に触れることになる。これは、本だけでなく図書館を利用する「ヒト」に対する図書館の平等精神にもつなが

ることである。

子供たちの、「図書館へ行こう、本を読もう」という意識を高めるためには、求める本にスムーズにたどりつけることが必要である。そのために、排架の見直しを行った。

図書館の本は日本十進分類法で分けられている。本校図書館もその基本に準じているものの、増加する本、時代とともに大型化する本に書架スペースが追い付かなくなっていた。例えば4分類だったら、昆虫も鳥も魚も混在して本の大きさ別でぎっしり書架に収まっている状態であった。

子供たちは、本の場所を感覚的に記憶しているだけで分類は意識できておらず、分類に関係なくシリーズ物を自由に一か所に集めて利用していた。

まずは、破損本の廃棄と副本排架されている本の書庫への移動や書架の増設で収蔵スペースに余裕を作り、分類番号ごとに書棚の段を変えられるようにした。

これを網目別に排架し直して、書架に未設置だった類・網・目を明記した「分類案内差し込みサイン」を作成して設置することで、子供が求める本にたどりつきやすい環境にした。



分類案内差し込みサインを設置した書架

今までも分類案内はあったが、書架に小さく貼ってあるため、読み辛かった。また、貼付によって固定化され、実際の本の排架と案内が一致していないために利用者である子供には意味の分からない案内であった。それを解決するには、本を求めて書架の前に立った子供が、一目で理解できる案内にする必要があった。今回作成したものは、文字も大きく書架から飛び出していることで目に付きやすい。また、用紙にラミネート加工を施したもので、耐久性があり、適度に柔軟性もあ

るので子供がぶつかってきても割れる心配もなく安全である。さらに、本の移動に合わせて動かせる利点がある。



9類・文学の分類案内サイン

この分類サインを設置することで、排架がすっきりとして、子供が学習で利用する際も自身の課題に関連する単語を案内サインで見付けて、自力で本を探し出すことができるようになった。

排架を正して案内板を設置し、分類方法を説明しながら、子供と一緒に正しい場所に排架する作業を行うことを繰り返すうちに、子供同士でも注意しあう姿が見られるようになり、排架の乱れは格段に減った。

今まで、様々な分類の図鑑をひとまとめにしてあったものを各分類に移動させたことや、書架の配置換えで、図書館内を0類～3類と4類～6類の二つのエリアに分けることができた。これで、社会科学の学習で使うことが多い本のエリアと理科の学習で使うことが多い本のエリアが分かれ、社会と理科の学習で同時に利用することが可能になった。

このような図書館の有効活用で、子供たちの学校での生活時間に図書館を利用する機会を一回でも増やすことが、子供と本との距離を縮めることになると思う。

また、今までの排架の特徴として、本来は著者記号順に排架されるはずの9類・文学の本の一部が著者記号に関係なく「こわい本」等独自のカテゴリー分けをして図書館中央の書架に排架してあった。これは、子供に人気のある本を手に取りやすい場所に集める措置である。しかし、子供にとって便利な反面、興味が一部の書架に集中し他の書架に目がいけないという問題が生じ、そのことが

読書傾向の偏りにつながっていた。分類番号や著者記号順の正しい排架になって、書架のあちこちに子供の姿が広がり、今まで目にする機会が少なかった本へ興味を広げていった。

最初、従来の場所に本がないことに戸惑いを見せていた子供たちも、著者記号順に排架されることが明確に分かる差し込みサインを設置したことで、分類排架の意味を説明すると、すぐに理解を示した。

3 幅広い読書経験を求めて来館する子供を増やす

子供と本をつなぐ機会は学校司書一人の活動では成り立たない。担任との関わり、図書担当教諭との連携、委員会活動との関わりが大きな力となる。

担任からのレファレンスで学習関連図書を数十冊揃え、学年にまとめて貸し出しを行った。

学年貸し出しは、テーマに沿ったたくさんの本を子供たちの身近に置くことで、探究心を育て、本への新しい関心を抱かせる。これが教科の学習と図書館を結びつけることにもなり、普段あまり図書館を利用しない子供も図書館の本を読むよい機会になった。

学年フロアにまとめて置いた本は学習終了後には図書館に戻され、再び分類毎に書架に戻る。子供たちは学年貸し出しで知った本を書架で見付けることで、その本を手掛かりに新たな読書へとつながっていくと思う。

人権週間前には、生徒指導担当者からの依頼で各担任が学級で読み聞かせを行うための本を選書した。そして、職員室に設置後、終礼の時間にブックトークを行った。読み手である担任がこれらの本の内容(概要)を理解して、心に響いた本を読み聞かせることで、聞き手の子供たちにもその思いがより深く伝わったはずだ。人権週間終了後もこの本を利用して継続して読み聞かせを行う担任もいた。その後、職員室から本を図書館に戻し、人権の本の特設コーナーを設置したところ、休み時間にこれらの本を読む子供の姿が見られ、手応えを感じた。そこでこのコーナーは今年度いっぱい設置する予定にしている。

図書担当教諭と協働して11月を『本となかよし！杉の子読書月間』と位置づけ、読書喚起の取組を行った。

子供たちは、朗読家の鈴木優子先生を招聘しての全校朗読会で、一般的に行われている「読み聞

かせ」とは一味違う「朗読」の世界で物語を楽しみ、「こどもの本総選挙」への参加で自分の読書経験が全国へ発信できることを知った。

また、委員会企画で行った学年ごとの「ダブルブックデー」で一度に2冊の本を借りられる機会に読書量を増やし、「スタンプラリー」で指定された本を読むことで、読書体験のジャンルを広げた。

この読書月間で、学校司書は春に引き続きクラス単位のオリエンテーションを行い、書架の排架が変わったことを知らせ、分類についての指導を行った。併せて「こどもの本総選挙」の投票もこの時間に行い、投票用紙記入の際には、本の奥付を見て書誌情報を正しく得る指導もした。

それ以外にも図書掲示委員会の「委員が選んだおすすめの本」の展示と貸し出し、「読書ビンゴ」等の活動は、子供から子供への発信が共感を呼び、読書の領域を広げるきっかけになった。

このような働きかけや経験の繰り返しが子供の読みたい気持ちを刺激して、自らの意思で図書館に足を運ぶ子供を育てていると思う。

4 読書を楽しむ習慣の定着を図る

1・2年生は学年に割り当てられた図書館利用の時間を使って、クラス単位で毎週本を借りに来る。

読書習慣の確立がなされていない低学年の子供の中には、図鑑を眺めるだけで物語を読む経験を積めないまま学年が上がる子供がいる。そこで、1年担任と話し合い、1学期しばらくは、絵本コーナーの本に限定した貸し出しにした。これによって、じっくり物語を読む体験を積むことができた。そして個々の子供の様子を見て、徐々に9類の物語や4類の図鑑等にも貸し出しの範囲を広げて、夏休みの貸し出しからは、自由に好きな本を借りられるようにした。

1・2年生の間で、絶大な人気を博している絵本があり、貸し出しの時に取り合いになり、他の本には関心が向かない現象が起きた。

人気の本に固執することなく他にも楽しい読み物があることを知らせるため、また絵本だけでなく幼年童話にも読書の領域を広げるために、読書の時間を利用してミニ・オリエンテーションを行った。9類(物語)の書架の中から、低学年向けの本を見付け出すコツのレクチャーや、低学年に読みやすい幼年童話を紹介するブックトークを行った。幼年童話は「1・2年生にオススメ」という

特設コーナーを設けて、絵本から読み物へと読みの世界を広げる契機にした。自分で本を選び出せない子供が、そのコーナーを助けて、本を借りていった。

とはいえ、依然その人気の本に固執して他の本に関心が向かない子供がいる。そのような子供には、根気よく様々な本を紹介することが今も続いている。

言葉は交わさないが、入退室には必ず目と目をつなぐ挨拶を交わす子供、読んだ本の感想を宝物を見せる如くささやく子供など、他学年の子供たちとも、読書というプライベートな活動を支える個々の子供との関わりがある。このような関わりも読書習慣の定着には大切なことだと思う。

そして、読書は図書館だけで行われるわけではなく、学校図書館の役割は図書館内で収まらない。学校内の図書資料を管理し、有効的に活用して、より深く読書習慣の定着を図るために、各学年フロアに設置されている学年文庫の見直しが必要である。

そこで、図書担当教諭と連携して、学年文庫の実態を調査した。

学年文庫は、図書館で使用不可となった廃棄本を利用しているので、本の傷みが激しい。また、図書館の管理下になく責任の所在が曖昧で、管理が行き届かない。そのために学習で貸し出した学年文庫の本や個人で借りた本が紛れ込んでしまう問題も生じている。

半面、身近に本があることで、授業のわずかな空き時間にも子供が読書できる利点もある。

そこで、現在ある廃棄本を利用した学年文庫は廃止し、その書架を利用して、学年貸し出しをした学習関連図書の設置場所とすることを検討している。

また、図書掲示委員会の活動とも関連付けて、委員の子供が学校司書とともに選書した本を学年文庫として設置し、定期的に本の入れ替えを行う。これらのことを図書担当教諭と計画し、提案している。

5 おわりに

本の排架を変えたからといって図書の貸し出しが飛躍的に伸びたわけではい。しかし、休み時間に図書館で読書する子供の増加、図書館を利用する子供の分類や排架に対する意識の変化等着実に成長が見えてきている。特に、児童会図書掲示委員の活動に積極性が見られるようになってきた。

今回、書架の増設に関して、書庫の整理で空いてき

た両面5段書架を既存の3段書架に並べて使用したいと考えたが、地震への対応という問題が生じた。

そこで、東日本大震災の際の学校図書館の被害報告や書架のメーカーが発表している地震対策を調べ、自身が所属している、学校図書館問題研究会の福島県の会員に直接訊ねるなど情報を集めたところ、台形3段両面書架に倒壊の被害は無かったことが分かった。

今回設置を希望した5段書架には書架の床固定、書架同士の連結固定を行う方法もあったが、高さの違う書架の連結は力のバランスが悪くなると、揺れで書架がよじれて連結固定でも危険が生じるという実験結果が報告されていた。

また、背の高い書架の設置は司書がいるカウンターから死角が生まれ、安全管理面でも不安があり、この5段書架の使用は断念せざるを得ない状況だった。しかし、書架の増設は必至で、苦肉の策として、書架の下部台形2段部分だけを使うことに結論を出した。それに対して、管理職からリフォームで3段書架にする提案があり、書架を増設することができた。



リフォームして増設した書架

このように、一つ一つ丁寧に相談、検討、研究を重ねることも大切である。これによって、子供たちが安心して過ごせる空間が図書館に生まれている。これも読書活動の活性化につながっていると思う。

シンプルに分かりやすく本が排架された図書館が学校図書館の基本であると思う。それに向かって改革を進めた1年だった。とは言え、目指す図書館像にはまだ到達しておらず、子供たちに宣言した図書館改革はこれで終わったわけではない。

全ての子供が図書館での読書によって知識を得、読書によって心の安らぎを図り、読書の楽しさを知る。そうなるために、これからも改革は続く。

温かく学び合う子供の育成

富山市立長岡小学校 教頭 柞山 菜穂子
(R1 富山市立大沢野小学校での実践)

1 はじめに

本校は、富山市の南部、国道41号線沿いに位置する全校児童数509名、19学級(内特別支援2学級)の学校である。児童は全体的に素直で明朗であるが、生活規律や学習規律の定着が弱いと感じられる。また、授業中に離席したり、教室から出たりするなど集団学習になじめず、特別の支援を要する子供たちもいる。そのような子供たちも含め、一人一人に応じた学習支援の必要性がある。さらに、多くの若手教員の育成も子供たちを支えるための重要な課題である。

そこで、今年度は、①子供にとって「分かる授業づくり」「楽しい授業づくり」、②子供同士が関わり合う「学び合いのある授業づくり」、③学年部会を主体とする「学び合う教師集団」を土台として、「温かく学び合う子供の育成」を目指した。

2 主題設定の理由

(1) 今日的な教育課題から

変化の激しい現代社会を生きる子供たちが、生涯にわたって学んでいく力が必要である。新学習指導要領においても「主体的に学習に取り組む態度を養うこと」の重要性が強調されている。子供たちの主体的に学ぼうとする意欲の高揚を図っていく。日々の授業をはじめとする学校生活の中で、子供たちが「わかる」「できる」の達成感や成就感を味わっていくことで自信につながり、さらなる意欲が高まっていくと考えた。

(2) 今年度の重点目標から

「いじめを許さない、不登校児童を支える」を支える基盤の一つとして学び合う「チーム沢小」教職員がある。日常的な研修を大切にして教職員が学び合うことで授業改善が図られ、子供たちにとって「わかる」「できる」楽しい授業になると考える。研修では、学年を主体とする「学年部会」を中心に、教職員一人一人の持ち味を生かした研修等の実施によって、教職員間での「学び合う」姿を大切にする。

(3) 児童の実態から

学力では、二極化が見られる。学力下位層の

子供たちにとって、「わかる」「できる」授業を行うことが、心の安定につながる。一人一人の子供に応じた支援の工夫が必要である。配慮の必要な子供への支援についても、仲間であったり、ときには教師であったり、共に支え合う関係が大切である。子供同士が仲間と共に取り組んだり、認め合ったりする活動を構想し、仲間と心豊かに関わりながら協働的に課題解決に向かっていくことができるような態度を育てていく。「温かく学び合う」姿が、学力下位層の子供をはじめ、配慮を要する子供の自己肯定感の高揚や学ぶ意欲へとつながり、仲間と共に支え合う関係を目指したい。

3 取組の実際

(1) 指導案作成と模擬授業

年4回の学習参観に向けて学習指導案を作成し、学年部会で指導案検討を行った。これは、ベテラン教員の経験に基づく知識や技能を若手教員が習得できるだけにとどまらず、ベテラン教員にとっても、「わかる」「楽しい」授業になっているかが吟味される機会となった。また、模擬授業も行い、学習課題の適切さ、実際の流れや発問、板書等についても見つめ直すことができた。この取組によって、若手教員が余裕をもって授業に臨み、子供たちが生き生きと学んでいた。

(2) 風の子プロジェクトでの取組の見つめ直し

毎学期末に実施していた「今の自分みつめアンケート」の内容項目を三部会で再検討し、子供たちが意識して取り組むことができるものに焦点化していった。「発表」については、「話す」以前に、話を聴く学級の雰囲気づくりが重要であると考え、まず、聞き手の態度の育成をすることを目標とした。内容項目は①「分かる授業だったか」、②「話し手に体の向きをかえて話を聞くことができたか」の2点となった。また、実施時期を学期末から月末に行うこととした。アンケートの内容項目を焦点化したことで、子供自身が自己を見つめ、よりよくしていこうとする意欲を高めることにつながった。同時に、教師自身も授業改

善に生かすことができた。PDCAサイクルが短期に実施されるようになったことで、目当てを意識して学ぼうとする子供の姿や、「分かる」授業づくりに取り組む教員が増えてきた。

(3) 学年部会による研修

今年度は研修教務が担任を兼ねたこともあり、概ね研修は各学年部会に委ねる形をとった。夏休休業中に目指す子供の姿を再検討し、実現に向けた具体的な方策を考えた。また、毎週木曜日の放課後は教材研究とし、学年が主体となって授業の準備等に充てる時間をとった。

①チーム学年

5年生は、学年主任28歳(男性)、2組担任28歳(女性)、3組担任ベテラン(男性)という担任構成で、若手教員をベテラン教員が支えながら、若手教員の育成、円滑な学年経営を進めていくことをねらいとした。放課後の職員室では、日々の子供の様子や、各教科の教材についての進め方等について話をする姿がよく見られた。各学級で得点を争う「漢字交流戦」も子供たちの学力向上を意図した取組の一例である。自分や仲間の点数が学級の勝敗に関わることで、子供たちの漢字を習得しようとする意欲は高まった。また、各自が目当てをもち達成できたことは自信を与えた。さらには、漢字を苦手とする仲間を何とか支えようと教え合う姿が見られた。一人一人の学力向上を目指す取組が、学級全体の学力の底上げを図り、互いに支え合い、まとまりのある学級づくりにつながっていた。

②学びに向かう子供を目指した授業づくり

5年生国語科「大造じいさんとガン」の実践では、「互いの取組に学び、よりよい自分づくりを目指す子供の育成」を研究主題とし、朗読発表会に向けて自分なりの読みや表現をつくり上げるとともに、それぞれに努力している友達を取組を理解し合いながら、さらによりよい自分自身を目指す取組が行われた。実践では、教師主体とも言える解釈中心の課題設定から、子供自身が単元を通して朗読発表会に向けてよりよい表現づくりに取り組むことを課題とし、外部講師の招聘、一人学習における個への支援(台本作り、表現づくり)、毎時間の振り返りを継続する中で、子供たちが表現をさらに高めていこうとする姿へとつながっていることがう

かがえた。多くの子供たちが自分の読みや表現の高まりを実感する中で行われた全体学習の中で、互いの取組を聴き合い、友達の学びにさらに高め合う子供の姿が見られた。聴き合いの中で、朗読したい場面を選択し、練習と振り返りの積み重ねによって、他者へ自分の表現を伝えたい思いを大きくしていくA児の姿(下記傍線部①)や、A児の1、2年生の頃より成長した自分を自覚し、その成長を喜ぶ発言が見られる(下記波線部②)。

8/13時の聴き合いから

A児：私が今一番思っていることは、1年生のときからすごく成長したことです。朗読をし始めて、1年生の頃とかは、すごく小さな声で、はっきりと言えなかったけど、この機会です、朗読発表会を目当てにもって、今は大きな声でもできるようになったから、発表会では頑張りたいと思います。

T：1、2年生のとき、どうだったの。

A児：1、2年生のときにみんなから注目されるのがすごく緊張しとったし、自分の気持ちが伝えられなかった。でも、5年生になって朗読し始めたら、楽しくなってきた。読んどったら、大造じいさんとガンの気持ちを人に伝えたい気持ちが湧いてきた。読んでいくうちに楽しい気持ちがどんどん強くなって、恥ずかしい気持ちがなくなっていった(①)。

(中略)

T：1、2年生の頃のAさんのこと、みんなの方がよく知っとると思うけど、どう？

B児：ずっと数人でおったけど、今だったら他の人も関わるようになってきたなって思う。

C児：1、2年生のとき一緒にクラスでよく遊んでたけど、5年になったら友達の幅が広がったなって思う。

T：自分では、どう。

A児：自分でも前より他の人とたくさん喋れるようになったなって。自分でも恥ずかしくて言えんことが、朗読しとる間に言えるし、勇気が前より出てきて成長しとるなって。伝えたい気持ちが多くなったことは自分でも嬉しいし、成長ってことも自分で感じて嬉しいし、発表会でも成長した自分を見てほしい(②)。

また、全体学習の中で、これまでと今の自分を比べながら話すA児の思いを聴きながら、A児に共感し、自身を見つめ、朗読発表会に向けて意欲を高めるE児の姿もあった。

8/13時の聴き合い後の振り返り

<E児>

Aさんが今では声も出るようになって成長したと言っていて、僕とAさんを比べると全く同じで、僕も1、2年生のときは声が小さかったけど、今ではだいたい声も出るようになったから共感できました。朗読が上手になったら二上先生に聞いてもらいたいです。

A児の真剣に朗読に取り組む姿や、聴き合いで思いを聴いているうちに、自分も頑張ろうと意欲を高めることができたのだと考える。友達を取組から、自分の成長や友達の頑張りを感じ、互いに学び合う子供の姿が見てとれる。

朗読発表会後の聴き合いで、A児は、下記のように話している。

練習のとき、録音し合ったり、アドバイスし合ったりして、友達への思いは感謝しなくて、FさんやGさんたちが背中を押してくれたからよくできたと思います。自分は、1年生から本当に成長したなって。自分が努力したなってことは心に残りました。6年生になっても、この朗読の思い出ややりたいうって気持ちはずっと心にして(③)、将来でもこの機会をつくってくれた先生やみんなに感謝したいです。

傍線部③には、学ぶことの楽しさや喜びを感じ、自分が成長した確かな手応えを感じ、生涯にわたって学んでいこうとするA児の思いが溢れている。今後も主体的に生き生きと取り組むA児の姿が想像される。

6年生理科「水溶液の性質」の実践では、研究主題「自ら課題をつくり、主体的に学ぶ子供を育てる理科学習」について、子供たちに自ら学習課題をもたせるための単元の導入の教材研究に熱心に取り組む教師の姿が見られた。数種類の水溶液について、どのように提示することが効果的であるか、子供たちが課題をもち、主体的に取り組むように、A案、B案と子供の反応を予想しながら検討が進められた。吟味の末、既習の知識や経験を生かしながら追究していくことが可能である導入が選択された。結果は、教師の予想したように、既習の知識や経験を活用して水溶液の性質を探ろうとする考えが多く出たが、予想を立て実験をしていく中で、困惑したり行き詰まったりする子供も出てきた。そんな中、実験を半ば投げ出しかけていたH児が、全体学習で、予想を超える友達の実験方法(チョークの粉、割り箸を入れるなど)を聞き、「みんな、すごいな。自分もがんばってみよう」と気持ちを切り替え、前に進み出した姿があった。「子供同士の関わりが主体性につながる」と言える瞬間だった。

③主体的・対話的な授業づくり

2年生国語科「お手紙」の実践では、主体的・対話的な学習を通して学ぶ、生き生きし

た子供の姿を見ることができた。音読発表会を単元のゴールに据えながらも、読みを深めてからの音読ではなく、音読を通して読みを深めていく学習過程を工夫している。一人読みやグループでの話合いの途中にも自由に音読できる場の設定や、グループの友達との音読の工夫の聴き合い、全体での聴き合いによって、登場人物の気持ちや場面の様子について理解を深めることができた。

4場面での聴き合い

I児：でもさ、がまくんはお手紙に書いてあることを知っているんだから、もうお手紙じゃない。
T：どういこと。
I児：お手紙になんて書いてあるか知ってるから、もうそれはお手紙じゃない。がまくんは4日も待ってるけど、ほくだったら、あんまり楽しみじゃない。4日も待てない。
J児：がまくんは、なんて書いてあるか知ってるけど、書いてあることがうれしかったから待てると思う。
T：どこがうれしかったの。
J児：親友とか親愛なるっていう言葉がうれしかった。
K児：がまくんは最初「だってほくももらったことないんだもの」って言っていて、初めてもらう手紙だから中身を知ってても待ちたい。
J児：とてもいいお手紙だから、お手紙をもらって自分で読みたい。
L児：お手紙が来るって分かっているけど、素敵ないいお手紙を待ちたい。
I児：でも、中身が分かってたらうれしくないよ。ほくだったら、読んだら捨てちゃうかも。
M児：捨てないと思う、親友からもらって大切だから。
N児：私だったら大事にとっておく。
O児：大事にとっておいて何回も読み返すかもしれない。
P児：初めての手紙だし、かえるくんからもらったお手紙だから読んだ後も飾っておきたいくらい大事だと思う。
I児：お手紙だったらうれしいけど、中身が分かってたら楽しみじゃないよ。
O児：親友のかえるくんが書いてくれたお手紙だからうれしいと思う。
I児：親友だと思ってるから？
J児：お手紙の中に「親友であることをうれしく思っています」って書いてあるってことは、かえるくんとかまくんは元から親友だったんだよ。親友だと思ってるじゃなくて、「親友である」だからちゃんと親友で、だからかえるくんのお手紙がうれしくて、待ちたいんだと思う(④)。

I児は、登場人物に自分を置き換え考えて発言している。そのI児に対して、J児は、教科書の叙述を基にして登場人物の気持ちを考え、何とかI児に伝えようと一生懸命である(傍線部④)。この単元で、子供たちは毎日音読に取り組み、文章を読み込むことで言葉にこだわり、叙述に注目して考えることができるようになってきた。「親友だと思っているじゃなくて、『親友である』だから、ちゃんと親友で、だからかえるくんのお手紙がうれしくて、待ちたいんだと思う」と、言葉にこだわって自分の

考えを生き生きと話すJ児の姿があった。それは、よい音読をするために主体的に対話的に学習に取り組んできたからこそと言える。

(4) OJTによる研修で子供理解を深める

①生徒指導主事による生徒指導研修

日々、放課後の職員室での教員同士の情報交換や教材研究は、若手教員を支える貴重な時間である。それに加えて、参加自由型の研修の機会を設定することで、若手教員の経験不足を補い、子供理解についての知識を深めた。生徒指導主事による「U-30限定やわやわ研修」もその一つである。学級開きに際しての「学級目標を決めよう」、夏季休業の終わりには「2学期からの学級づくり」、「子供同士をつなげる学級づくりの時間のもち方」について議論し、実践に生かせるエクササイズが行われた。エクササイズには、コミュニケーションの量と質を上げるねらいがあり、「快・感動の体験」「継続性」「日常化」を意識した時間を大切にすることで、学級づくりにつながっていくことを学ぶことができた。

②特別支援コーディネーターによる研修

昨年度より実施しているQ-U調査の結果を生かした学級改善により、親和的な学級数が増加した。しかし、中には自己肯定感の低い子供、人との関わり方がうまくできない子供、学級に居づらさを感じる子供の姿も見える。そのような支援を要する子供たちを理解するため、日常的な相談に乗り助言を与えたり、指導方法を提案したりした特別支援コーディネーターの存在は大きい。本校の子供に多く見られる人との関わり方がうまくできないことを克服していくためのSST研修や、子供の特性に基づき子供理解を深めるための研修は、若手教員ばかりでなく、全教員の子供の見方・捉え方を広め深め、対応の仕方を柔軟なものにした。特別支援教育に関わる研修から多くのことを学んだ。「よくなったより、よくするための過程を大事にする」「何を訴えたいのか、じっくり聴く」「毅然とした態度を貫く」「悪くない状態をほめる」の4つの点を、常に教員は心がけて子供に接したいと思う。苦しんでいる子供に寄り添う気持ちをなくしてはいけない。いつかよくなると信じて見捨てない信念をもって、子供理解に努めていきたい。

(5) Q-U調査を活かした学級づくり

①学級経営に関する研修 「学級づくり」	(講師 村田己智子先生)	(4月3日)
②学級経営に関する研修 「Q-U実施について」	(講師 村田己智子先生)	(6月13日)
③学級経営に関する研修 「Q-Uを活用した学級集団づくり」	(講師 村田己智子先生)	(8月27日)
④学級経営に関する研修 「Q-Uを活用した学級集団づくり」	(講師 村田己智子先生)	(1月6日)

今年度も2回のQ-U調査を実施した。1回目(6月実施)後、各学級の要支援群の子供たちに対する支援の仕方を学んだ。年間を通じて外部から招聘した村田先生の助言指導を活かしながら、各学級学年で支援方法を具体化し取り組んだ。全教職員が子供理解に努めたこと、実際に各学級の実態に応じた支援を進めた結果が2回目のQ-U調査に反映されていた。

4 おわりに

「温かく学び合う子供の育成」について研究を進めた。子供の学ぶ意欲を引き出すためには、「わかる授業」「楽しい授業」を意識した教師の日々の教材研究と、安心して学べる学級、居場所づくりが不可欠である。チーム学年を土台に、ベテラン教員が若手教員を支え「学び合う」体制は、互いに切磋琢磨し、子供たちが生き生きと学ぶ姿につながった。教材研究を通して教材の本質を見出したり、単元構想を思案したりすることは重要である。また、「子供理解」があり、自己肯定感を高められるような授業づくりも必要である。3年生では、学期の途中から算数科の授業において少人数指導を取り入れた。一人一人に応じた細やかな学習指導を目指して、103名の子供たちを5つの教室に分けて授業を行った。すると、配慮を要する子供たちが落ち着き、集中して計算プリントに取り組むようになった。学力下位層の子供たちが安心して自分の考えをつぶやく姿が見られるようになった。教員が「チーム」となって子供を支える「温かく学び合う子供の育成」の姿に他ならない。廊下を出歩き、授業に参加しなかった子供が、算数の時間には急いで礼法室に向かっている。算数が苦手だった子供が日記に「算数が楽しい」と書いてきた。このような子供の姿を目指し、今後も「温かく学び合う子供の育成」に努めていきたい。

教職員がチームとして機能する学校経営の在り方はどうあればよいか

— 中堅教員としての主体的な学校経営への参画 —

富山市立新庄中学校 教諭 櫻井 隆光

1 はじめに

富山県の中央部に位置する本校区は、富山市内外で働く人々のベッドタウンとなっていると同時に、幹線道を中心に、数多くの商業施設が出店しており、賑わいを見せている。自治会活動等も盛んで、世代を超えた交流が図られており、近年では、中学生もそれらの活動に積極的に参加しており、地域から高い評価を受けている。

平成12年度には富山県ボランティア活動普及事業推進校、平成17年度には文部科学省人権教育研究指定校、平成20年度には不登校対策小中連携モデル校区に指定され、平成29年度にはキャリア教育優良校として文部科学大臣表彰を受けた。

2 主題の設定について

令和の時代を迎え、未来を生きる子供たちのために様々な教育活動が行われているが、学校現場が抱える課題は複雑化・多様化している。そのため、各学校では学校長のリーダーシップの下、一体的にマネジメントし、教職員が個々の専門職を生かしながら、チームとして子供たちに必要な資質・能力を確実に身に付けさせるための改革が必要になってきたと考える。

そこで、本研究では教職員がチームとして機能する学校経営の在り方を、中堅教員としての立場から、学年経営や学校行事、生徒指導や生徒会活動等の実践を例に論じていく。

3 研究の視点と実践の内容

○ 研究の視点

本校の学校教育目標は、「自主性に富み、社会に役立つ、心豊かな人間の育成」であり、教育目標を達成するための目指す学校像として「『活力』と『ありがとう』にあふれる学校」を学校経営の基本理念としている。学校教育目標を達成するために、教職員が使命感と誇りをもって働くことができる環境をつくり、生徒が自己の成長を実感できる活動を企画することが

求められる。学校長のリーダーシップの下、社会に開かれた教育課程を目指し、チームとしての学校を構築していくために、中堅教員として主体的に学校経営へ参画していく必要があると考える。

○ 研究実践の内容

(1) 教育目標を達成するためのチームとして機能を発揮するために

- ・教育目標達成のための目的の共有の在り方
- ・教員集団の縦と横の関係づくり
- ・ベテランと若手をつなぐ中堅教員としての役割

(2) 各教職員の長所が生きるチームとしての活動実践例

- ・教職員の長所を生かした取組
(学年経営・生徒指導・特別の教科道徳)
- ・教職員の個性をチームとして生かした取組
(校務分掌・各学校行事)

(3) 持続可能な学校行事と文化を引き継いでいくために

- ・生徒が主体的に学校文化をデザインできる下地づくり
- ・数年間を見通しての取組

4 取組の概要

(1) 教育目標を達成するためにチームとして機能を発揮するために

- ・教育目標達成のための目的の共有の在り方
専門性や文化が異なる教職員が、教育目標を達成するためにチームとしての力を発揮し、学校の運営機能を円滑にしていくことが必要になってくる。そのために、本校では、4月当初に打ち出された学校教育目標及び目指す学校像・生徒像を、職員室や会議室等に常に掲示し、全職員が学教教育目標を意識して働くことのできる状況を整えている。学校長のリーダーシップの下、学校の教育ビジョンである学校教育目標を全教職員が意識して取り組むことができ、方向性の共有を図った。



学校教育目標は、掲示されているだけでなく、教職員が意識して取り組まなければならない。教職員が有機的に結び付き、生徒と共に目標へ向かう力や学校内に協働の文化が作り出された。

・教員集団の縦と横の関係づくり

本校では全教員で、下校指導を行っている。学年関係なく生徒と関わることができ、それぞれの先生のよさを生かした生徒との関わりを相互に見合うことができた。学年に関わらず行ったことで、教員同士のつながりが強くなった。その結果、生徒の笑顔が増えていった。子供の居場所づくりと集団の中での自己存在感につながり、「チーム学校」として1つの成果を上げることができた。

・ベテランと若手をつなぐ中堅教員としての役割

学校運営組織の中で、生徒のために、学校のために改善できる考えやプランを提言できる雰囲気づくりに努めた。これは、前年度の踏襲を避けたり、学校の状況に合わない進め方を変更したりすることだけでなく、職員会議でもベテラン教師のアイデアを引き出せたことで、生徒にとってのよりよい取組につながった。それぞれの教員が当事者意識をもつことで、様々な学校行事や取組に「参加す

る」ことから「参画する」ことへ変わっていく過渡期にある。

(2) 各教員の長所が生きるチームとしての活動実践例
・教員の長所を生かした取組

①学年経営

多様な経験や専門性をもった教員を学校経営で生かしていくためには、教員が担うべき業務と役割を再確認し、チームであることの意識をもたせることが大切である。特に、学年経営では、それぞれのよさを生かし、業務を分担し、生徒の抱えている悩みに対して、学年全体で指導に当たった。その際は、タイプに合わせてキャラクターを演じた。父親的な指導や、母親的なバックアップ等、生徒の成長に必要な役割を学年全体で演じていることで、より一層の生徒指導能力を高めて指導にあたることができた。



また、常に学年のチームとしての意識をもつために情報共有にも力を入れた。生徒の状況を把握するために、生徒指導日誌に記載されている内容を共有し、保健室利用記録等から生徒の身体と心の状況の把握に努めたことで、積極的な生徒指導につなげていくことができた。

②生徒指導

今までのチームとしての機能をさらに高め、学校全体として先手の積極的な生徒指導を行った。相乗効果として、生徒だけでなく若手教員の成長につながった。今後、全教職員が全生徒を育てていく広い視野をもたなくてはならない時代だと考える。生徒は、様々なところに興味・関心等をもっていて、生徒の生育環境や将来の進路希望等も異なっている。日頃の人間的な触れ合いや、関わり合いに気付くきめ細かな観察と指導が必要となる。学年の教員、教科担任、部活動の顧問等も含めて、広い視野で生徒理解を行うことが大切であるため、チームとしての機能をより一層高めていかなければならない。

③特別の教科道徳

道徳の教科化にあたり、今年度、学校を挙げて道徳の授業に取り組む体制をつくった。目的は2つある。1つ目は、教員の授業のスキルアップを図ることである。具体的には、授業を行う教室をローテーションして授業を行った。同じ資料で何度も授業実践するため、振り返り及び修正が可能となり、スキルアップにつながった。2つ目は、生徒の変容を様々な教員が授業の中で見付け、評価していくことができることである。各教員がそれぞれの資料を使って授業を行い、普段担任が見ている生徒の様子と違う部分や成長に気付くことができるようになると考えられる。そういった変容も共通のワークシートを使用して生徒に感じたことや考えたことを書かせたことも、生徒を理解する上で有効だった。

・教員の個性をチームとして生かした取組

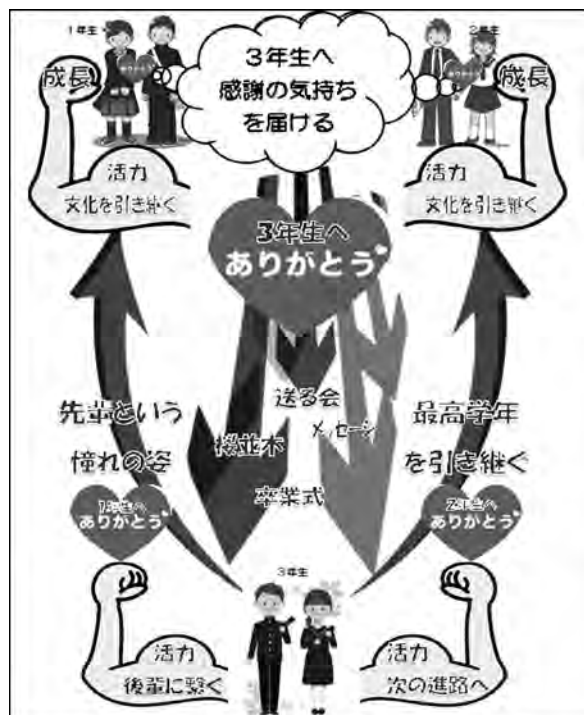
①校務分掌

自らの専門性を発揮し、意欲をもって子どもたちの指導に専念できるよう、業務の見直しと改善に取り組んだ。担当者が、生徒に身に付けさせたい力が何かを明確にした企画の立案や資料づくりに努めた。そうすることで教員の資質・能力の向上を図ることができ、生徒と共に学び続ける教師像ができた。また、学校運営全体にわたって分掌業務の見直しを図り、教員のもてる力を発揮できるような改善を進めた。



②各学校行事

学校行事については、実施要項に合わせて資料を付けて、生徒にどのような力を付けさせたいかをはっきりと明記した。



この資料づくりは、中堅教員として各学校行事をどのように考えているかということをも他の教職員にも伝えることができるよい機会にもなった。ベテランの教員からは、「こんなアイデアはどう?」や「ここはどうするのか?」と教えていただく機会をもつことができた。また、経験年数が短い教員には、何を目的としてどのような思いがある学校行

事かということ、教えていく機会にもなった。チームとして、生徒のために議論し、よりよいものをつくっていく雰囲気が昨年度よりも高まった。

(3) 持続可能な学校行事と文化を引き継いでいくために

- ・生徒が主体的に学校文化をデザインできる下地づくり

各学校行事や生徒会活動については、数年間を見通しての取組となるような企画に努めた。特に、学校行事については、継続的に学校文化や地域の特性を最大限に生かすことができるようにするため、地域人材を活用したり、感謝の気持ちを形や行動で表したりすることができるようなフィードバックの方法を考えた。

- ・数年間を見通しての取組

短く考えても3年、長く考えて5年という長いスパンでどのような生徒になってほしいのかをイメージして、企画を考え資料を作成した。単年で成果を上げたり育ったりするものではないからこそ、目的やゴールをどこに設定して、達成するために必要な具体案を決めていかなければならないと考えた。

<イメージ>



5 成果と課題

(1) 成果

昨今、教員の多忙化解消や働き方改革が叫ばれている中、大きな変化の時代を迎えているのは私たち教員だけではなく、生徒も同様である。この時代に、生徒と共に教員としての資質・能力の向上を常に図らなければならない。

今年度の取組から、中堅教員として学校教育目標を達成するために、改善すべき点や当

事者意識をもって学校経営に参画していかなければならないことを再認識した。「参加」から「参画」へ意識が変わったことで、学校を経営していくチームの一員として、取り組む必要性を強く感じた。特に、以下の三つが挙げられる。

- ① 学習指導、学校行事、生徒指導等の様々な部分で「チーム学校」の中心として積極的に取り組んだことで、他の教職員の意識にも変化が見られた。
- ② 経験年数が短い教員・中堅・ベテランの教員も、チームで対応することで、OJTの機能を十分に発揮することができた。自分の長所に気づき自分のことでチームに貢献したいという意欲が力となり、学校の新しい活力につながった。
- ③ チーム新庄として取り組んできた教職員の姿が生徒の姿に形として表れ、新しい学校文化ができている。

(2) 課題

本校では、新たな学校文化が生徒に定着しつつあり、3年間を見通して身に付けさせたい力を様々な学校行事や活動に位置付けることができた。今後の課題は、これらの文化、行事、活動でいかに質を落とすことなく継続させ、さらによりものにしていくことができるかが重要となる。そのための方策として、以下の三つが挙げられる。

- ① 教職員が学校教育目標に向かって、学校長のリーダーシップの下、ベクトルをそろえて教育活動に取り組むこと。
- ② 教員の縦と横の関係を強くし、全生徒を全教員で観察し、日常の何気ない会話から諸問題の解決まで、幅広い生徒の姿を丁寧に捉えていくこと。
- ③ チーム学校を担う人材の育成のために、学校経営に参画する仕組み、手立てづくりを進めること。

教職員の構成が変化しても、本校で取り組んできたものを確実に受け継ぎ、発展させるため、今後もチーム新庄として努力を続けたい。

* 令和2年度 経営改善助成申請一覧

【学校部門】

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 テ ー マ
1	入善町立上青小学校	校 長	袖 木 富 子	登校が楽しみになる学校づくり
2	滑川市立 東加積小学校	校 長	寺 島 紀 子	小規模校のよさを生かした笑顔あふれる教育活動の創造
3	富山市立草島小学校	校 長	佐 藤 寛 子	一人一人が輝き「いきいき、わくわく、にこにこ」生活できる児童の育成
4	富山市立広田小学校	校 長	福 田 有 児	社会に開かれた教育課程の実現を通して
5	富山市立 水橋西部小学校	校 長	船 木 英 明	若手教員資質向上に向けて
6	富山市立 新庄北小学校	校 長	相 川 仁	コロナ禍で見えてきたこれからの学校教育活動の在り方
7	富山市立太田小学校	校 長	松 浦 悟	なりたい自分に出会える学校
8	富山市立熊野小学校	校 長	南 重 義	「子供が輝き 今日が楽しく 明日が待たれる学校」を目指して
9	富山市立 大沢野小学校	校 長	堀 江 修	教育活動の充実を図るための評価・改善の推進
10	富山市立 大久保小学校	校 長	林 哲 哉	主体的に考え、実践する子供の育成
11	富山市立上滝小学校	校 長	嘉 義 政 彦	「Well-being」幸せを実感する子供を育む
12	富山市立福沢小学校	校 長	岩 城 達 也	子供の自己有用感を高めるための教育実践
13	富山市立 神通碧小学校	校 長	三日市 寛	主体的に学び続ける子供の育成
14	富山市立古里小学校	校 長	神 谷 一 男	自分のプラス1に挑戦する子供の育成
15	富山市立老田小学校	校 長	上 岸 栄里子	主体的に学ぶ子供を育む指導を目指して
16	富山市立光陽小学校	校 長	岡 崎 佳 子	GIGA スクール構想に対応した学校運営
17	高岡市立木津小学校	校 長	石 浦 智 恵	教職員のよさを活かして学校力を上げる
18	高岡市立川原小学校	校 長	荒 井 外志明	児童、教職員や地域の方々が笑顔になれる学校づくりについて
19	氷見市立宮田小学校	校 長	本 川 久 直	主体的・協働的に学び続ける子供の育成
20	砺波市立 砺波東部小学校	校 長	井 澤 清 徳	若手を伸ばす学校づくり
21	砺波市立鷹栖小学校	校 長	砂土居 良 江	教職員一人一人が自己の資質・能力を向上させ、チャレンジする児童を育てる学校づくり
22	南砺市立上平小学校	校 長	林 秀 次	小規模校としての特有の課題の解消と人財育成
23	南砺市立井波小学校	校 長	野 原 浩 昭	「子供が主役の学校づくり」で高まる教育力
24	南砺市立福野小学校	校 長	梨 谷 一 男	主体的に活動する子供を育てる学校経営
25	南砺市立 福光中部小学校	校 長	棚 田 賢 也	主体的に学ぶ若手教員の育成を目指して

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 テ ー マ
26	入善町立入善中学校	校 長	上 野 郁 行	キャリア教育をベースに据えた学校経営
27	立山町立雄山中学校	校 長	片 山 亮 一	個、部会、全体での役割と動きを明確にした組織づくり
28	富山市立南部中学校	校 長	高 瀬 一 寿	レジリエンスを核に自己肯定感を高め、予測不能な時代をしなやかに生きる力の基礎を培う
29	富山市立新庄中学校	校 長	丸 山 正 宏	自己効力感と向上心をもち、自らの将来を見据えて意欲的に学び続ける生徒の育成
30	富山市立速星中学校	校 長	古 野 修 康	コロナ禍の学校休業期間における生徒の学習補償に関する実践
31	富山市立杉原中学校	校 長	松 岡 弘 美	学校統合に向けた組織づくりと円滑な運営を目指して
32	富山市立楡原中学校	校 長	鍋 田 敬 一	生徒自ら主体的に考え、発信力を育む
33	射水市立 新湊南部中学校	校 長	京 角 輝 彦	若手教員の指導力向上を目指したOJTの推進
34	高岡市立伏木中学校	校 長	久 保 村 裕	カリキュラム・マネジメントを生かした特色ある学校づくり
35	南砺市立城端中学校	校 長	北 島 一 朗	若手教員の指導力の向上と教員の「働き方改革」を目指して
36	南砺市立利賀中学校	校 長	簀 口 義 裕	すべての教職員が同等に生徒と接し、質の高い教育を保障するために
37	南砺市立吉江中学校	校 長	島 田 博 英	生徒と共に、響き合う教職員チームの育成
38	富山県立高岡高等学校	校 長	串 田 至 人	「学びの指針-自律型学習を目指して-」の策定を通じた指導の改善
39	朝日町教育センター	所 長	木 村 博 明	主体的・対話的で深い学びにおける学習者用デジタル教科書の効果的な活用

【個人部門】

	学校名(グループ名)	職名	氏名(代表者名)	研 究 テ ー マ
1	入善町立上青小学校	教 諭	南 保 弘 美	最高学年の子供たちとの毎日から見えてきたこと
2	富山市立堀川小学校	教 諭	政 二 亮 介	オンラインシステムを活用しながら、教職員の資質・能力向上を図る研修体制の在り方
3	富山市立蝸川小学校	教 諭	森 田 みはる	児童の運動有能感を高める体育授業を求めて
4	富山市立 大沢野小学校	教 諭	藤 井 良 浩	主体的に学ぶ子供の育成
5	富山市立船嶽小学校	教 諭	松 本 竜 也	新しい生活様式に応じた、自己学習力を高める授業形態
6	富山市立 神通碧小学校	教 諭	山 下 真 里	教師の指導力向上の取り組み
7	滑川市立滑川中学校	教 諭	辻 里 美	教職員の資質・能力向上につながる授業改善(校内研修)3UP
8	富山市立新庄中学校	教 諭	中 川 拓 也	自律的学習者を育てるには
9	高岡市立牧野中学校	教 諭	楠 古志野 良 大成	オンラインが学校を変える
10	高岡市立五位中学校	教 諭	善 徳 甚 樹	新聞を活用した社会科教育実践
11	高岡市立福岡中学校	教 諭	寺 田 孝 子	生徒一人一人に確かな学力を身に付けさせる学年経営の工夫

◇ 課題研究奨励助成報告「優秀賞」

主体的に関わり合い、共に学び合う子供の育成

－ 国語科「話すこと・聞くこと」を中心とした、対話による深い学びの充実を目指す授業 －

朝日町立さみさと小学校 教諭 松井 和貴子

1 課題設定の理由

本校では、今年度「話すこと・聞くこと」の指導を中心に研究を進めている。これまでも、授業の中にペアやグループ、学級全体での話し合いを取り入れてきたが、「深い学び」につながる話し合いには難しさを感じていた。そこで総合教育センターの研究調査事業と合わせ、国語科「話すこと・聞くこと」を中心とし、対話による深い学びの充実を目指した授業研究を行うこととした。

2 研究実践

(1) 身に付けさせたい力を明確にした年間計画の作成

はじめに、年間を通して身に付けさせたい力や国語科「話すこと・聞くこと」に関わる単元それぞれのねらいを明確にし、系統表を作成した。これによって、年間を通して段階的に学習を進めていくことができた。また国語科の学習だけでなく、朝のトークタイムや学級会、他教科との関連も位置付け、系統的に必要な力を身に付けさせることにつながった。

(2) 目的を明確にした単元構想と対話の質を高める環境づくり

対話が「深い学び」につながるためには、目的意識と対話のスキルを身に付けることが大切であると考え、この2点を意識して、単元構想、環境づくりに取り組んだ。

単元構想の工夫では、「友達へのインタビューを基に表彰状を作る活動」、「友達の意見を基に自分のスピーチや俳句を見直す活動」、「学習発表会に向けたグループ協議」といった、単元を通してゴールや目的を明確にした活動を取り入れた。その結果、子供たちは、自分の学習をよりよいものにしたいという思いをもって取り組んだ。また、何のために話し合うのか、どのように話し合うのかをはっきりさせることによって、子供の学習意欲が高まり、学びが深まることが分かった。

対話スキルを身に付けるための支援として、学習のモデルや目指す姿を提示した。教師がモデルを見せたり、よい対話が見られたグループの様子を紹介したりすることで、目指すべき姿がはっきり伝わり、スキルの向上が見られた。授業の振り返りで使用するカードを始めに配布することも、その時間で使ってほしい対話のスキルを知らせ、活用するために有効であった。

(3) 自分の思いをもち、伝え合うための工夫

「日常を十七音で」の学習では、夏の俳句を作るために、俳句にしたい場面や景色について、一人一人がじっくり考えた。自分の思いをはっきりさせておくことで、俳句の表現を見直す際には、自分の思いに沿った表現を探したり、友達の思いをもとに一緒に考えたりし、一つの言葉や助詞にこだわり、深く学び合う姿が見られた。

自分の考えや思いを伝えるための工夫として、話すだけでなく、発表メモやホワイトボード、タブレット等を合わせて使用し、考えや思い、出た意見等を可視化した。それにより、友達の考えや思い、その根拠等が分かりやすくなり、対話の際の助けとなった。



3 研究の成果

- ・身に付けさせたい力を明確にし、年間を通して段階的に学習を進めていくことで、「話すこと・聞くこと」の力や対話のスキルを身に付けていくことができた。
- ・目的を明確にした単元構想と学習活動によって、主体的に学習に取り組むことができた。
- ・自分の思いをはっきりさせ、可視化することで、より深く学ぼうとする姿が見られた。

4 今後の課題

今回の実践で身に付けた対話のスキルを、今後いろいろな授業に生かせるよう取り組んでいきたい。また、今回はグループでの対話を中心に進めてきたが、学級全体での話し合いの場でどのような対話を取り入れると「深い学び」につながるか、研究していきたい。

自分の思いや考えを表現し、主体的に学び合う児童の育成

－ 国語科「お手紙」の実践を通して －

魚津市立よつば小学校 教諭 蒲地良介
(R1 魚津市立道下小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級の児童は、1学期に行った物語文「スイミー」の学習を通して、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことができるようになってきた。そこで本単元では、人物の行動だけでなく、会話や地の文も含めた叙述に目を向け、登場人物の気持ちや場面の様子を想像し、その様子が表れるように音読できるようにさせたいと考えた。そのためには、一人一人が自分の考えをもち、それを互いに伝え合い考えを深めることが必要だと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 目的意識を明確にした言語活動の設定

単元の最初に、この活動の最後には音読劇をすることを児童に伝えた。児童はこれまでの学習でも何度か音読劇をしたことがあったので、意欲的に本単元の学習に入った。また、全体計画の中盤で「誰に音読劇を見てほしいか」とアンケートを取り、「隣のクラス、6年生、お世話になっている先生方」に見せることとなった。相手が決まったことで、児童の目的意識が明確になり、さらに意欲的に練習に取り組む姿が見られた。書き込みに付け加えをしたり、地の文も気持ちを込めて読むようになったりした。発表会では、見てくれた相手に自分たちのがんばりを認めてもらい、それが次の原動力となって回を重ねるごとに意欲的に役になりきって音読劇をすることができた。

(2) 叙述を基にした考えの醸成や話し合い活動の設定

話し合いに向けて、教科書に書き込みを行った。また、話し合いでは黒板に叙述を読点ごとに区切った短冊型のカードを貼った。カードの横に児童の考えを書いていくことで、「どの叙述から考えた意見なのか」や、「同じ叙述にも登場人物のいろいろな気持ちがあること」が視覚的に捉えやすくなった。また、叙述をカードで意識させることで、叙述を根拠にしながらか自分の考えを発表する姿が見られた。

～話し合いより一部抜粋～

T (教師) C (児童)	考察
T 「このお手紙をがま君の家へもって行って、ゆうびんうけに入れてきてくれないかい。」とあるけど、どうしてかえるくんはかたつむりくんに頼んだのかな？	・C1は手紙とはどのようなものかを自分の経験と関連付けて考え、直接手渡すのでは、がまくんの喜びが半減すると考えていた。 ・C2は叙述から、郵便受けに手紙が入っていることが大切だと考えた。
C1 自分で渡したら意味がないんじゃない。手紙って普通届けてもらおうよね。	
C2 「毎日ぼくのゆうびんうけは空っぽさ。」と書いてあるから、郵便受けに入っていないといけないんじゃない。	
C 確かにそうだ。	

話し合いの後にはその日の学びを生かしてペアで役割読みを行った。叙述の横に書かれている登場人物の気持ちになりながら台詞を読むことで、登場人物になりきって楽しく読むことができた。最初は困る姿も見られた書き込みだったが、話し合いをするごとに何を書けばよいか分かるようになり、それによって場面の様子を想像することの楽しさを実感した後は、意欲的に書き込む姿が見られた。

(3) 児童が考えを発表したくなるような温かい雰囲気づくり

話し合いでは、「意見がたくさん出た方が楽しい話し合いになるから一人一回は発表しよう。」「この時間で考えた意見を言える人や友達に質問できる人はすばらしい。」と日々声かけをし、考えを発表するように促した。また、話し合いの中で発表できなかった児童には、本時で出た意見の中でいいなと思った意見の下にネームプレートを貼らせ、自分の思いを板書の中に位置付けさせるようにした。これらの手立てによって、進んで発表する児童やハンドサインを用いて質問したり付け加えの意見を言ったりする児童が増え、より多様な意見が出る話し合いとなった。児童の中にも「〇〇さんが質問のサイン挙げてるよ!」「〇〇さんも手を挙げてるから当ててあげて!」等互いのがんばりを認め合うような温かい言葉かけが多く見られ、一人一人の発表する喜びにつながっていた。

3 研究の成果

単元のゴールの活動や発表する相手を事前に示すことで、見通しや目的意識を明確にもちながら意欲的に学習に取り組み、達成感を味わうことができた。また、日頃から継続的に発言を促すような声掛けをしたり、よい発言を称賛したりすることで、児童の意欲の向上につながり、より多様な意見が生まれ、考えを深めることのできる話し合いとなった。

4 今後の課題

毎時間ごとの振り返りの方法を工夫することで、児童が自分の学びを積み重ねている実感をもつことができたと考える。また、音読劇の練習で、互いに音読の様子を見て、良い点や改善点を伝え合う時間を設ければ、より質の高い劇になったかもしれない。しかし音読の様子を児童同士で評価し合う際には、どの点をどのように評価するのかを教師が具体的に示す必要があると考える。

社会的事象に進んで関わり、社会的な見方や考え方を確かにしていく子供の育成

－ 第5学年 社会科「これからの食料生産とわたしたち」の実践から －

上市町立上市中央小学校 教諭 渡 辺 大 貴

1 課題設定の理由

本学級の子供たちは、社会的事象に対して「なぜ」「どうして」と関心をもち、学習問題に対して進んで調べている。しかし、自分の考えの根拠が希薄であったり、一つの資料で自分の考えの整合性を図り、一面的な見方で留まったりすることが多い。そこで、学習問題をAorBの形にし、立場を明確にさせた上で調べ学習を行ったり、自分の考えの根拠をもって話し合わせたりすることで、社会的事象をより多角的・多面的に見る力を養えると考えた。

2 研究実践

(1) 切実感をもって社会的事象に関わるための学習問題づくり

社会的事象に対する子供のイメージにずれを生じさせ、興味、関心を引き出した上で学習問題に繋げようと、本単元の導入では、国産と外国産のブロッコリーを見比べたり、食べ比べたりする活動を行った。興味や関心を高めるために、どちらのブロッコリーが国産、外国産なのかを伏せ、視覚や触覚、味覚で国産のブロッコリーを当てるように投げかけた。また、すぐに食べ比べを行うのではなく、国産と外国産のブロッコリーの写真を提示したことで、国産というだけで、価格が100円以上高いことに驚いたり、消費者にとって安く買える輸入食料のよさを感じたりした。実際に食べてみると、「あまり味が変わらない」「どっちもおいしい」という反応が多く、半数近くの子供が外国産のブロッコリーを国産と間違えた。国産と外国産は、見た目や味にほとんど差異がないことが分かり、国産、外国産の潜在的なイメージにずれを生じさせ、意欲を喚起することができた。



国産、外国産のブロッコリー

その後、主な食料の輸入量や自給率の変化が分かる資料を提示し、話し合った。「このまま外国産の食料が増加すると、国産のものが食べられなくなる」「好きなものを食べられる今の食生活を変えたくない」「安くおいしい外国産のものが増えることはいいことだ」などの意見が出た。多様な考えを引き出した上で、「外国産の輸入食料を増やすべきか、減らすべきか」という学習問題に繋がったことで、外国産の食料や自給率に対する興味、関心を引き出すと共に、より切実感をもって食料問題に向き合うことができたと考えた。

(2) 社会的な見方や考え方を広げたり深めたりするための話し合い

根拠を明確にして話し合いができるように、調べ学習では、自分の考えの裏付けとなる根拠を探すことを意識させるとともに教師とノートによる対話を繰り返し行い、子供が資料の理解や認識を深められるようにした。また、根拠とする資料を教科書や資料集に限定したことで、話し合いでは、同じ立場なのに根拠とする資料が違ったり一つの資料を違う見方で捉えたりする子供が見られた。



根拠を示しながら発言する子供

話し合いの終末では、「これからの日本は、外国産の食料の輸入を〇〇すべき」という一つの結論を出させた。どちらの考えがよいのかを結論付けず、それぞれの立場の共通性や問題点を整理するようなまとめもあるが、獲得した知識や概念を基に、一個人ではなく、広い視野をもって意思決定することは、社会形成に参画する基礎を培うと考えた。学級で決まった結論に納得のいかない子供もいたが、その結論に対し、自分に何ができるのかと再考する子供も見られた。

3 研究の成果

- ・単元の導入として行った体験活動では、考えをより確かなものにしたらずれを生じさせたりすることができた。そして社会的事象に対する興味や疑問を引き出し、子供の思いを生かした学習問題をつくることができた。
- ・AorBの形の学習問題の設定や話し合いの終末に一つの結論を出すことを伝えたことが、自分の立場や考えの根拠を意識して調べ活動を行ったり、根拠とする資料に基づきながら自信をもって自分の思いを語ったりする態度に繋がった。

4 今後の課題

子供同士が対話をしながら課題解決を図る授業を目指すために、子供の思考を意識した単元構想や、社会的事象をより広い視野で捉えられる手立てを考えたい。

互いに認め合い、高め合う学級づくりを目指して

－ 3学年 体育科(マット運動) －

船橋村立舟橋小学校 教諭 加藤 夕海

1 課題設定の理由

本学級は、運動好きな子供が多く、休み時間はほとんどの児童が体育館や外へ遊びに行っている。前単元のリズムダンスでは、休み時間にもビデオを使ってダンスステップを覚えることに熱中する子供が多くいた。しかし、グループでのダンス作りになると、できる動きは沢山あるのに自分がやりたい動きを友達に伝えられなかったり、反対にやりたい動きを譲らなかったりする姿が見られた。

このような実態から、自分の技を練習して「できない」動きが「できる」ようになったり、「できる」動きが「より上手にできる」ようになったりする楽しさが味わえるマット運動は、本学級の子供たちが意欲的に取り組むことができる学習であると考えた。また、客観的に自分の動きを見ることが上達への近道であり、グループ活動や友達との関わりから、子供たち同士で認め合い、高め合う場面を作るチャンスがあると考え、この教科・領域で実践した。

2 研究実践

① どの子供も「できた」を感じられる場の設定

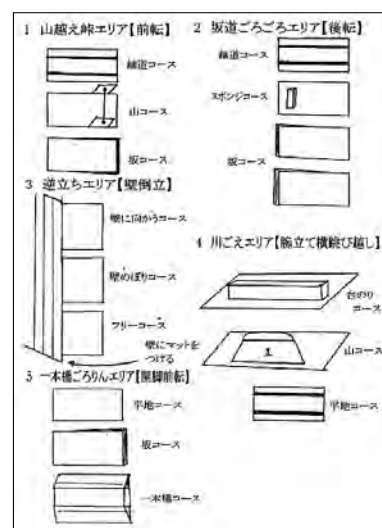
技をするときに補助となるような工夫を加えた場を設定した。踏み切り板やミニハードル、スポンジなどを使って様々な場を作り、子供が選んで挑戦できる環境を作った。(右図参照)

② ワークシートで毎回の振り返り

毎回個人の振り返りシートには、「みんなで協力し合えた」か丸を付け、その理由も書かせた。教師は毎時間の振り返りを参考に、全員が協力し合えたグループにはピカチュウポイントをあげ、掲示していくシステムにした。また、子供の振り返りの内容で「友達がアドバイスをくれて技が出来て嬉しかった」などの友達との関わりで成長できた内容は、子供の許可を得て、全体に紹介した。

③ ICT活用で、動きを見る力をつける個々への指導

毎回、授業の最後に、子供たち同士で技の動画を撮った。そして、その動画を個別に教師と共に見て振り返った。動画を見る際は、「どうだった?」等の声かけを行い、自分で考えさせるようにした。また「先生は、足を～しているところが上手だと思ったよ」等、足や腰など見る視点を絞ってよさを見つける力を付けられるように声をかけた。そうしていくと、単元後半の壁倒立では、「膝もっとのばせばいいよ」と友達からアドバイスをもらった子供が一生懸命練習し、グループの友達は横で補助して手助けする場面が見られた。



3 研究の成果

①②については、互いに認め合う手立てとして有効だった。自分の選んだ場所で技ができることで喜びを共感し、認め合う姿が見られた。また、ワークシートでは、みんなでポイントゲットを目指し、友達と関わろうとする姿や、ワークシートを紹介した後、「友達にアドバイスをもらったから私もアドバイスをしてあげたい」などの感想を書く姿が見られた。

③については、高め合う手立てとして有効だった。全体で、動画から動きのポイントを見付けさせた際、頭・手・腰・お尻・足等の視点を絞った気付きが多く見られ、子供たち同士で見つけたポイントを共有できていた。その視点からアドバイスする姿も見られた。

4 今後の課題

子供が互いに認め合い、高め合おうとする姿が見られた。しかし、まだまだ自分の練習に精一杯で友達の姿を見る意識が薄い子供もいる。今回は体育の準備や振り返り等の時間にできる認め合う、高め合う支援ができたが、授業の活動中に子供たちを巻き込む言葉かけや、確実に見合ってアドバイスする仕組みづくりなどで、さらに多くの子供たちが認め合い高め合う事ができると考えている。この実践を今後にかかしていきたい。

学習への意欲を高める教材開発の工夫

－「算数すごろく」で楽しく学ぶ 魔法の4分間－

富山市立豊田小学校 教諭 山田 愛 弥
(RI 富山市立桜谷小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級の児童は、算数に苦手意識をもつ子供が多くいる。そのため、毎回の授業の導入で、短時間でできる楽しい活動を取り入れることで、算数に対する抵抗感をなくせないかと考えた。また、先輩教諭から、1年生での数の合成や分解の知識は、算数科で学習する内容の基礎となる重要な学習であり、繰り返し学習することが大切であると教わった。そこで、算数科における基礎的な力を楽しく身に付けてほしいと願い、本課題を設定した。

2 研究実践

算数への抵抗感をなくし、学習への意欲を高めるためには、子供たちが興味を示すものを提示し、友達と共にスモールステップで進められるものがよいのではないかと考えた。また、子供たちが喜ぶ仕掛けを用意することで、意欲が継続したまま繰り返し活動でき、知識の定着を図ることができるのではないかと考えた。そこで、1学期に子供たちの話題によく出てきたキャラクターを登場させた「算数すごろく」を開発することにした。以下に、「算数すごろく」の内容と活用の工夫についてまとめる。

「算数すごろく」とは、さいころをふり、出た目の数だけ進み、止まった場所に書いてあるお題にチャレンジし、ゴールを目指すというものである。お題は「いくつといくつ」の学習の復習になっている。ペアで取り組むことにし、一人がお題の答えを言うと、相手は答えが合っているかどうか伝えることを約束した。時間は4分間。ゴールしたらまたスタートに戻り、何度も取り組んでよいこととした。

①算数への抵抗感をなくし、学習への意欲を高めるための「算数すごろく」の開発

すごろくのマスには、子供たちに人気のあるキャラクターを登場させたことで、大喜びの様子であった。そして「やってみよう」とわくわく感をもたせることができた。バージョン1(「10よりおおきいかず」の単元で実施)の前半は数の分解のお題、後半は数の合成のお題を設定した(図1)。バージョン2(「たしざん」の単元で実施)では、マスが進むにつれて、大きな数が登場するようになっている。易しいお題から始まることに気付き、安心して取り組み始めることができた。算数の授業の導入で毎回取り組んだことで、言い表し方が定着し、答える速度が速くなった。また、難しいお題になった際には、ペアの友達にヒントをもらって答える姿が見られた。4分間の活動後、全員が笑顔になり、明るい雰囲気での学習を進めることができた。



図1 算数すごろく バージョン1

②「算数すごろく」への意欲を継続させ、知識の定着を図る仕掛け

教室の後方にバトルゾーンを設け、友達とすごろくを楽しめる空間を作った。ゴールすると、背面黒板の自分のネームプレート動かすことができる(図2)。5回動かしたら、担任のお題に答えるチャンスが与えられる。正解すると、好きなキャラクターのカードがもらえることにした。すると、休み時間に友達と誘い合ってすごろくをする姿が見られた。カードを何種類も用意しておいたことで、繰り返し挑戦したいという思いをもたせることができた。そして、担任のお題に、即座に答えられる子供が増えていった。

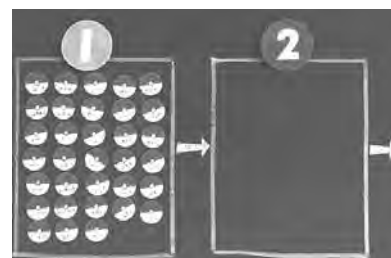


図2 背面黒板の取り組みの進捗を示す掲示

3 研究の成果

「算数が嫌い」だと答える子供が25%いた。算数すごろくを実施するうちに「算数すごろくをしたから、足し算が分かるようになってきたよ」と教えてくれる子供が出てきた。今では、学級の100%の子供が「算数が好き」だと言うようになった。楽しみながら繰り返し数の概念に触れることで、知識が定着するとともに、加法や減法の技能が高まり、分かる喜びを感じられたのだと考える。

4 今後の課題

1年生では、単元に必要となる「基礎的な技能」とは何かを考えやすいが、学年が上がると既習事項との関連、系統性を理解した上で、習得すべき「基礎的な技能」を捉えていく必要がある。また、個々のつまづきを理解し、児童の実態に合った4分間(または導入の時間)を仕組むことが不可欠である。今後も教材研究と児童理解に努め、学習への抵抗感を和らげ、一人一人が主体的に学べる授業づくりを目指していきたい。

自ら課題をもち、解決をはかろうとする子供の育成

－ 第5学年 学級活動「クラス会議」の実践を通して －

富山市立広田小学校 教諭 加藤 由莉

1 課題設定の理由

本学級には、休み時間に友達や教師と会話することが好きな子供が多くいる。しかし、授業中に積極的に自分の考えを発言しようとする子や、友達の考えと自分の考えを比べて発言しようとする子は少ない。また、指示されたことには真面目に取り組むが、自分たちで企画し、何かに取り組むことは苦手のようにあった。そこで、日常生活で生まれた友達の思いや、悩みを理解し、子供たちの力で解決策を考え、実践していく力を高めたいと考え本題を設定した。

2 研究実践

○全員で参加していると感じられる学習環境・学習形態

①形態の工夫

4月当初、自分の意見と異なる意見に対して、強い口調で反論する場面や友達の意見に無関心な様子がみられた。そこで、クラス会議の時は全員で輪になってお互いの顔が見えるようにして話し合うことにした。すると、子供たちは、自然と話し手の方を向くようになり、うなずいたり、驚いたり反応しながら聞く姿が見られるようになった。



②座席の決め方の工夫

クラス会議の座席は「靴下の長さが長い順」「好きな色が明るい順」など、テーマに沿って毎回変わるものにした。アトラダムな座席処理となったことにより、子供たちは、普段あまり話すことのない人とも言葉を交わす機会が増え、友達の声に耳を傾けたりするきっかけとなった。

○「何でも言ってもよい」と感じられる雰囲気づくり

①個人の悩みから、クラスの問題へ

クラス会議の前に、個人の悩みやみんなに聞きたいことを集め、それを議題として話し合った。「授業中眠くなる時の対策を教えて」「家の犬にどんな色の服を着せたらいいか」など、複数の解決策が考えられる議題も取り上げたことで、自由に自分の意見を話すことができた。繰り返し行うことで、話すことに抵抗がなくなり、臆することなく発言する子供が増えてきた。

②言葉遣いの指導

話し合いが活発になるにつれて、「～には、反対です」「それってどういうことなんですか」と言葉遣いがきつくなり、険悪な雰囲気になる様子がみられた。そのため、「温かい雰囲気での話し合いを進めるためには、どのような言葉をつかうとよいか」を子供たちと考えた。その結果、「賛成」は「～がよいと思います」、「反対」は「～が心配です」という言葉で伝えることにした。相手意識を高めることによって、「〇〇さんの意見は分かるのですが、私はこう思います。それについて、どう思いますか?」「〇〇さん、もう少し詳しく教えてください」と、友達の気持ちを害することのない、言葉を選べるようになってきた。

3 研究の成果

子供たちは、課題の解決策を自分達で話し合い、実践することを通して、自分たちの力でクラスをよりよく変えていけることを実感した。すると、「〇〇について、クラス会議をしたいんですが、いつなら時間ありますか?」「みんなで話し合ったのに、成果がみられないからもう一度クラス会議をしていいですか?」という声が聞かれるようになり、主体的に行動しようとする雰囲気が生まれた。

4 今後の課題

提案者に共感できなかったり、クラスの問題意識が低かったりすると、話し合う必要感がなく、活発な議論につながらない。提案者の思いがより多くの子供に伝わるようにするための支援の在り方を考えていきたい。

仲間や教材と関わり、自分らしい読みをもととする子供の育成

－『スイミー』を読む』の実践から－

富山市立堀川小学校 教諭 犀川 かい

1 課題設定の理由

これまで物語の学習において、音読や書き込みをして、場面ごとに読むという自分なりの単元の構造がパターン化されつつあった。そこで今年度、初めて低学年を担当したことで、低年齢期の子供らしい生活を基盤とした豊かな読み方や学び方ができる学習に挑戦したいと考え、本実践に取り組んだ。

2 研究実践 －「スイミー」を読む－

(1) 体や時間をかけて教材を引き寄せ、独自の視点をもつ子供

本単元は、子供たちが「読む」ことへの見方・考え方を広げて学ぶ姿を構想し、「『スイミー』を読む」と投げかけて展開した。

A君は模造紙6枚を繋ぎ、実物大の巨大マグロを描くことで、巨大マグロの大きさをより具体的に想像しようとした。そして私は、A君は、スイミーとの大きさの比較から、スイミーが感じた恐怖心について読んでいるだろうと考えた。しかし、A君は「マグロも生きていかなければならない。だから、赤い魚たちを食べたんだと思う」と、マグロの側に立った発言をするのである。A君は、マグロの絵を何日もかけて仕上げ、いくうちにマグロに寄り添い、マグロばかりが悪者には思えなくなってきたのではないだろうか。体や時間をかけて教材と関わって読もうとしたことで、それぞれの生き物が一生懸命に生きようとしている世界を想像するに至ったA君らしい見方が生まれたのだと考える。



【A君の描いた大きなマグロの絵】

(2) 仲間との関わりを背景に登場人物に共感し、自らの生き方を振り返る子供

Bさんは、学習の中で「仲間を大事にした」と書いてきた。それは、これまで仲間に対し強くあたってきたことで、心から友達と呼べる仲間ができないBさんだからこその願いだと考えた。

授業で取り上げ、考えの根拠となる叙述を聞く(下線①)と、Bさんは「探した」という言葉(下線②)を用いてきた。「スイミー」に「探した」という言葉はないが、仲間を失い独りぼっちで泳ぐスイミーの姿に自身の体験を重ねたことで、「スイミーはみつけた」の場面を、物語の冒頭から「仲間を探し、やっと見付けることができた」場面として読みを昇華させていったBさんなのであった。

Bさんの読み方を詳しく聞き合い、物語の読みと自分、更には今後の実生活を繋いで捉えていこうとするよさを感じられないかと考えたが、「探したって(言葉は)ないよ」と呟かれるなど、Bさんらしい読み方を共有していくことは容易ではなかった。それでも、DさんやEさんたちは、Bさんの発言を受け止め、よりよく関わろうとする思いを伝えたのであった。

B:今、考えていることは、仲間を大事にする目当てなのね。そして、1年生のときから、私はいじわるとかをしていたから、2年生のときは、いじわるをあんまりしなないようにしたいと思っているのね。(中略)私とスイミーでは、スイミーは仲間を大事にしていたから、私は、仲間をあんまり大事にしなかったから、友達がいなかった。スイミーみたいに仲間を大事にしたいです。
T:ふーん。スイミーの話の、どこからそう思ったの?①
B:スイミーは赤い魚たちを探した。②
C:(探したってないよ。うーん、わからん。)
T:もう少し詳しく言える?
B:どうしてかというと、スイミーは赤い魚たちを、ちゃんと探して、見付けられたから、私は、スイミーみたいに私もなりたい。だって、前、先生と話を、仲間を大事にしなかったら、友達がなくなっていくよって言うてくれたから、私はもっと友達をつくりたいから。(中略)
D:Bさんは、1年生のときよりも成長したなあと思うから、優しくしている。
E:私も、1年生の頃よりBさんが優しくなっていて、お友達になりたい。

【10月1日の授業記録(一部抜粋)】

3 研究の成果

低学年の子供たちは、教材文と密接に関わっていくことで、その子らしい視点や感じ方、実生活をもちこんでダイナミックに読もうとする。そのために、教師は読むこと的手段的・内容的な固定概念を取り払い、一人一人違った学び方を支えていくことが大切であると実感した。また、そのように読むことで、子供は物語の内容を超えた仲間との関わりを求めていこうとする。

4 今後の課題

一人一人違った学び方を捉え、支えていくことは容易ではない。子供の読みが、何をきっかけに、どのように変わったのかといった実態把握が曖昧で、教師が子供の発言を適切に取り上げることができないことがあった。改めて、授業以前に子供を正確に捉えていくことの難しさや、授業中に瞬間的に解釈する力の重要性を痛感し、今後も実践を通じて学んでいきたいと強く思う。

互いの思いを尊重し、進んで関わり合い達成に向かう子供の育成を目指して

－ 理科「てこのはたらき」授業実践を通して －

富山市立山室中部小学校 教諭 吉岡真依
(R1 富山市立鶴坂小学校での実践)

1 課題設定の理由

6年生という発達段階の子供たちにとって同学年の仲間を気遣い、互いを意識しながら関わっていくことが大切であると考え、本課題を設定した。本学級の子供たちは、学級集団としての自分たちに自信がなく、口々に消極的な発言をするなど自己肯定感が低い。そこで、たくさんの仲間から認められる心地よさを感じる経験を増やし、また生活を共にする中で課題を達成する体験を重ねていくことで、自己肯定感を高め、仲間がいてよかったと心から喜べる心情を育てたいと考え、本単元を設定した。

2 研究実践

子供たちが進んで関わり合い助け合う授業実践 理科～てこのはたらき～

○問題解決に向けて追究するための学習形態の工夫


単元の中で、実験内容や考えの深まりに応じて学習形態を工夫することとし、単元の始めは主にグループでの活動時間を充実させた。そうすることで、理科を苦手としている子供、意欲が持続しにくい子供も、仲間と励まし合いながら最後まで問題解決に取り組むことができた。また、グループ活動で、学習の土台となるてこの仕組みについての理解を確実にしたことで、一人実験の際に実験方法やその手順、結果整理から考察へと戸惑わず学習を進めることができた。



〈自信をもって一人実験に臨む子供〉

○学習意欲を高める単元構想の工夫

子供たちの意欲が高まるよう「先生を救出！」という課題を単元の節目で設けた。子供たちの反応や思考を大切にし、最初の構想を変更させつつ取り組むことで、最後まで思考の流れを妨げることなく意欲を維持し、取り組むことができた。

(最初の単元構想)  (子供の反応等から変更した単元構想) 見直した点

第 一 次	先生を救出！パート1 ・重い買い物袋を楽に運ぶための方法を考えよう。	第 一 次	先生を救出！パート1 ・重い買い物袋を楽に運ぶための方法を考えよう。
第 二 次	先生を救出！パート2 ・重い買い物袋2つを楽に運ぶための方法を考えよう。	第 二 次	先生を救出！パート2 ・重い買い物袋2つを楽に運ぶための方法を考えよう。
<p>肩に担ぐと楽だけど、真っ直ぐにならない。</p> <p>左右に1つずつかけると楽な気がするよ。支点は肩より首がいいと思うよ。</p> <p>袋の重さがいつも同じとは限らないよ。違う重さだとどうすればよいのかな。</p>		<p>先生を救出！パート3 (パート2より生まれた疑問から) ・2つの買い物袋を水平につり合わせるにはどうすればよいか考えよう。 ・袋の重さが違うときはどうしたらよいか考えよう。</p>	
<p>先生を救出！パート3 ・左右の太さが違う棒でもてこのきまりは成り立つのか考えよう。</p> <p>棒の太さが違うのだから、つり合わせることができないよ</p> <p>支点はいつでも真ん中ではないんだな。水平にすることが大切だ。</p> <p>太さが違う物は他にもあるけれど、どんな物でも成り立つのか調べたい。</p>		<p>先生を救出！パート4 ・左右の太さが違う棒でもてこのきまりは成り立つのか考えよう。</p> <p>先生を救出！パート4の② ・いろいろな太さが違う棒をつり合わせる方法を考え、てこのきまりが成り立つか考えよう。 (スプーン・ボールペン・歯ブラシ等)</p>	
第 三 次	・身近にあるてこを生かした道具を見つけて紹介しよう。	第 三 次	・身近にあるてこを生かした道具を見つけて紹介しよう。

3 研究の成果

- ・学習形態を工夫し、スモールステップでグループ学習から個人に移行することは自信をもって実験に取り組むために有効であった。
- ・子供たちの思考の流れに沿ってその都度単元構想を見直すことは、てこのきまりについて理解を深めることに役立った。
- ・「単元構想」を基に、子供の実態に合わせた課題を見直すことで子供の疑問に沿った学習追究を進めることができた。

4 今後の課題

- ・子供たちの実態を把握し、さらに必要感をもって学習に取り組むことができる単元構想や課題提示の方法を追究する必要がある。
- ・理解を深めるために、実験の条件付けを行う必要がある。本当に考えさせたい内容の吟味が必要である。

国語科(2年生)の話す・聞く・読むを確実に身に付ける具体的な手立てについて

富山市立大久保小学校 教諭 柳 田 朱 音

1 課題設定の理由

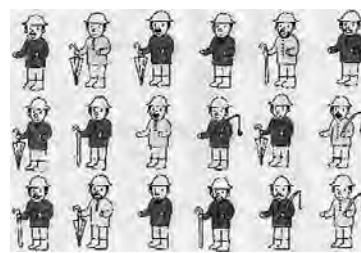
本学級の子供たちは、教師や友達の話に興味をもって聞き始めるが、なかなか最後まで聞くことができなかつたり、話すときに知らせたいことを分かりやすく話せなかつたりする。話す・聞く・読むの基本的な力を確実に身に付ける必要があると考え、本課題を設定した。

2 研究実践

だいたいなことをおとさずに話したり聞いたりしよう「ともこさんはどこかな」の実践から

(1) 単元に興味をもつための導入の工夫

本単元では、絵の中から人物を選び、その人物の特徴をアナウンスし、それに該当する人物を探す言語活動をゲーム感覚で行う。本単元に興味を持つことができるよう、導入として自作教材「おじさんをさがそう」というゲームをした。最初は人物の特徴となる部分を服の色、持ち物、ひげの有無等に絞って提示し、その後、性別、髪型と特徴を少しずつ増やした。容易な課題から少しずつ難しくすることで、子供たちは活動に意欲的に取り組むことができた。

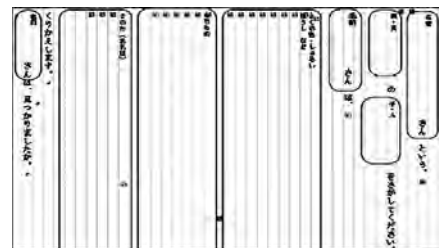


〈導入時に使った「おじさんをさがそう」の絵〉

次に「ともこさんはどこかな」の絵を見て、聞いたり話したりする活動を行った。子供たちからは「前にやってみたいに、持ち物のことを言ったらわかりやすくて見付けられそう」「前やった時と同じで、服装のことを伝えるのは大事そうだね」と、導入で学んだ特徴で選別することを生かし、見通しをもって学習に取り組めた。

(2) 話すこと、聞くことを意識したワークシート

アナウンス原稿を書くワークシートは、学習する際に必要な部分のみを提示する方法を三段階で提示した。はじめは、①キーワードのみ書き入れると文ができるもの、次は、②補助的な言葉が書いてあり、その言葉をヒントにしながら文をつくるもの、最後は、③罫線だけが書かれ、一から自分で文章を書くものである。このように、書く内容を段階的に増やしたワークシートを用意したことで、全員が抵抗感なく文章づくりに取り組めた。



〈②の補助的な言葉を入れたワークシート〉

(3) 目当てを明確にした振り返りカード

みんなで考えた話し方、聞き方のポイントを明記したカードを用意し、自己評価を行った。「話す時、聞いている人がメモできたかを見てから話したら、相手に伝わって嬉しかった」「ぼくは、話すときにいつも急いでしまうから、はっきりゆっくり言いたい」「次は大事な言葉をはっきり言いたい」など、カードの内容を意識して、学習に取り組むことができた。また、達成できなかったことを次時の目当てにしたいという思いをもつ子供も見られた。



〈振り返りカード〉

3 研究の成果

- ・導入で、課題を容易にしたゲームを体験したことで「ともこさんはどこかな」でも、多くの子供が探すポイントを見付けるなど、見通しをもって授業に取り組むことができた。
- ・書く内容を段階的に増やすなど、ワークシートを工夫することで、自信をもって書いたり話したりすることができた。
- ・振り返りカードを使うことで、話し方と聞き方のポイントに沿って自己評価ができた。また、次の目当てを明確にもつことができた。

4 今後の課題

- ・子供たちの学習の習熟度を考え、自分で考えた言葉で三段階に提示したワークシートを選んで使えるようにすることも必要だった。

主体的に学習し、自信をもって意見を主張する子供を目指して

－ 6年 国語科（学級討論会をしよう）－

富山市立大庄小学校 教諭 杉本 菜由

1 課題設定の理由

本学級では、話し合いにおいて積極的に自分の意見を伝えることが苦手な児童が多く、学習でも受け身になってしまう場面が見られる。そこで、自分たちが主体で学習を進め、その中で自信をもって意見を主張できるような姿を目指し「学級討論会をしよう」の単元で以下の実践を行った。

2 研究実践

(1) 単元構想の工夫と実態に合ったテーマ設定

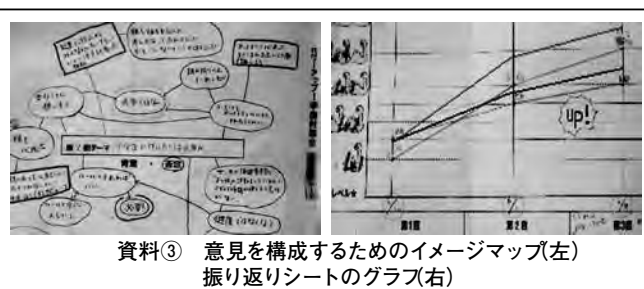
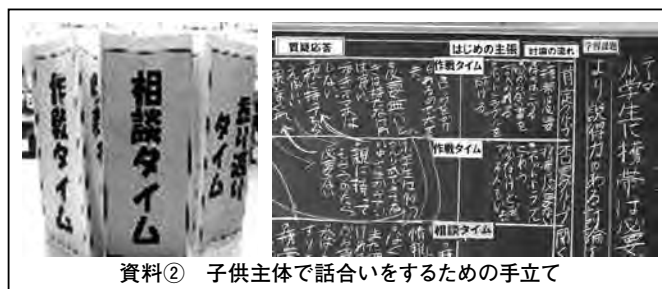
「学級討論会をしよう～レベルアップ！討論スキル～」と題し、全3回の討論を行うことを提示した。回を重ねるごとに、より説得力のある討論ができるように、段階的に課題を設定して取り組んだ。

テーマは「小学生にとって携帯電話は必要か」といった、自分たちに関わる身近なテーマとし、考えやすかつ根拠となる資料を集めやすいものに設定した。(資料①)



(2) 子供主体の話し合いにするための手立て

討論は「肯定」「否定」「聞く」「司会」という4つのグループに分かれて行い、それぞれの立場での役割を明確にした。黒板には「初めの主張」「質疑応答」といった学習の流れを分かるカードで位置付けたり、机上に同様の立て札を設置したりすることで、見通しをもって討論が進められるようにした。また、板書も子供が行い、時間を意識させながら進めた。(資料②)



(3) イメージマップの活用や振り返りの工夫

討論会の前には、自分の意見を広げるためにイメージマップを利用した。その中に予想される反論やそれに対する自分の考えなども取り入れていくことで、より主張を強固にできるようにした。振り返りワークシートにはそれぞれの役割で振り返る観点を明記し、自己評価・グループ評価ができるようにした。また、自分の討論スキルが上がっていることを実感できるように、自己評価した点数をグラフに表し可視化できるようにした(資料③)。加えて、授業後に自分たちの討論の様子をビデオ視聴することで、客観的な視点からも振り返られるようにした。

3 研究の成果

- (1) 児童にとって身近であり、根拠となる資料を集めやすいテーマを設定したことで、より説得力のある意見を構成し、自信をもって主張することができた。
- (2) 役割分担、黒板掲示や立て札等さまざまな手立てによって、見通しをもって児童主体の討論を進めていくことができた。
- (3) イメージマップの活用や振り返りの工夫(ワークシート、ビデオ視聴)をしたことで、自分の意見を分かりやすく構成したり、討論を重ねる中で自分の成長を捉えたりすることができた。

4 今後の課題

- ・児童主体で討論を行う中で、話題がそれてしまうことがあった。その場合、どのように修正していくかが課題である。また、必要に応じて教師が入るタイミングも考える余地がある。
- ・グループを4つに分けて討論を行ったが、「聞く」グループの人数が多いときに、話し合いに参加できていない児童が見られた。グループの中でさらに少人数に分け、全員が話し合いに参加できるようにする必要がある。

「自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい」人材の育成を目指して

－ ESDの推進を通して －

富山市立中央小学校 教諭 小幡 拓馬

1 課題設定の理由

現代に生きる子供たちがこれからの社会を生きぬくためには、「生きる力」が必要であると言われる。本校では「生きる力」を「思い描く力」「かかわる力」「成しとげる力」「みつめる力」の4つの力と捉え、学習過程・指導過程において「4つの力を育む」場を設定することで、ESDで重視する能力・態度が身に付くと考えている。

また、持続発展可能な社会を形成していくためには、人々が「自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい」考え方を身に付け、行動していくことが重要であると考えます。子供たちが、4つの力を身に付けながら学習に取り組むという本校のESDを通して「自然にやさしい 人にやさしい 地球にやさしい」人に育つことを願い、この課題を設定した。

2 研究実践

子供たちは総合的な学習の時間に、「ホットハートプロジェクト～みんなが笑顔になるために～」と題して自分と違う立場の方々と触れ合い(かかわる力)、ホットハート(人にやさしい)とは何かを考えた(みつめる力)。

(1) ホットハートを実践するための高齢者福祉施設での触れ合い

2学期に高齢者福祉施設を計4回訪問し、お年寄りの方とふれ合った。子供たちは訪問を重ねることで、どうすればお年寄りの方を笑顔にできるだろうかということを探り直し考え、話し合い、仲間と協力して活動に取り組んだ。

触れ合いの中でH児は、お年寄りの方の耳に口を近づけて話す友達の姿に気付き、相手の立場を考えて思いやりのある行動をすることがホットハートであると実感した。

活動を進めるうちに、M児は「お年寄りの方は、本当は楽しくないときでも笑ってくれたり拍手してくれたり『よかったよ』と言ってくれたりしているのではないか」と考え、学級での振り返りの際に投げかけた。F児は触れ合いの中でお年寄りの方に知恵の輪を教えてもらったことを全体に広め、「僕たちがお年寄りの方を楽しませるはずだったのに、逆になってしまった」と発言した。これらについて学級全体で話し合ううちに、子供たちはお年寄りの方の優しさにも気付いていった。

(2) 活動を振り返り、自分の高まりや頑張りを数値化・顕在化するホットハートメーター

高齢者福祉施設訪問やその準備の後に、一人一人が「ホットハートメーター」と称する自己評価カードを記入した。自分の取組を毎回振り返り数値化することで、子供は満足感を得られたり「次はもっとこうしたいな」と考えたりして、活動への意欲を高めていった。

また、ホットハートメーターを活動班ごとに掲示し、友達の高まりを知ったり比べたりした。話し合いの中で、メーターの値が低い友達にその理由を聴いてアドバイスしたり、同じ活動をした班の中でメーターの値に差異があれば原因を探ったりすることで、お年寄りの方との触れ合いをよりよくするために学級全体で考え、活動した。



3 研究の成果

施設を短期間に何度も訪問することで、子供の中に「次はもっと」という意欲が生まれ、主体的な活動に繋がった。そして、違う立場の人とかかわることと自分の活動をみつめることを繰り返しながら、「人にやさしい」自分になるための方法や、「人にやさしい」お年寄りの方の姿に自然と気付くことができた。また、ホットハートメーターを記入するにあたってホットハートの基準を全体で統一しなかったことで、子供は常に「ホットハートって何だろう」と考えながら活動に取り組むことができた。

4 今後の課題

今回訪問した高齢者福祉施設の利用者の方々は、毎日自宅から施設に通っている比較的元気なお年寄りの方であった。そのため子供たちは触れ合いの中での困り感があまりなく、結果として最終的な活動の満足度が全体的にとっても高くなった。今後の社会に必要な「生きる力」を育てるためには、上手いかわない経験、そしてそこからより一層深く考える経験も必要であると感じた。また、子供たちの触れ合いがスムーズに行われた背景には施設のスタッフの方々の力が大きいですが、今回の実践では「スタッフの方の優しさ」に子供が自ら気付くことはできなかった。子供たちがこれまでの学びを生かし、今後はより身近な人(クラスメートや家族など)に対するホットハートプロジェクトを実践し、誰にでも優しい人となるよう支援したい。そして、持続発展可能な社会の形成者としての資質を育てていきたい。

支え合う学級風土をつくる学級経営を目指して

－ 道徳科「モムンとヘーテ」の実践を通して －

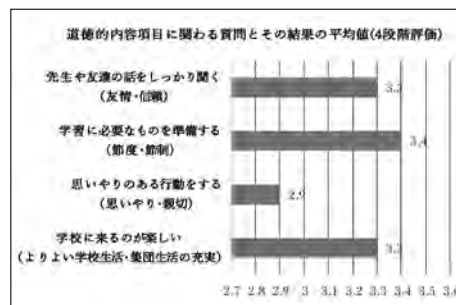
富山市立柳町小学校2年 教諭 番 匠 拓 也

1 課題設定の理由

本学級は、休み時間に校庭で汗を流して遊んだり、授業中、活動に真剣な表情で取り組んだりするエネルギー溢れる児童の姿が多く見られる。しかし、友達の意見や注意に耳を傾けず、自分のしたいことをし続けたり、自分の思いを突き通し続けたりして、友達と言いつ争いになることも多い。

4月に行った学級アンケートの項目と結果は右図のとおりである。

「思いやり・親切」に関する値が低い(2.9)ことから、友達を大切に思う気持ちを育むことが必要だと考えた。そこで、道徳科の時間を要とした道徳教育と学級活動に力を入れることで友達の様々な考え方や思いを知り、自分の考えや思いを見直し、互いを支え合う学級風土の醸成を願い、本課題を設定した。



2 研究実践

(1) 教育活動全体で育む学級風土

互いのよさに気付かせ、友達の考えや思いを共感できる機会を増やしたいと思い、鬼ごっこやドッジボール遊び、全員での音読劇やダンス等、学級全体で行う活動を多く取り入れた。その日の帰りの会「ピカピカタイム」で友達のよい行動を発表することとし、自分の思いや友達のよさを広めるようにした。

また、学級目標を「思いやり・親切」の意味を込め「仲よく笑顔で頑張る2年生」とし、目指す学級にどれだけ近付けたか、毎月取組状況を振り返る時間をもつようにした。そうすることで、友達とトラブルがあったときにも、学級目標に照らしながら、自分の行動を振り返られるようになり、友達とよりよい関係を築き、支え合おうと努めるようになった。

(2) 道徳科の時間を要とした心の教育

道徳科の時間の話し合いでは、教材の登場人物の心情に共感させ、多様な価値観にふれ、よりよい生き方を見つめさせたいと考え、2つの手立てを講じた。例えば、教材「モムンとヘーテ」の実践では、友達の多様な意見を聞き、友達を思いやる心について考えさせる授業を行った。

① 状況を捉えやすくするための視聴覚的支援

児童の発達段階より、二人の登場人物の関係性や出来事を視聴覚的に理解することで、自分の考えをもちやすくなると考え、ICT機器を活用した。そうしたことで「雨が降っているからどこに逃げたらよいのだろう」「栗の皮が役立ったよ」と主人公の状況を捉え、より共感しながら話し合いが進んでいった。



〈視聴覚的に捉えやすいアニメーション〉

② 友達の考えを聞き合う場の設定

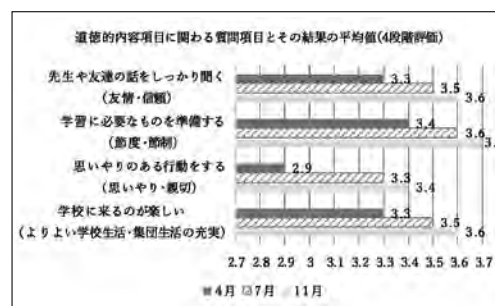
主人公の葛藤している2場面を比較、考える場を設定した。比較したことで、主人公の気持ちの変化が捉えやすくなるとともに「今は好きじゃないけれど後で会いたくなるかもしれない」「一人で逃げようと思ったけれど、おいていくわけにはいかないよ」などと、友達の考えを聞き合うことで、多様な価値観に触れることができた。

3 研究の成果

- 自分や友達のよさを見つけ広める場や多様な価値観に触れる場を設定することで友達を認め、思いやりのある姿が増え、自身の心の成長を実感する児童が増えた。(2.9→3.4)
- ICT機器を活用することで主人公の心情に共感しながら学習を進めていくことができた。

4 今後の課題

- 子供たちが自身の成長や友達のよさを実感できるように、取組の足跡が分かるような掲示物の工夫や教材研究を行い、分かり合い、支え合う学級風土を築いていきたい。



主体的に学習に取り組み、仲間と共にのびのびと表現する子供の育成

－ 体育科「たのしくへんしん！～ぼく・わたしのやさい～」より－

富山市立奥田北小学校 教諭 野村 早希
(R1 富山市立月岡小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級は、運動することが好きな子供が多い。5月には、単元名「たのしくへんしん！～2の2どうぶつランド～」で、動物をテーマとした表現遊びの学習をし、友達と体を動かしたり、動きを真似し合ったりした。最初は不安や恥じらいがあり、自分らしく表現できない子供がいたが、なりた動物に楽しみながら変身し、表現遊びの楽しさや喜びを味わうことができた。

本単元では、全身を使って踊ることの楽しさを感じながら、さらに主体的にのびのびと表現することができる子供になることを願い、本課題を設定した。

2 研究実践

(1) イメージを膨らませ多様な動きを引き出す工夫

①生活科と関連付け、段階的に学習を進める単元構想

夢中で表したい世界を表現できるように、題材を生活科の学習で育てた「野菜」にした。生活科で栽培した野菜の様子を写真や観察カードを見て振り返ったり、感じたことを話し合ったりして、イメージの世界に入り込めるようにした。



(野菜かるた)

②イメージの世界に入り込む野菜かるた

野菜のイメージを明確にして世界に入り込むために、野菜の成長や変化をオノマトペで表した野菜かるたを子供が作る場をもった。同じ言葉でもイメージする動きが子供によって異なるため、様々な表現が生まれた。即興的に表現することの楽しさが味わえるように、野菜かるたをランダムで取り表現する活動をし、徐々に個人から集団で表現する活動をした。

③動きを見合い、多様な表現を広げるワークショップ

見合う場をワークショップ形式にすることで、追体験して友達の動きのよさに気付き自分の動きに取り入れることができた。自分の動きのよさを認めてもらうことによって、自分の動きのよさに気付くことができた。



(見合いの場)

(2) 他者と進んで関わり、自分の思いをもって表現する楽しさを感じたI児

I児は、体育科の学習が好きであるが、周りに合わせて活動に取り組むことが多かった。そのようなI児の本単元での取組を振り返り、考察する。

	I児の振り返りカードから	考 察
1/8時	これから楽しく変身できるように、真剣に表現遊びをした。でも、動物ランドのときみたいには自信をもって動かなかったので、次はがんばりたい。	野菜を表現した経験がないため、野菜のイメージが明確にもせず、自信をもって表現できなかった。そこで、図鑑や写真、記録した観察カードを見て様子を振り返り、これまでの成長の様子を引き出した。
2/8時	野菜かるたを見てイメージした動きを、自分なりに表現できた。仲の良い友達に自分から声をかけてペアを組み、茎がくねくねしている様子を表現した。	図鑑を見たり野菜を観察したりしたことで、これまでの野菜の成長を想起し、第2時にはイメージをもって表現できた。イメージをもつことができたことで、野菜の茎がくねくねとした様子を表現したいという意欲を高めていた。
4/8時	かるたで実がぐんぐん大きくなる様子を表すために、自分から友達に声をかけることができた。	初めて4枚の野菜かるたで表現する活動をした。図鑑や畑の野菜を見た際のイメージを基に、野菜かるたのオノマトペの言葉によって、イメージがより明確になった。「茎に変身するから、実になってくれるかな。」とあまり関わりのなかった友達に自分から声をかけ、一人では表現できないことを他者とともに、動きを組み合わせて表現しようとしていた。
6/8時	グループで動きを考えることが難しかったけれど、写真の動きを試したり、オノマトペからイメージする動きをしたりした。きゅうりがバナナのようにくねくね曲がっている様子を表すために、体を腰から曲げたりねじったりした。	野菜の世界に浸り、イメージを膨らませていけるように、体育館には、これまで育てた野菜の写真を掲示した。グループで動きを考えることが難しいと感じたI児は、掲示した写真やかるたを手がかりに表現しようとしていた。くねくねした様子を、他のグループから認めてもらったことで、自信をもって表現できた。
8/8時	野菜で表現することは、動物の時よりも難しいと思っていたけれど、身近なものだと気付いてからは調べてその動きができるから、とても楽しかった。一人でも楽しいけれど、友達と一緒に表現するともっと楽しかった。自分だけではなく、みんなも野菜になりきって全身で表現できたから、うれしい。	7/8時で、ナスをグループで表現できたことに満足した。ワークショップ形式による見合う場で、互いの動きを参考にすることができた。また、友達のよい動きに気付き、発表することができた。個人だけではなく集団で表現することで、みんなで全身を使い表現することの楽しさに気付いた。しかし、全体の場で見合った際、どのような点に着目して見るとよいか明確でなかったため、見直す点についてあまり子供からは出なかった。

I児は、今まであまり関わりがなかった友達に自分から声をかけて動きの説明をしたり、考えた動きを実際にやって見せたりしていた。積極的にお気に入りの動きや友達のよい動きを発表し、意欲的に取り組む姿から、I児の成長を感じた。

3 研究の成果

- ・生活科で野菜を育てた経験を基に、野菜のイメージをもてるように支援することで、表したいことのイメージを膨らませ、多様な動きを見だし、楽しみながら表現することができた。
- ・一人ではできない動きを、ペアやグループでいろいろな友達と関わりながら複数人で表し、表現する楽しさをさらに味わうことができた。

4 今後の課題

- ・さらにより表現をつくるために、互いの表現を見る場をどのように仕組んでいけばよいか。

主体的に関わり合う子供の育成

－ 特別支援学級での実践から －

射水市立堀岡小学校 教諭 市村光代
(R1 富山市立光陽小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級には、3名の児童が在籍している。クラスのために活躍しようと頑張る反面、自分のやり方を押し通そうとしがちな6年生のA児。興味・関心があると集中力を発揮するが、物事へのこだわりが強い4年生のB児。周囲の状況を見てそれを真似て行動することができるが、自分の苦手なことには取り組まないことが多い1年生C児である。

子供たちは、それぞれにこだわりがあり、一緒に活動することが難しい。そこで、日頃行っている清掃活動を通して、子供たちが意欲的に取り組み、友達と役割を分担し、関わり合っ活動することのよさに気付いてほしいと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

関わりを生むための視覚的な支援の提示

清掃活動では、掃除の技能や手順があまり定着しておらず、友達と協力して教室をきれいにしたいという意識が乏しかった。そこで、掃除をする必要性を感じ取らせ、友達と協力して清掃活動に取り組んでほしいと願い、7分間で新幹線の車内を清掃する人たちの仕事の様子や自分たちの清掃活動の様子を撮影した動画を視聴した後、話合いの機会を設定した。



【協力して掃除を行う児童】

【子供たちの発言から】

T: どうして掃除をするのかな？

B児: ぴかぴかになると気持ちがいいから。

A児: 掃除をするのは、めんどろだけど、教室がきれいだと嬉しい。

T: 自分たちが掃除をしている様子はどう？

B児: 同じ所ばかり掃除をしている。

A児: 雑巾を持ってうろうろしている。

T: これから、どのようなところに気を付けて掃除をしていく？

B児: 掃除をするところを決めようよ。あと、「Aさん、手伝って」と声をかける。

A児: Bさんがこの前、隅にごみがあるのを見付けたから、隅っこを掃除する。



【四つの目当て】

この話合いを通して、子供たちは「協力」「声かけ」「すみずみ」「分担」の四つの目当てを決めた。目当てを達成すると、各々の目当ての星に色を塗る。それらを全て塗ると「マイスター賞」がもらえることとした。子供たちは「マイスター賞」を目指し、掃除に取り組んでいった。常に目当てを意識するよう声をかけることで、「声をかけて掃除をしよう」「黒板の下が汚れているから一緒にきれいにしよう」等、互いに声を掛け合ったり、協力したりする姿が見られるようになった。また、子供たちが清掃活動に取り組みやすいように、床や棚を拭くときの雑巾の使い方が分かるよう絵で示した掲示物を準備したり、手順表を掲示したりした。このような視覚的な支援を通して、汚れた場所を見付けると、手順表等の掲示を真似て、雑巾やスポンジ等の使い方に気を配るようになり、きれいになった教室を眺め満足感を味わう姿が見られるようになった。友達と協力して教室をきれいにしたいという意欲が高まってきたと考える。

また、子供同士の関わり合いを生むために目当てに対する振り返りの時間を設定し、友達の素敵などころを聞き合ったり、自分たちの取組をさらに広めていくためにはどうしたらよいかを考えたりする時間を設けた。「Bさんが、洗面所をきれいに磨いていたよ」と友達のよいところを伝え合ったり、「みんなで落ち葉はきをしようよ」「学習参観があるから、教室の大掃除をしようよ」等、子供たちが一緒に進んで清掃活動に取り組んだりする姿が見られるようになった。目当ての振り返りの時間に友達のよさを伝え合うことで、協働することのよさを学び、友達と関わる楽しさを味わうことができた。

3 研究の成果

清掃活動についての自分たちの取り組み方を見つめ、実践することを通して、積極的にコミュニケーションを図ったり、協力したりするなど友達と主体的に関わる姿が見られるようになった。また、掃除の目当てや手順表等を掲示することにより、活動に見通しをもつことができ、活動への意欲を持続させることができた。

4 今後の課題

友達と一緒に活動をするよさを感じられる場を意図的に設定し、子供たちが協働する機会を重ねていく単元構想が必要である。自立活動は、子供たちがもっている困難を克服する学習である。苦手なことや困難なことでも、やってみたいと思えるような楽しい授業を今後さらに追究していかなければならない。

友達と関わり合いながら共に高め合う児童の育成

－ 第4学年 外国語活動「おすすめの文房具セットを作ろう」の実践から －

高岡市立横田小学校 教諭 濱 元 大 輝
(RI 高岡市立福岡小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級には、授業において積極的に発言したり、考えを書いたりする児童が多い。しかし協力して課題を達成することや他の考えを受け入れることが苦手な児童もいる。そこで他者と関わり合い、共に考えを広めたり、深めたりすることができる児童の姿を期待し、本課題を設定した。

2 研究実践

(1) 「協働」を重視した活動の設定

相手の思いを受け止め、積極的に自分の思いを伝えるには、友達と協力しながら活動する具体的な活動の場面設定とゴール(活動の目的)に向かうための意図的な聞くこと、話すことの活動を仕組むことが大切である。そこで具体的な場面として、友達のためにオリジナルの文房具セットを作る場面を設定した。



オリジナルの文房具セットを集めている場面

今までは、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ活動を行う際に、ゲームを取り入れて競争させてきたが、いつの間にか勝負が主の目的になってしまうことがあった。本実践では、ペアやグループで協力しながら、課題をこなすゲームや活動を中心に組み組んだ。例えば、カードゲームでは、答えの分かった児童にはヒントを出させるようにした。英語が得意な児童は、ヒントを出すことで、知っている単語を別の言葉やジェスチャーを交えて何とか伝えたいという気持ちからコミュニケーション能力が育ったようである。また、ヒントを聞いて分かった児童が増えたことを賞賛することで、互いに助け合う児童や、教えてもらった際に自然に“Thank you.”と言える児童が増え、友達と関わり合いながら学びを深める姿がみられた。オリジナルの文房具セットを作る場面においてもこの活動が生き、「友達の欲しい文房具を見付けたい」という思いが、積極的に英語で聞いたり話したりしようとする態度につながったようである。

(2) 児童が互いのよさを認め合い、次時につなげるための評価方法(カード、タブレット等)の工夫

単元を見通すことができる振り返りカードを用意して、その中に友達のほめたい姿を記述する「今日のMVP」コーナーを設けたり、児童が振り返りの記述をしやすいように、評価する視点を板書に位置付けたりして、相互評価をさせる場を設定した。活動に関する相互評価によって、友達同士の関わり合いが生まれ、学びへの意欲が高まったと考える。

D児は、当初、単元を通して学習中の英語だけを用いて交流していたが、ペアのIさんの積極的な活動の姿を見て、既習表現を用いて、Iさんの好きな色を尋ねながら、コミュニケーションを図ろうと取り組んだ。振り返りの際は、タブレットを活用し、コミュニケーションを図っている場面を撮影することで、自分たちの姿を客観的に捉えられるようにした。教室の児童は、その動画を見て成果と課題を発表し、次時の活動はその点を意識して取り組むことができた。

今日のMVPはIさんです。Iさんは、ほくに好きな色や持っている文房具を聞きながら文房具(カード)を集めてくれてうれしかったからです。【D児の振り返りカードより】

3 研究の成果

- ・「協働」を重視した慣れ親しみの活動を充実させることや、友達との関わり合いの視点を振り返りカードに取り入れることで、児童相互のコミュニケーションの量と質を高めることができた。また、他の授業でも、児童が互いにヒントを出し合いながら助け合ったり、児童自ら友達と話し合い、係活動をしたりするようにもなった。
- ・振り返りカードの工夫やタブレットの活用により、児童相互が関わり合いながら学習を振り返り、成果と課題を明らかにすることができた。

4 今後の課題

児童が互いに協力して行う活動や、互いのよいところを伝えたり認めたりする場を設定することで、単元構成が複雑になることがあった。「何のための活動か」(目的)「どうやって行うのか」(方法)を明確にするなどして、児童自身が見通しをもって活動できるように授業を構成していく必要がある。振り返りを行う際は、あらかじめ視点を示すことで、教師も児童も評価内容を焦点化できるようにしたい。

自分の考えを見つめ直し、深める子供の育成

－ 第5学年 国語科「大造じいさんとガン」の実践を通して －

小矢部市立石動小学校 教諭 藤川 愛子

1 課題設定の理由

本教材「大造じいさんとガン」は、場面の転換や物語の山場の部分等に、登場人物の行動を映す細かい描写が見られ、自然描写や行動描写の巧みさにより、児童を物語の世界に引き込むものとなっている。本単元は、情景、場面についての描写、登場人物の相互関係や心情を捉え、優れた叙述について自分なりの考えをまとめるとともに、友達との交流を通して、考えを広げたり深めたりすることがねらいである。そこで、「大造じいさんとガンのみりよく発見ブック」を作り、友達に魅力を伝え合う活動を通して、人それぞれに感じ方があることを知り、物語の読み方の多様性に気付かせたいと考え、この課題を設定した。

2 研究実践

(1) 主体的な学習にするための学習の見通しを明確にした単元構成

意欲的に活動に取り組むことができるように「大造じいさんとガンのみりよく発見ブック」を作り、友達や家族に魅力を伝えるという言語活動を設定した。「みりよく発見ブック」を書くために、場面毎に「一人読み、話し合い、一番印象に残った叙述の選定、振り返り」を一連の流れとして取り組んだ。子供たちは自分の考えや物語の魅力を書きためていくにつれて、自分なりに場面の様子や登場人物の心情を想像しながら読むことができるようになった。また、友達の考えと自分の考えを比較し、同じ叙述でも感じ方が違うことに気付きながら学習を進めることができた。

(2) 作品を深く読むための根拠と考えを区別して書く一人読みの活動

根拠(叙述)から想像して考えることができるように、根拠と考えをセットで書く一人読みの活動を行った。この際に、「大造じいさんの行動・様子＝赤線」「残雪の行動・様子＝青線」「情景描写＝黒の波線」と根拠(叙述)を区別しながら書くようにした。このことで、子供たちは、大造じいさんの心情は他の登場人物の描写や情景描写からも読み取れることに気づき、作品を深く読むことができた。



〈みりよく発見ブック〉

(3) 心情の変化を視覚的に捉えやすくするための板書の工夫

心情の変化を視覚的に捉えることができるように、「残雪に対する大造じいさんの思いの強さ」を心情曲線として、板書に位置付けた。話し合った心情曲線を基に、「大造じいさんの残雪への思いが少しずつ変わってきて、『ただの鳥に対してしているような気がしませんでした。』のところで一番思いが強かったと思いました。」等と、子供たちは、自分の考えを見直し、一番印象に残った叙述を選定したり、振り返りを書いたりした。



〈心情曲線を用いた板書〉

3 研究の成果

- ・単元の導入で「みりよく発見ブック」を作り、友達や家族に「大造じいさんとガン」の魅力を伝え合うというゴールを提示したことや毎時間の学習活動をパターン化したことで、子供たちは、学習の見通しをもち、一人読みや話し合いに意欲的に取り組むことができた。
- ・各場面における一番印象に残った叙述の選定や振り返りを書く際に、友達の考えや心情曲線を基にすることで、自分の考えを見つめ直すことができた。

4 今後の課題

- ・心情曲線の「残雪に対する大造じいさんの思い」が抽象的であり、どのような思いの強さなのか全体で共有しきれなかったため、読み取りが深まらなかった。今後は、「残雪に対する思い」を具体化していくとともに、子供に心情曲線を描いてもらい、話し合いの手立てにするなど、子供の発言が繋がる授業にする必要がある。

天体学習における、モデルとシミュレーションソフトの効果的な活用について

－ 6学年 理科「月と太陽」の実践を通じて －

小矢部市立大谷小学校 教諭 石野 昌太郎

1 課題設定の理由

本単元が抱える課題として、天体のスケール感や空間の尺度があいまいであったり、天候や時間の制約等で満足に観察が行えずに学習を進める点が挙げられる。そこで、モデルやシミュレーションソフトを用いることで子供の関心を高め、主体的に学習に取り組める授業展開を提案する。

2 研究実践

(1) 天体のスケールや位置関係をダイナミックに体感できる教具の工夫

大きさの比較として「太陽は地球の約109倍、月は約1/4倍」と表現されることが多い。しかし、これは平面(直径)で捉えた場合であり、子供が実感をもって理解するためには、体積(直径の3乗)での比較が重要と考えた。そこで、月を直径6mmのBB弾、地球を2.5cmのビー玉、太陽を2.4mのバルーンのモデルとして表し、天体の大きさや宇宙空間での位置関係を相対的に比較できるように工夫した。

(2) 観察結果の補完としてのシミュレーションソフトの活用

限られた授業時数の中で、満足のいく観察結果を得ることは難しい。そこで、実際の観察を中心としつつも、シミュレーションソフト「つるちゃんのプラネタリウム」(無償)を補完的に用いることで、月の満ち欠けのデータが得られ、月の満ち欠けの規則性や、月の形と太陽の位置関係について子供が気付くきっかけになると考えた。

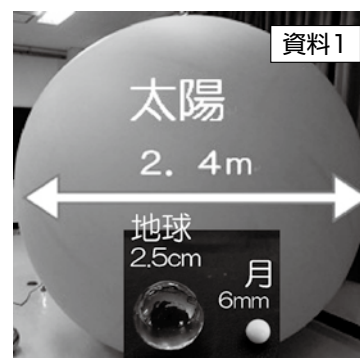
3 研究の成果

(1) 大きさを比較する場では、子供はBB弾(月)やビー玉(地球)をバルーン(太陽)の側まで持っていき「月が何個入るのだろう」「太陽は桁違いに大きいね」等、実感を伴いながら天体の大きさを理解することができた。また「空に見える太陽と月では、大きさがほとんど変わらないよね」という子供の発言を機に、バルーンをグラウンドの端に置き、月と太陽の見え方を比較した(資料3)。結果、見かけの大きさがほぼ等しくなり、子供たちは、日常的に捉えていた事実と、モデル実験との結果を関連付けて考察することができた。

(2) シミュレーションの西暦や日付は自由としつつ、時間帯を夕方(太陽の位置を西)に固定し、月の形の見え方に規則性が表れるようにした。観察記録やシミュレーションの結果を大教室の壁に貼り付け(資料4)、3次的に認識できるようにしたことで、子供たちは、月の輝いている側に太陽があること、満月が見える際は月・地球・太陽が一直線になること等に気づき、その後のモデル実験を、一人一人が仮説をもった状態で行うことができた。また、方位や高度等の空間認知が必要となる屋外観察を苦手とする子供は、ソフトウェアに表示された方位や経度を基にして、月の形とその位置を正しく記録することができた。

4 今後の課題

満ち欠けを俯瞰的視点での捉え(中学校)に、スムーズに移行するための学習の手立てについて。



〈太陽は地球の130万倍、月の6500万倍の大きさである(体積比)〉



〈短時間で大量のシミュレーションデータが得られた〉



〈見かけの大きさが等しくなった〉



〈比較可能な量のシミュレート結果〉

マット運動の集団演技における実践の工夫

富山市立楡原中学校 教諭 鈴木友之

1 課題設定の理由

マット運動は得意・不得意が大きく分かれる運動である。本校3学年の生徒は、2年次のマット運動の学習で基本的な技から発展技まで、幅広く習得した。しかし、倒立系や後転系を不得意とする生徒もいるため、補助を入れての技の実践等、練習方法を工夫しながら技を習得させた。

3年次ではグループで技を組み合わせ、ダイナミックに披露するマット運動の集団演技を実践した。音楽に合わせた演技を構成する中で、生徒同士が学び合う学習やICT機器の活用から、よりダイナミックな演技を構成するための工夫を、自ら考え、学び深めていく姿を期待して、この課題を設定した。

2 研究実践

① 発展的な演技をつくり出す補助動作の有効活用による工夫(写真1、2)

生徒は、4人一組のグループで、「前時までに習得した技を組み合わせる構成」について考えた。巧技的に発展した演技ばかりで構成しがちだが、生徒が習得している技能の段階が様々であるため、補助的動作を取り入れる場面を工夫した。また、補助的動作は、演技の一部として捉えさせたことで、習熟度の高い生徒は補助動作から自らの技へと繋げる発展的な演技の構成も考えることができた。

マット運動が苦手な生徒は、友達の補助を借りた演技が、集団演技の作品を構成する技の一つとなり得たことで、自己有用感や仲間との連帯感を味わうことができた。



〈写真1 話し合いの様子〉

② ICT機器の有効活用により、美しくダイナミックな演技を生み出すための工夫(写真3)

グループで考えた集団演技を繰り返し練習し、練習で気が付いた点や改善点等の意見を出し合う、学び合い活動の時間を設けた。

〈話し合い活動での意見〉

〔集団として〕

- ・動き出しのタイミングを合わせる。
- ・止まるところは止まる。
- ・マット全体を使って広く演技する。

〔個々の動き〕

- ・技の時、体をしっかり支える。
- ・各技しっかり体を伸ばしきる。
- ・演技外で無駄な動きがある。



〈写真2 補助を付けての技〉

これらの意見を改善するべく、ICT機器を使用し、自分たちの演技を俯瞰し、視覚的な確認を通し、その解決方法を考え、実践した。

③ 集団演技の改善点を共有化し、目指す演技を明確にする工夫

演技中に感じたことや自分たちの演技をICT機器で確認した際に気が付いた改善点や工夫点を次の課題のキーワードとして明確に提示した。また、個人としての課題も全体で共有したことで、一人一人が課題を意識し、より美しい演技へと繋げることができた。

集団や個人の課題の掲示物を残しておいたことで、演技を行う際に、適宜課題を確認することができた。また、振り返り時にも達成できた課題や未達成の課題をすぐに確認でき、次時への課題を考える手助けとなった。



〈写真3 演技を映像で確認〉

3 研究の成果

マット運動が苦手な生徒でも、集団演技の中でできる技を音楽や友達の演技の中に組み合わせることで、楽しみながら学習を進められていた。また、演技の構成の一部として補助を入れることで、自然な演技の流れの中で、補助付きの技を繰り返し広げられていた。

ICT機器を有効的に活用することで、本実践の課題でもある「ダイナミックな演技」が展開できた。

4 今後の課題

本実践ではマット運動における集団演技の完成をねらいとして学習した。ICT機器を活用したことや演技補助を別の視点で捉えさせることで、マット運動が苦手な生徒の技能は向上した。しかし、更に発展した技に取り組みたい生徒の学習の保障に関しては、課題が残る。今後は、個の目的に応じた技を習得させながら、より発展的な集団演技が行えるような時間や環境を工夫していきたい。

学び直しと学び合いを通して、自ら学習する子供の育成

氷見市立西の杜学園 教諭 喜多 俊介
(RI 氷見市立速川小学校での実践)

1 課題設定の理由

本学級は5年生8名、6年生6名、計14名の複式学級である。複式学級では、直接指導と間接指導の時間が存在する。間接指導では、子供たちが、自分で、あるいは自分たちで学習を進めなければならない、この時間にこそ学びが定着するようにしたいと考えている。しかし、実際は、自分たちで学習が進められないことも多い。そこで、間接指導の時間に子供たちが自らの力で学習に取り組むためには、自分たちで学習を進めるための知識技能の確認＝学び直しと、自分たちで話し合う、学び合いの力を付けることが大切であると考え、学び直しと学び合いを大切に授業を継続して展開し、自ら学習する子供の育成を目指し、実践を行った。

2 研究実践

(第5学年算数科「面積の求め方を考えよう」、第6学年算数科「速さの表し方を考えよう」の実践より)

子供が学ぶ必要感を感じられる課題を設定するために、5年生では、校内のステンドグラス(台形)、6年生では、校内マラソン記録会の記録といった子供にとって身近なものを教材にして単元を構想した。

	★…学び直し	◆…学び合い	□ 間接指導	■ 直接指導
	5年 学習活動	指導形態	6年 学習活動	
<ul style="list-style-type: none"> ・日直が司会となって、前時の復習を行い、本時の見通しを立てる。 ・学び直しから、既習を生かして問題を解く。 ・教師が考えを類型化する。考えのよさを共有する。自分の考えを位置づける。 ・個のレベルで友達の考えの良さを実感する。 	①前時の復習★ ②問題と課題を捉える ③自力解決に取り組む ④全体で話し合う◆ ⑤類題を解く◆ ⑥まとめ、振り返り		①問題と課題を捉える★ ③自力解決に取り組む ④全体で話し合う◆ ⑤類題を解く◆ ④全体で話し合い、まとめる◆ ⑥振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの問題とどこが違うか、既習を生かそうかイメージをもつ。 ・教師が考えを類型化する。考えのよさを共有する。自分の考えを位置づける。 ・友達の考えを生かそうと関わるときに、質問したり教え合ったり学び合いが生まれる。 ・子供たちで、類型化し、それぞれの考えを認め合う。

3 研究の成果

- ・学び直し、一人学び、学び合いの学習活動をパターン化し、繰り返すことにより、子供は学習の流れが分かり、安心して学習に臨むようになった。特に学び合いでは、友達の意見をよく聞いて自分の考えとの共通点や相違点を見付けたり、考えを深めたりしている様子が見受けられた、そのことが互いに認め合う学級風土の醸成につながっている。
- ・学び直しをいつでも行えるように、これまでの学習過程や内容を掲示することで、一人学びや間接指導の際に参考にして、自力解決に取り組むことができた。
- ・司会者の話型を示したり、担任のやり方を真似て司会をしている児童を全体に広めたりしたことで、全員が司会者の役をできるようになった。特に6年生は自分たちで学習を進めていこうという意識が強くなり、自分たちで学習を進めている。5年生もその姿を目標に成長している。
- ・本時の学習で何をねらうのかを明確にしたことで、意欲的に課題解決に向かうことができた。あらかじめ教師が子供の実態に合わせて直接指導と間接指導のバランスを考慮して1時間1時間を構想することは、学びを確実にするために有効であった。

4 今後の課題

- ・各単元の教材研究を行い、子供に任せる部分と、教師が教えなくてはならないことをしっかりと区別し、どの場面でのどのような一人学び、間接指導をするか、直接指導でおさえることは何か等を十分に考えておく必要がある。

生徒の主体性を引き出す製図の授業法について

富山県立砺波工業高等学校 教諭 島 勇 佑
(R1 富山県立富山工業高等学校定時制での実践)

1 課題設定の理由

本校定時制には、勉強に対し苦手意識を持った生徒が多く、主体的に学習しようとする生徒が少ない傾向にある。特に、1年次においては、初めて専門教科を学習することから、不安な気持ちを抱いている生徒が多い。このようなことから、導入部の段階で、生徒の不安材料を取り除くための工夫を施すことが大切である。このような実態を踏まえ、生徒がつまずきやすい投影図の単元において、生徒が主体的に学習に取り組める授業法を構築したいと考え、本課題を設定した。

2 研究実践

投影図は、全国工業高等学校長協会が主催する基礎製図検定の問題にも出題される重要な単元である。従来の授業では、頭の中で紙面上の立体図形をイメージするために、過去問題や問題集を解くことを中心に行っていた。しかし、空間認識能力が低い生徒は、頭の中で立体図形をイメージすることができず、早い段階で挫折することが多かった。このようなことから、過去問題や問題集を解く過程において、以下の二つを活用した授業を実践した。

(1) タブレットの活用(図2)

タブレットには、3次元CADソフトウェアで作成した立体図形を表示するアプリケーションが搭載されており、紙面上で立体図形をイメージできない生徒は、このアプリケーションを補助的に活用し問題を解くことができる。アプリケーションには、立体図形を回転させる機能があり、様々な方向から立体図形を見ることができる。タブレットを使うことで、ゲーム感覚で問題に取り組むことができ、立体図形に対する苦手意識が薄まったように感じた。



図1 練習問題に取り組む生徒



図2 タブレットを操作する生徒

(2) 3Dプリンタにより作製した立体模型の活用(図3)

上述したタブレットと並行して、3Dプリンタにより作製した立体模型を活用した。紙面の立体図形を立体模型にし、それを手に取ることで、タブレット以上に立体図形の形状が明瞭化され、生徒の理解度が高まった。紙面上で立体図形をイメージできなかった生徒からは、「こうなっていたんだ!」という声が挙がっていた。また、紙面上で立体図形をイメージできていた生徒も、立体模型で確認することで、納得感が高まっていた。



図3 立体模型を手に取る生徒

3 研究の成果

タブレットと立体模型を用い、立体図形が「見える化」したことで、空間認識能力が低い生徒の正解率が高くなった。また、生徒が自分自身でタブレット上の立体図形を回転させたり、立体模型を手に取ったりすることで、自分の力で問題を解こうとする主体性の向上がみられた。

4 今後の課題

本研究は、導入部を想定して行った。実際の検定ではタブレットや立体模型を持ち込めないことから、検定に向けた対策(紙面の立体図形のみで問題を解くまでの流れ)を細かく構築する必要があると実感した。

◇ 課題研究奨励助成報告「優良賞」

学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
朝日町立さみさと小学校	教 諭	高 澤 朋 美	共に学び合う子供の育成
魚津市立よつば小学校	教 諭	徳 本 里 歩	特別支援学級の児童の育成
入善町立桃李小学校	養護教諭	岩 田 遥	子供たちの心身の健康の保持増進を目指して
黒部市立中央小学校	教 諭	吉 江 純 菜	子供が相互に関わり合い、互いの考えを認め合うための話し合いの場の設定
滑川市立東部小学校	教 諭	小 里 卓 己	アクティブラーニングの視点を取り入れた授業づくり
立山町立立山中央小学校	教 諭	谷 口 真 凜	集団活動を通して、主体的・協働的に探究し、よりよい生活や人間関係を築こうとする子供の育成
富山市立大広田小学校	教 諭	村 西 司	友達とかかわりながら考え、自己を見つめる道徳科の授業構想
富山市立新庄北小学校	教 諭	松 井 絵 美	問題意識をもちながら考え進めることができる授業づくりの工夫
富山市立熊野小学校	教 諭	野 崎 友 晴	一人一人の子供に居場所がある学級づくりの工夫
富山市立草島小学校	教 諭	網 谷 夏 実	子供たちが主体的に取り組み、学ぶ楽しさを味わうことができる授業を目指して
富山市立上滝小学校	養護教諭	篠 田 侑香里	自分の健康に関心をもち、心と体の健康づくりを主体的・協働的に実践していく子供の育成
富山市立鶴坂小学校	教 諭	里 見 侑 香	課題を自分事として捉え、主体的に取り組む子供の育成
富山市立朝日小学校	養護教諭	島 田 裕 美	自らの健康について、課題や解決策を主体的に探究する子供の育成
富山市立光陽小学校	教 諭	荒 井 莉 奈	自分の知識や経験を重ね合わせて教材文を読み、自分の考えを表現できる子供の育成
射水市立太閤山小学校	教 諭	関 間 瑞 範	作品に愛着をもち、「そうぞう力」を育てる工夫
射水市立太閤山小学校	教 諭	鷺 平 綾 音	聴覚障害のある児童が生き生きと取り組み、達成感を味わえる指導過程について
高岡市立木津小学校	教 諭	亀ヶ谷 和 可	主体的・協働的に取り組み、学びに向かう力を育成するための算数科の授業の工夫
高岡市立下関小学校	教 諭	久 湊 愛 佳	多様な考え方に気付き、よりよい解決方法を見付けるための工夫
高岡市立下関小学校	教 諭	栗 木 謙	「仲間」と共に高め合う児童の育成を目指して
高岡市立戸出西部小学校	教 諭	藤 長 拓 巳	集団として規範意識を育てるための生徒指導と学級経営の在り方
高岡市立牧野小学校	教 諭	齋 藤 圭 吾	自分の考えをもち、共に高め合う子供の育成
砺波市立砺波東部小学校	教 諭	金 子 真 弓	協働して音楽活動をする楽しさを十分に味わえる授業を目指して
砺波市立砺波南部小学校	教 諭	松 井 優 佳	友達と関わり合いながら学びを深める子供の育成
南砺市立利賀小学校	教 諭	三 部 晴 夏	自ら学ぶ子供の育成
立山町立雄山中学校	教 諭	巢 山 普 照	特別支援教育における教材の選択や提示の工夫
富山市立城山中学校	教 諭	和 田 直 也	学びに向かう力の育成
射水市立射北中学校	教 諭	茶 谷 美 香	道徳授業における教科書教材と自主開発教材を用いた授業づくりの一考察
射水市立小杉南中学校	教 諭	大井川 拓 磨	学級での話し合いを通して、合意形成を図る力を高める指導の工夫
富山県立上市高等学校	教 諭	中 嶋 千 遥	ICT 機器を活用した、課題発見力を高める授業づくり
富山県立福岡高等学校	教 諭	荒 井 琢 巳	授業シートを用いた、生徒の「書く」「まとめる」能力の向上を図る指導

* 令和2年度課題研究助成報告一覧

	学校名	職名	氏名	研究課題
1	朝日町立 さみさと小学校	教諭	高澤 朋美	主体的な言語活動を通して、言葉の力を高める授業の創造
2		教諭	松井 和貴子	多様な考えを引き出し、主体的な言語活動を生み出す授業づくり
3		教諭	高澤 伸治	自信をもって、自分の課題や思いを表現できる子供の育成
4		教諭	村井 美里	集中して学習に取り組む授業を目指して
5		教諭	舟根 唯	主体的な言語活動を通して、言葉の力を高める授業の創造
6		教諭	吉島 大貴	互いのよさを認め合い、高め合える学級を目指して
7		教諭	稲毛 渚	互いが一人一人のよさを認め合う学級作りを目指して
8	入善町立黒東小学校	教諭	勝田 優太	思いや願いの実現に向けて探究する子供の育成を目指して
9		教諭	古川 舞	思いや願いの実現に向けて探究する子供の育成を目指して
10		教諭	山ノ下 千佳	思いや願いの実現に向けて探求する子供の育成を目指して
11	入善町立上青小学校	教諭	戸島 えりこ	自分事として考えるための道徳科の授業の在り方
12	入善町立入善小学校	教諭	本村 翔平	児童一人一人のよさを引き出す学級経営の工夫
13		教諭	國木 裕里	自ら考えをもち、表現できる児童の育成
14		教諭	寺崎 和也	理科における ICT 機器の活用について
15		教諭	森田 美穂	児童一人一人のよさを引き出す学級経営の工夫
16		教諭	宮田 莉那	自らの思いを表現し、他者とよりよく関わることができる子どもの育成
17		臨時栄職	幅口 友貴	安全・安心な給食を目指して
18	入善町立ひばり野小学校	養護教諭	南保 美智	子供が心身の健康に興味をもち、健康の保持増進に向けて意欲的に取り組むための指導の工夫
19	入善町立桃李小学校	教諭	住吉 淳子	学習意欲を促す学習過程と教材の工夫
20		教諭	横田 智哉	実物を観察し学習意欲を高める指導の工夫
21	黒部市立中央小学校	教諭	石橋 卓也	問題解決への糸口を見付け、算数への苦手意識を少なくする授業作り
22		教諭	寺林 亜耶	社会的な見方・考え方を働かせるための工夫
23		教諭	吉江 純菜	自分らしく努力しようとする児童の育成
24		教諭	能登 花織	算数科における視覚的支援を活用した指導の工夫
25		教諭	小川 陽平	特別支援教育の視点を生かした授業づくりの工夫
26		教諭	鍛治 太成	特別支援教育の視点を生かした授業づくりの工夫
27		教諭	魚津 知里	自分の考えを持ち、表現できる子供の育成を目指して
28	黒部市立宇奈月小学校	養護教諭	津幡 洋子	主体的に感染症対策に取り組む子供の育成
29	魚津市立 星の杜小学校	教諭	宮崎 勇斗	確かな学力を身に付け、主体的に学び合う児童の育成
30		教諭	村尾 美咲	特別支援級における「分かる・できる」喜びを実感する支援の在り方
31		教諭	赤堀 亜弓	確かな学力を身に付け、主体的に学び合う児童の育成
32	魚津市立 よつば小学校	教諭	松下 真歩	互いの思いや考えを聞き合い、認め合う学級づくり
33		教諭	徳本 里歩	“できた”を実感できる授業づくり
34	魚津市立清流小学校	教諭	高嶋 みなみ	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
35		教諭	大森 玲央	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
36		教諭	難波 情	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
37		教諭	寺西 恵里佳	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
38		教諭	清水 貴美子	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
39		教諭	河内 美里	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成
40		教諭	高村 達也	分かる喜び、学ぶ楽しさを味わいながら主体的に学ぶ子供の育成

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
41	魚津市立道下小学校	教 諭	谷 内 亮 太	友達と関わり合いながら考えをつくり上げていく授業の工夫
42		教 諭	濱 田 晴 菜	社会的な見方を働かせながら、主体的に学び合う社会科の授業づくり
43		教 諭	松 原 はるか	児童が互いに関わり合いながら、学びを再構築するための教師の支援の在り方
44		教 諭	富 居 美 加	主体的・対話的に学び合う児童の育成
45		教 諭	猿 倉 薫	主体的・対話的に探究し、確かな学びをつくり上げる児童の育成
46		教 諭	丹 保 慧 紀	主体的に学び合い、考えを深めていく授業
47		教 諭	高 橋 梨 奈	主体的に探究し、確かな学びをつくり上げる児童の育成
48	滑川市立寺家小学校	教 諭	小 泉 遥	仲間と共に学び合う子供の育成
49		教 諭	丸 本 瞳	仲間と共に学び合う子供の育成
50	滑川市立田中小学校	教 諭	中 田 啓 介	外国語活動における学ぶ意欲を引き出す授業づくりを目指して
51		教 諭	飯 坂 真 央	日常生活に生きる力を育む算数科の指導の工夫
52		教 諭	武 田 佳 樹	理科における深い学びを生み出す教材開発
53		教 諭	魚 住 志 貴	子供の学ぶ意欲を引き出す授業づくりを目指して
54		教 諭	狐 塚 三紀子	わかる授業を目指した基本的な学習環境や板書の工夫
55	滑川市立東加積小学校	教 諭	中 澤 祥 恵	自他の考えのよさに気付き、考えを深めるための授業の工夫
56		教 諭	保 科 理 絵	互いに関わり合うための授業づくり
57		教 諭	寺 井 涼	自分の考えをもち、互いに関わり合うための話し合い活動の工夫
58	滑川市立南部小学校	教 諭	野 田 壮 太	誰もが自力解決できる児童の姿を目指して
59		教 諭	酒 井 佑 介	論理的思考力の育成を目指して
60		教 諭	関 口 早 紀	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
61		教 諭	島 谷 怜 佑	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
62		教 諭	飯 野 真 由	主体的・対話的に学び合い、考えを深めていく子供の育成
63	滑川市立西部小学校	教 諭	山 林 耕 大	子供たちが主体的に関わり合い、学びを深めていくための支援の在り方
64		教 諭	藤 澤 舞 奈	子供たちが主体的に関わり合い、学びを深めていくための支援の在り方
65		教 諭	中 田 和 帆	豊かに運動に取り組み、動きを高める子供の育成
66		教 諭	舟 根 慎	子供たちが主体的に関わり合い、学びを深めていくための支援の在り方
67		教 諭	谷 口 結 香	子供たちが主体的に関わり合い、学びを深めていくための支援の在り方
68	上市町立上市中央小学校	教 諭	寶 田 光 平	規律ある、あたたかい学級集団づくりの在り方
69		教 諭	渡 辺 大 貴	互いにつながり合い、高め合う子供の育成
70		教 諭	國 木 克 弘	見通しをもち、主体的に問題解決しようとする児童の育成
71		教 諭	村 井 大 輔	運動の楽しさや喜びを味わい、仲間とともに成長する体育学習
72		教 諭	石 倉 萌	聞き合い、学び合いの学級づくり
73	立山町立立山北部小学校	教 諭	岩 崎 志 海	対象との関わりを通して、学びを追究する子供の育成
74		教 諭	布 一 優美子	自分の思いを表現しながら、主体的に学ぶ子供の育成
75	立山町立立山中央小学校	教 諭	寺 林 誠 大	自分の考えをもち、主体的・協働的な学びを促すための単元構想の工夫
76		教 諭	谷 口 真 凜	互いの考えの共通点や相違点を確かめたり、比べ合ったりしながら、合意形成を図ろうとする子供の育成
77		教 諭	加 茂 峻 輔	子供の生活経験や発見・気付きを大切に、題材や単元の工夫
78		教 諭	大 浦 匠	意欲的に課題解決に取り組む教具の工夫
79		教 諭	西 尾 愛 花	自他を大切に、互いに高め合いながら学ぶための場の設定や教材の工夫
80	舟橋村立舟橋小学校	教 諭	陽 弥 生	学級における特別な支援を要する子供への教師の関わり
81		教 諭	中 田 早 紀	一人一人が自分の考えをもち、意欲的に課題に取り組むための工夫
82		教 諭	加 藤 夕 海	子供の興味関心を生かした学習の工夫

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
83	舟橋村立舟橋小学校	養護教諭	千代ももこ	校内の事故防止における養護教諭の役割
84		教諭	宮崎 颯生	友達との関わり合いを楽しみながら学ぶ子供の育成
85	富山市立岩瀬小学校	教諭	五十嵐 広己	関わりの中で自分なりの問いをもち、主体的に考えを深めようとする子供の育成
86		教諭	若瀬 亮太	互いの考えを聴き合いながら、考えを認め合う子供の育成
87		教諭	加藤 綾乃	子供たちの意欲を引き出し、主体的に学ぼうとする子供の育成
88	富山市立針原小学校	教諭	藤木 真衣	互いのよさを認め合いながら、学ぶ楽しさを感じられる授業づくり
89		教諭	按田 栞奈	一人一人が自分の成長を実感し、仲間と高め合える学級づくり
90		教諭	飯田 涼平	子供たちの実践意欲を高めるための学習の流れと問い返しの工夫
91	富山市立 浜黒崎小学校	教諭	内山 寛弥	考える見通しをもち、仲間とともに課題を解決する児童の育成
92		教諭	上野 友里愛	子供が思考を広げ、深めていく授業の工夫
93		教諭	荒川 愛	多面的・多角的に考えていくための効果的な指導のあり方
94		教諭	渡辺 未佳	のびのびと自分の思いや考えを表現する子供の育成
95		教諭	湯口 佳穂	友達との関わりを通して、学びを深める子供の育成
96	富山市立 大広田小学校	教諭	村西 司	登場人物の変化を捉えるための単元構想と指導の在り方
97		教諭	油谷 美咲	友達との関わりを通して、自分の考えを深めていく子供の育成
98		教諭	太田 凧紗	友達との関わりを深めながら、自分の思いを表現していく子供の育成を目指して
99		教諭	大井 崇裕	子供が「できる」ことを実感し、意欲的に取り組む体育の授業づくり
100		教諭	吉岡 純一	既習事項を使って考え、説明する子供の育成
101		教諭	山崎 公稀	共によりよく生きようとする子供を育てる道徳教育の在り方
102		教諭	稲沢 美花	どの子も要約が「できる」と感じられるようにするための手立ての工夫
103		教諭	馬淵 愛弥	課題を自分事として捉え、主体的に学習するための授業の工夫
104	富山市立豊田小学校	教諭	田中 仁郭	子供の学習意欲を高める学習支援
105		教諭	奥沢 綾香	書く楽しみを実感できる国語科「書くこと」の授業づくり
106		教諭	嶋 拓哉	学び合いのある道徳科の授業づくり
107		教諭	島 菊乃	自分の考えをもつ工夫
108		教諭	宮部 成矢	自分の考えをもち、進んで伝える子供の育成
109		教諭	水口 沙也加	自分の思いや考えをもち、伝え合うことができる子供を目指して
110		臨任講師	新國 茜	一人学級において言語表現を広げる工夫
111	富山市立草島小学校	教諭	藤井 佑輔	第6学年外国語科の学習を通じた子供の自己肯定感を高める指導の工夫について
112		教諭	網谷 夏実	自分の考えや思いを大切に、主体的に学ぶことができる授業を目指して
113		教諭	村井 展	児童が自分の思いや考えをもち、表現できる言語活動の工夫
114		教諭	中島 彩香	一人一人が自分の考えをもち、主体的に学ぼうとする子供の育成
115		教諭	倉橋 萌子	既習内容を活用し、主体的に課題解決しようとする子供の育成
116	富山市立倉垣小学校	教諭	堺 明希	自ら課題を見付け、お互いを尊重しながら問題解決に臨む子供の育成
117		教諭	大川 祐佳	自分の思いや考えをもち関わり合いながら学ぶ授業づくり
118		教諭	細川 清華	子供たちが主体的に学び合うための工夫
119	富山市立新庄小学校	教諭	水野 晴香	主体的に取り組む授業の工夫
120		教諭	竹腰 彩美	自他を大切にしながら楽しく学ぶ子供の育成
121		教諭	野口 由貴	自分の思いをのびのびと表現する子供の育成
122	富山市立 藤ノ木小学校	教諭	渡邊 奈緒子	主体的に学習に取り組み、学びを広げる授業の工夫
123		教諭	滑川 寧	主体的に学び、友達と共に考えを深める子供の育成
124		教諭	稲垣 朱梨	主体的・共同的に探究し、確かな学びをつくり上げる子供の育成

	学校名	職名	氏名	研究課題
125	富山市立 藤ノ木小学校	教諭	森山 かおり	主体的・対話的に言語活動に取り組むための工夫
126		教諭	早崎 祐 登	子供の知りたい、学びたいという意欲を引き出すための学習展開
127		教諭	中山 朋 音	主体的に学び、自分の考えを深めていく子供の育成
128		教諭	水口 凌 哉	主体的に考えを深めていく子供を育む指導の工夫
129		教諭	横山 友 香	自己肯定感を高め、主体的に行動できる子供の育成
130	富山市立広田小学校	教諭	深川 智 広	自ら疑問を見つけ、自らの力で学ぶことを楽しんでいく児童を育てる指導
131		教諭	加藤 由 莉	教材と向き合い、自分の考えをもつことができる指導
132		教諭	坪野 加 奈	関心をもって友達の考えを聞き、学び合う子供の育成
133		教諭	中里 英 恵	社会的事象に進んで関わり、社会的な見方・考え方を身に付けていく子供の育成を目指して
134		教諭	牧野 圭 佑	思いやりの心を見つけ育む学級
135	富山市立 水橋西部小学校	教諭	廣野 かおり	子供たちの自己肯定感を高めるために
136		教諭	風呂谷 淳 史	共に学び合う子供の育成
137		教諭	菅原 彩 香	子供たちが互いに助け合い、高め合いながら過ごすことができる学級経営
138	富山市立 水橋中部小学校	教諭	飯山 晴 香	自分の思いを表現する子供の育成を目指して
139		教諭	野村 亮 太	クラスの子供全員が理解できる授業を目指して
140	富山市立 水橋東部小学校	教諭	谷川 礼 恵	共に学び合う中で自分の考えを広めることができる指導の在り方
141		教諭	中川 瑞 菜	一人一人が自分の考えをもち、表現することができる指導の在り方
142		教諭	水上 瑞 紀	一人一人が課題意識をもち、分かる喜びを実感できる指導の在り方
143	富山市立三郷小学校	教諭	橋本 壮 嗣	仲間と協力し、作戦を立てるための単元構成
144		教諭	岩野 絢 斗	授業が楽しいと感じられる学習課題の設定
145		教諭	堀場 祐 希	子供が楽しく学習するための導入の工夫
146		教諭	馬場 理 沙	子ども同士の学びをつなぐ板書の工夫
147	富山市立上条小学校	教諭	中田 明 莉	一人一人が考えを深める授業づくり
148		教諭	神田 愛 望	子供が主体的、意欲的に取り組める授業づくり
149		教諭	田中 美 玖	子供の好奇心をくすぐる授業づくり
150	富山市立 新庄北小学校	教諭	中村 達 也	子供が主体的に関わり合い、見方・考え方を深めていくための資料提示
151		教諭	松井 絵 美	叙述に着目して、自分の思いや考えをもつための授業の工夫
152		教諭	赤川 尚	自ら学ぶ子供を育てる学習指導の工夫
153		教諭	滝本 浩 希	子供同士の関わりを大切に、学級全員で学び合える授業づくり
154		教諭	新田 一 咲	一人一人が楽しく主体的に学ぶための指導の工夫
155		教諭	岸 美乃莉	その子らしい社会的な見方・考え方の働きを捉えるための振り返りの工夫
156		教諭	大竹 香奈恵	子供が考えたくなる「問い」を通して、学びを深めていく授業づくり
157		教諭	長澤 春 佳	子供同士の関わりが広がる支援の工夫
158	富山市立堀川小学校	教諭	長谷川 仁 義	図画工作科の鑑賞における、子供の造形的な見方・考え方をはたらかせる授業の在り方
159	富山市立山室小学校	教諭	丸山 智 史	全ての子供が成長を実感できる授業の工夫
160		教諭	牧野 智 美	主体的に問題解決に取り組み、互いに学び合い高め合う子供の育成
161		教諭	四谷 拓 也	児童一人一人が問いをもち、考える授業の工夫
162		教諭	松岡 尚 哉	子供が考えたい・知りたいと思い、夢中になって学習するための工夫
163		教諭	佐山 結	児童一人一人が互いに聞き合い伝え合うことができる授業づくりの工夫
164		教諭	弓部 真惟子	どの子も興味をもち、分かる手応えを感じることができる授業の工夫
165		教諭	古市 健	一人一人の実態にあった学びを作り出す「反転授業」の研究
166		教諭	定塚 和 也	児童一人一人が楽しめる体験的な授業の工夫

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
167	富山市立 山室中部小学校	教 諭	白 崎 弘 宜	思いやりの心を育むための学級経営の工夫
168		教 諭	廣 吉 由 莉	自ら学び、考え、伝え合う子供の育成
169		教 諭	真 門 薫 那	主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくり
170		教 諭	吉 田 文 香	分かる、できる、楽しい学習指導の工夫
171		教 諭	木 村 祐 希	一人一人が興味、関心をもち続けられる学習指導の工夫
172		教 諭	長谷田 詩 織	「できた」「楽しい」と感じられる学習指導の工夫
173	富山市立蜷川小学校	教 諭	奥 井 優 理	仲間と関わり合いながら自分の考えを深めていくための支援の工夫
174		教 諭	青 島 龍 平	一人一人に考えをもたせる支援の工夫
175		教 諭	桃 井 千 佳	子供の考えが深まる授業を目指して
176		教 諭	鈴 木 龍 平	必要感や目的意識をもち、主体的に学ぶための支援の在り方
177		教 諭	加 藤 早 紀	関わり合いの中で自分を見つめる子供の育成
178		教 諭	岩 間 麻 里	人との関わり合いの中で、よりよく生きようとする子供の育成を目指して
179	富山市立太田小学校	教 諭	村 井 伸 次	どの子も分かる・できる授業づくり
180		教 諭	若 田 翔 暉	一人一人がよさを認め合い、高めようとする子供の育成
181		教 諭	松 祥 子	主体的・対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
182		教 諭	山 崎 ちはる	主体的・対話的に取り組み、学びを自らのくらしに生かす子供の育成
183	富山市立熊野小学校	教 諭	雨 宮 直 弘	一人一人が主体的に取り組む学習活動の工夫
184		教 諭	本 江 佑 衣	学ぶ楽しさを味わうことができる授業を目指して
185		教 諭	中 井 幸	よく気付き、考え、実行する子供を育てるための学級経営
186		教 諭	長 島 智 大	一人一人が互いのよさを認め合い、進んで学び合おうとする子供の育成を目指して
187		教 諭	野 崎 友 晴	自分の思いを伝え合い、児童相互によさを認め合う学級を目指して
188		臨任講師	石 橋 理 子	互いのよさを認め合い、楽しく学ぶことができる学級経営
189	富山市立月岡小学校	教 諭	岡 崎 奏 斗	自分の考えをもち、主体的に学び合う子供の育成
190		教 諭	大 西 遥 海	伝え方・聞き方を意識して、主体的に学習に取り組む子供の育成
191		教 諭	古 野 滉 大	子供たちが、自分の思いや考えをもち、表現することができる授業を目指して
192	富山市立新保小学校	教 諭	高 木 優 希	互いの考えを理解し合い、学び合いを大切にする子供の育成
193		教 諭	山 下 葉 子	互いのよさや違いを認めながら、生き生きと学び合う子供の育成
194		教 諭	小 杉 有 希	認め合い、のびのびと自分の考えを表現しながら学び合う子供の育成
195		教 諭	小 澤 昭 吾	体験したことをもとに自分の考えや思いを意欲的に表現し学びを深める子供の育成
196		教 諭	森 智 遥	学ぶ楽しさや分かる喜びを実感できる子供の育成
197		教 諭	渡 利 哲 朗	自己を見つめ、進んで学習に取り組む子供の育成
198	富山市立 大沢野小学校	教 諭	西 森 美 桜	伝えたいことを整理しながら書こうとする子供の育成
199		教 諭	福 沢 志 歩	「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して
200		教 諭	山 崎 加 奈	主体的に学ぶ子供の育成
201		教 諭	横 窪 愛 弓	子供の学習意欲を高めるための工夫
202		教 諭	太 田 聖 久	子供が主体的に学習するための授業づくり
203		教 諭	高 尾 秀 平	互いの良さを認め合うことのできる温かい学級づくりを目指して
204		教 諭	中 橋 愛 花	グループ活動を通して自分の考えを深める授業
205		教 諭	西 川 ももな	自ら課題をもち聴き合いを通して学び合う授業づくり
206		教 諭	市 川 真亜久	互いのよさや違いを認め合うことのできる学級づくり
207		富山市立 大久保小学校	教 諭	佐 伯 美 結
208	教 諭		中 川 功太郎	教科で学習したことを、他教科や学校生活の中で活用できる単元の構想

	学校名	職名	氏名	研究課題
209	富山市立 大久保小学校	教諭	柳田 朱音	自分の思いや考えを伝え合う子供の育成
210		教諭	横井 里南	子供が自分の考えをもち、伝え合うための指導の工夫
211	富山市立上滝小学校	教諭	富田 克紀	子供が主体的に学習するための手立ての工夫
212		教諭	梅森 祐帆	進んで取り組み、共に高め合い学び合う授業づくりの工夫
213		養護教諭	篠田 侑香里	主体的に健康な生活を送る子供の育成
214		教諭	田中 みのり	自他の成長を喜び、共に高め合おうとする学級づくり
215	富山市立大庄小学校	教諭	木下 貴文	Google for education を活用した授業の実践
216		教諭	小川 圭介	「作って楽しい・使って便利なアイデアボックス」の学習を通して
217		教諭	杉本 茉由	社会の変化に対応しながら、思いや願いを実現させていく子供を目指して
218		教諭	西田 莉彩	自分の考えに自信をもち、友達と交流しながら考えを深めていく子供の育成
219		教諭	野島 朱音	自信をもって、課題に取り組む子供の育成を目指して
220		教諭	茂住 絵莉菜	体験的な活動や操作活動を通して意欲的に学習に取り組む子供の育成
221		養護助教諭	植野 未久	自分自身で感染症から身を守る児童の育成
222		臨任講師	清水 沙紀	主体的に活動する子供の育成
223	富山市立 神通碧小学校	教諭	武部 光志	互いのよさを認め合い、分かり合う子供の育成
224		教諭	悟道 綾華	自分の考えを進んで表現し、互いの考えを分かり合おうとする子供の育成
225		教諭	藤井 李保	互いの考えを分かり合い、認め合うことができる子供の育成
226		養護教諭	小澤 彩	自らの生活を振り返り、健康的な生活を送ろうとする子供の育成
227		教諭	佐伯 千歌	子供が自分の考えを確かにもつための教師の手立て
228		教諭	安田 汐里	自分の考えや思いを、自信をもって表現できる子供の育成
229	富山市立速星小学校	教諭	嶋津 弘文	子供が主体的に取り組むための教師の手立てや授業構想の工夫
230		教諭	森 菜摘	一人一人の主体性を引き出すための教師の支援
231		教諭	眞岩 竜郎	思いを伝え合い、よりよい合意形成や意思決定を図る話し合い活動にするための教師の支援の在り方
232		養護教諭	瀬野 ひかり	自分の体に関心をもち、これから起こる変化を肯定的に捉えるための指導の工夫
233		教諭	相川 慧	一人一人が自他を理解し、認め合う学級づくりのための教師の支援
234		教諭	鏡 理彩子	子供が主体的に活動に取り組むための教師の支援
235	富山市立鶴坂小学校	教諭	石井 亮	自分事として学習に向き合い、課題解決に向けて主体的に実践しようとする子供の育成
236		教諭	吉井 翔	子供たちが主体的に学習に取り組むための、学習過程や教材の工夫
237		教諭	濱田 幸恵	互いに聴き合う話し合い活動の工夫
238		教諭	赤尾 純平	子供が主体的に探究を行うための教師の手立て
239		教諭	松村 秀哉	聴くことを大切にしながら、共に学び合い、高め合える授業を目指して
240		教諭	里見 侑香	事象を自分事として考えることのできる子供の育成
241		教諭	竹村 勇希	子供の困り感から考える、学習支援の在り方
242	富山市立朝日小学校	教諭	雨宮 真夕	子供たちが主体的に取り組むことができる授業づくり
243		教諭	入船 晴日	自分の考えを豊かに表現する子供の育成
244	富山市立宮野小学校	教諭	水上 颯斗	仲間の考えを聴き合い、自己の考えを深められる授業を目指して
245		教諭	中島 愛里沙	心をはぐくむ飼育活動の実践を目指して
246		教諭	梅本 綾	友達と関わり合いながら主体的に学習に取り組む子供の育成を目指して
247		教諭	島倉 拓朗	児童が主体的に、関わり合い考えを深め合う授業を目指して
248	富山市立古里小学校	教諭	成瀬 瑠奈	自分の考えをもち、互いに学び合う子供の育成を目指して
249		教諭	嶋津 英里子	体験的な数学的活動を行うための教具・教材の工夫
250		教諭	西澤 拓哉	主体的に学習に取り組み、自分の考えを表現できる子供の育成

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
251	富山市立古里小学校	教 諭	竹 内 拓 哉	仲間を認め合うことができる子供の育成
252		臨任講師	中 野 晃 希	一人一人が自分の考えをもち、主体的に学ぼうとする子供の育成
253	富山市立神保小学校	教 諭	鏡 元 貴	目的・場面・状況の設定を大切に外国語科の指導
254		教 諭	山 崎 卓 也	児童が主体的に学習に取り組む授業づくりの在り方
255		教 諭	木 下 雅 子	友達と関わり合いながら学ぶ子供の育成
256		教 諭	小 林 夏 月	仲間意識を育てる学習活動の工夫
257	富山市立山田小学校	教 諭	東 一 雄	自分の考えを表現し、他者と関わりながら学ぶ授業の工夫
258		教 諭	藤 澤 しおり	自分の考えをもち、意欲的に学び合う子供の育成を目指して
259		教 諭	藤 井 千 紘	自分の考えをもち、主体的に課題を探究する子供の育成を目指して
260	富山市立杉原小学校	教 諭	野 中 敦 史	プログラミング学習で思いや考えを伝え合う授業の工夫
261		教 諭	高 広太郎	子供が、伝え合う楽しさを感じられるコミュニケーション活動の設定
262		教 諭	市 川 文 佳	自分の考えを明確にもち、表現するための環境づくり
263		臨任講師	上 田 ありさ	一人一人が算数の楽しさを感じ、意欲をもって学習に取り組める工夫
264	富山市立保内小学校	養護教諭	定 塚 茉莉子	健康、安全な生活を送るための知識、習慣を身に付け、心身共に健康でよりよく生きようとする子供の育成
265		教 諭	柳 樂 真 吾	算数科のおもしろさに気づき、意欲的に学習するための指導の工夫
266		教 諭	篠 川 賢 介	主体性のある子どもを育成するための授業の在り方
267		教 諭	畑 佐 知 弘	仲間と共に、意欲的に学習に取り組む子供の育成を目指して
268		教 諭	宮 川 彩	一人一人が自分の個性やよさを見つけ、自分に自信をもって行動できる子供の育成
269	富山市立桜谷小学校	教 諭	石 井 美 和	一人一人が思いを伝え合い、自ら学ぼうとする授業の在り方
270	富山市立五福小学校	教 諭	北 島 聖 也	自分の考えをもち、互いの考えを大切にしながら学び合う授業を目指して
271		教 諭	土 田 早 紀	一人一人が考え、話し合い、互いに学びを深め合う授業の実践
272		教 諭	前 田 奈緒美	思考と表現を楽しみながら主体的に学び合う子供の育成を目指して
273		教 諭	牧 野 健 吾	一人一人が自分の考えをもち、学び合いを大切に授業づくり
274	富山市立呉羽小学校	教 諭	城 石 雄 飛	子供が主体的に関わり合える授業の工夫
275		教 諭	宮 本 翔 平	互いの考えのよさを感じ合い、考えを深める子供の育成
276		教 諭	島 崎 彩 音	自他の考えのよさを認め合い、自信をもって考えを伝えられる子供の育成を目指して
277		教 諭	筏 井 啓 介	互いの考えを理解し、互いの考えのよさを感じ合うための指導の工夫
278		教 諭	旅 家 美 晴	一人一人が自分の考えをもち、共に学び合う子供を目指して
279	富山市立長岡小学校	教 諭	五十嵐 彩 希	主体的・対話的に学び合う授業を目指して
280	富山市立寒江小学校	教 諭	一 間 理 沙	子供が自ら課題を見付け、自信をもって学び合う単元構想の工夫
281		教 諭	前 馬 裕 樹	自己の考えを深めることができる構造的な板書づくり
282	富山市立老田小学校	教 諭	中 田 裕 大	学ぶことの楽しさや喜びを感じて、進んで学習に取り組む子供の育成
283		教 諭	藤 田 有 実	一人一人が考えをもち、意欲的に学ぶ子供の育成を目指して
284		教 諭	波 間 拓 己	自己肯定感を高める特別支援の在り方
285	富山市立池多小学校	教 諭	佐 伯 真 栄	子供にとって楽しく分かりやすいユニバーサルデザインを活用した授業の在り方
286	富山市立芝園小学校	教 諭	白 澤 真 優	自分の考えをもち、話を聞いたり、表現したりすることができる子供の育成を目指して
287		教 諭	中 島 雅 国	自ら学びに向かい、問題解決を通して社会的現象を多角的に考える子供の育成
288		教 諭	黒 川 麻衣子	一人一人が自分の考えをもち、互いに考えを深め合える授業の工夫
289		教 諭	田 辺 萌	自分の考えをもち、表現したり、伝えたりすることができる子供の育成
290		教 諭	古 谷 友 宏	問題解決に主体的に取り組み、数学的活動を楽しむことができる授業の工夫
291	富山市立中央小学校	教 諭	小 幡 拓 馬	互いの見方・考え方を関わらせ、深める授業の工夫
292		教 諭	岩 崎 卓 巳	「思い描く力」「かかわる力」「なしとげる力」「みつめる力」を育む追求型学習の在り方

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
293	富山市立中央小学校	教 諭	上 嶋 壮 太	互いの見方・考え方に学ぶ追究型授業の工夫
294	富山市立柳町小学校	教 諭	岩 黒 拓 人	読解力を高めるための授業の工夫
295		養護教諭	長 越 由 莉	子供の心を開く鍵となるツールの活用
296		教 諭	番 匠 拓 也	主体的・対話的に学ぶ子供の育成
297		教 諭	真 島 大 輔	一人一人が主体的に問題解決に取り組むための指導の工夫
298	富山市立奥田小学校	教 諭	梅 本 和 樹	数学的な見方・考え方を働かせながら 学びを楽しむ子供の育成を目指して
299		教 諭	中 村 麻 裕	様々なコミュニケーション活動を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむ授業を目指して
300		教 諭	池 上 舞 子	一人一人が自分の思いや考えをもち、学ぶ楽しさを感じられる授業を目指して
301	富山市立奥田北小学校	教 諭	上 野 右 京	子供同士が関わり合い、認め合うことのできる授業の工夫
302	富山市立光陽小学校	教 諭	荒 谷 早 織	自ら学び、視野を広げて学びを生かそうとする子供の育成
303		教 諭	伊 藤 沙 織	自らの課題を追究し、主体的に学ぶ子供の育成
304		教 諭	藤 林 健 梧	自分の考えを明確にもち、考えを深めていこうとする子供の育成
305		教 諭	山 本 将 之	自己を見つめ、道徳的価値に対する思いを深める授業の工夫
306		教 諭	荒 井 莉 奈	身近なものに興味をもち、工夫して遊びを創り出すことの面白さや、ものや友達に関わることの楽しさに気付く子供の育成
307		教 諭	吉 田 広 輝	課題意識をもち、自分の考えを深めようとする子供の育成
308		教 諭	中 村 優 良	自ら課題を見だし、主体的に追究する子供の育成
309		射水市立放生津小学校	教 諭	内 藤 智 美
310	射水市立小杉小学校	教 諭	成 瀬 麻 衣	主体的に学習活動を引き出す教師の支援はどうあればよいか
311		教 諭	輪 達 光 司	自尊感情を高めながら主体的・対話的に学んでいく子供の育成
312		教 諭	針 山 美 稀	社会的事象を自分ごととして捉えるための授業実践
313		教 諭	道 谷 俊 輝	物語の状況や登場人物の心情を読み取るための授業の工夫
314		教 諭	中 島 茜	自尊感情を高めながら主体的・対話的に学んでいく子供の育成
315		教 諭	八 島 志 歩	思いやりのある子供の育成を目指して
316	射水市立金山小学校	教 諭	高 沢 浩 彰	「自ら、学ぶ」「自ら、表現する」「自ら、実践する」子供を育成するための教師の支援の在り方
317		教 諭	島 英 浩	進んで対象に働きかけ、自分の考えをより確かにする子供の育成
318	射水市立 歌の森小学校	教 諭	大 西 薫	考えを聴いたり表現したりしながら学びを楽しむことのできる授業の工夫
319		教 諭	木 村 友 也	児童のやる気を引き出す授業の工夫
320		教 諭	竹 島 貴 子	一人一人の理解を深める授業展開のための振り返りの工夫
321		教 諭	一 守 詠太郎	子供の可能性を最大限伸ばすための支援の在り方
322		教 諭	渡 辺 雄 貴	子供の書く意欲を高めるための支援のあり方
323		教 諭	村 中 ひかり	子供の自己肯定感を高める工夫
324		射水市立 太閤山小学校	教 諭	金 森 凌
325	教 諭		草 島 亜 紀	考えを深めたり新たな視点を見出したりできる資料の精選と提示の仕方
326	教 諭		鷲 平 綾 音	算数科において児童一人一人が自分の考えを表現するための指導の工夫
327	教 諭		中 村 彩 華	算数科における操作活動の工夫
328	教 諭		林 竜 佑	自分の考えをもち、関わり合いながら学ぶ子供の育成
329	教 諭		日 高 駿	視覚的効果を有効に使った授業の工夫
330	教 諭		中 山 麻 優	自分の思いや考えを言葉にして相手に伝えられる子供の育成
331	射水市立大島小学校	教 諭	櫻 井 均	子供たちが互いのよさを認め合う学級経営
332		教 諭	大 島 一 也	ボール運動の楽しさを味わいながら、チームで課題を解決しようとする児童の育成
333		教 諭	八 尾 妃名子	登場人物の気持ちの変化や人物像を膨らませて物語を読むことができる子供を目指して
334		教 諭	早 苗 李 菜	友達との関わりの中で学び合い、考えを深める授業づくり

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
335	高岡市立福岡小学校	教 諭	岩 崎 貴 士	主体的に学習に取り組む児童を育成するための学習専用端末の活用
336		教 諭	谷 口 茉莉花	一人一人が自分の思いや考えをもち、進んで表現できる授業の在り方
337		教 諭	向 井 幹 城	意欲的に学習に取り組む児童の育成を目指した授業の在り方
338		教 諭	有 島 千 紘	主体的に学習に取り組むことができる学習活動の工夫
339	高岡市立横田小学校	教 諭	濱 元 大 輝	一人一人のよさを伸ばし、共に高め合う児童の育成
340		教 諭	武 内 俊 輝	一人一人の特性を生かし、分かる楽しさや学ぶ喜びを実感できる指導・支援の在り方
341	高岡市立博労小学校	教 諭	安 居 純	理科授業における主体的に学ぶ態度を育成する教材提示の工夫と学習内容の理解の向上を図るための構造的な板書の工夫
342	高岡市立西条小学校	教 諭	河 原 康 範	進んでソーシャルディスタンスを意識できる児童の育成
343		教 諭	山 本 詩 歩	互いを認め合い、自分の考えを広げ、深めることができる児童の育成
344		教 諭	上 田 有 希	主体的に言語活動に取り組む子供の育成
345		教 諭	番 匠 萌 花	叙述を基に登場人物の心情の変化を読み取り、自分の読みや考えをもつことができる児童の育成
346	高岡市立千鳥丘小学校	教 諭	福 嶋 亜佑美	親切の気持ちよさについて考えを深めるための道徳授業の在り方
347		教 諭	田 中 一 史	個人の実態に合った学習指導の在り方
348		教 諭	藤 田 雄 喜	関心を持って学習に向かい、友達の考えを聞き合うことができる児童の育成
349	高岡市立木津小学校	教 諭	松 井 健 悟	児童の主体性を育む「コロナ禍での体育交流学習」の工夫
350		教 諭	金 森 実恵子	互いのよさを認め、関わり合いながら学ぶ子供の育成
351		教 諭	亀ヶ谷 和 可	主体的・協働的に学びを深める子供を育む指導の在り方
352		教 諭	高 橋 佳 那	関わり合いながら学ぶ子供を育む算数科の指導の工夫
353		教 諭	茶 木 紀依子	互いのよさを認め合い、友達と関わり合って学ぶ子供の育成
354		高岡市立成美小学校	教 諭	川 崎 喬 史
355	教 諭		熊 木 侑 蘭	互いに認め合い、自分の思いを表現できる子供の育成
356	高岡市立川原小学校	教 諭	辻 恭 平	一人一人が自分のよさを見つけ、高めあう子供の育成
357		教 諭	柳 澤 紗也佳	友達と関わり合い、自分の考えを伝え合う子供の育成
358	高岡市立万葉小学校	教 諭	河 嶋 亮 佑	友達のよさを認め、協力し学び合う学級集団の育成
359		教 諭	坪 内 紗 都	「できた」「分かった」を実感し、自信をもって活動する子供の育成
360	高岡市立能町小学校	教 諭	高 野 昌 幸	「考え、議論する道徳」実現に向けての具体的手立ての発案
361		教 諭	沼 田 理 沙	友達と関わり合いながら、楽しんで活動する児童の育成
362		教 諭	前 智 未	全校児童が明るく安全に学校生活を送るための生徒指導上の工夫
363		教 諭	奥 井 千 里	友達と関わりながら、主体的に学ぶ児童の育成
364		教 諭	浅 谷 康太郎	特別支援教育を軸としたコミュニケーション能力の育成
365		教 諭	山 口 美 咲	人の話をよく聞き、友達と関わり合いながら主体的に学ぶ児童の育成
366		教 諭	延 澤 冴 香	一人一人が自分の意見や考えをもち、のびのびと表現できる児童の育成
367		教 諭	松 本 彩 香	一人一人の違いやよさを認め合いながら、児童が主体的に活動する授業づくりの工夫
368		教 諭	尾 田 勇 哉	理科の授業において、問題を科学的に解決する児童の育成
369		教 諭	圓 佛 菜々美	一人一人のよさを認めながら学び合う児童の育成
370	高岡市立定塚小学校	教 諭	余 川 小友妃	主体的に考えるための学習過程における工夫
371		教 諭	東 井 一 真	児童の深い学びにつなげる教師の支援の工夫
372		教 諭	杉 高 正 紀	課題と正対する時間を確保し、主体的に学習に取り組む児童の育成
373		教 諭	福 尾 尚 久	協働的に学ぶ楽しさや達成感が味わえる授業づくり
374		教 諭	四十九 葉 月	共に学び合い、つくり出す喜びを味わう子供の育成
375		教 諭	島 林 未 夢	主体的な学びを支える授業づくり
376	高岡市立下関小学校	教 諭	林 優 太	主体的にコミュニケーションを図ろうとする子供の育成

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
377	高岡市立下関小学校	教 諭	久 湊 愛 佳	主体的に話し合い、共に学び合う児童の育成
378		教 諭	石 尾 誠 一	互いのよさを認め、進んで活動に取り組む児童の育成
379		教 諭	山 口 三 耶 子	学ぶ意欲を高め、確かな読解力を付ける授業づくり
380		教 諭	上 愛 実	思いや考えを表現することができる子供の育成を目指して
381		教 諭	笠 原 有 真	自分の考えや思いを大切に表現することができる学級づくり
382	高岡市立野村小学校	教 諭	木 山 典 子	一人一人が自分のよさに気付くことのできる支援の工夫
383		教 諭	蟹 谷 歩	互いに認め合い、楽しみながら活動する学級集団の育成
384		教 諭	高 木 優 輔	ものや人と関わり、豊かに発想・想像する力を伸ばす子供の育成をめざして
385		教 諭	野 原 由 衣	自分や友達のよさに気付き、自分の思いを表現できる児童の育成
386		教 諭	柿 畑 美 友	自分の思いをもち、豊かに表現できる子供の育成
387		教 諭	松 尾 瑛 莉	互いのよさを認め合い、自分の思いや考えを進んで表現する児童の育成
388		教 諭	江 守 紗 耶	自分と他者の考えをつなげて、進んで思いを伝え合う児童の育成
389		教 諭	近 藤 雄 喜	積極的に他者と交流し、物事を多面的に捉える子供の育成
390		教 諭	森 谷 元	互いに認め合い、主体的に学ぶ子供の育成
391		高岡市立伏木小学校	教 諭	梶 谷 優 里
392	教 諭		利 田 政 子	「体験活動と言語活動」が充実する単元・授業づくりの工夫
393	教 諭		松 木 博 子	課題意識をもって主体的に学習し、継続して実践しようとする意欲を高める授業の工夫
394	高岡市立古府小学校	教 諭	高 橋 明 澄	理科の授業におけるプログラミングソフトの活用
395		教 諭	田 所 佳 純	主体的に考え、共に学び合うための工夫
396	高岡市立太田小学校	教 諭	濱 元 維 子	災害の可能性に気付き、自ら考え、行動できる子供を育成するための指導の工夫
397		教 諭	養 藤 了 佑	自分の思いや考えを進んで表現しようとする児童の育成
398		養護教諭	村 井 美 月	健康に過ごすことの大切さを理解し、実践できる児童の育成
399	高岡市立 戸出東部小学校	教 諭	大 淵 慎 平	自然現象を科学的に追究していく児童の育成
400		教 諭	渡 邊 惣一朗	互いのよさに気付き、関わり合いながら高め合える学級集団の育成
401		教 諭	橋 本 笑 佳	互いのよさを認め、学び合う子供の育成を目指して
402		教 諭	桶 隆 太 朗	伝え合い、学び合う授業の在り方
403	高岡市立 戸出西部小学校	教 諭	藤 長 拓 巳	体験的な活動を生かした算数科の学習
404		教 諭	上 島 晶	主体的に言語活動に取り組むことができる指導の工夫
405		教 諭	羽 田 真 司	ICT 機器を使った対話を大切に伝えた伝え合う場の工夫
406		教 諭	新 保 拓 実	一人一人の実態に応じた指導や支援の在り方
407		教 諭	花 畑 諒 成	一人一人のよさを生かし、楽しく学び合う学級経営の在り方
408		教 諭	宮 下 沙 由 花	互いのよさを認め合い、楽しく学ぶ子供の育成
409		教 諭	白 江 美 来	互いのよさを認め合い、自分の思いや考えを伝え合う子供の育成
410	高岡市立中田小学校	教 諭	村 藤 早 紀	「わかる」「できる」を積み重ね、主体的に学ぶ児童の育成
411	氷見市立比美乃江小学校	教 諭	井 上 真 孝	子供たち一人一人の自己有用感を高めるキャリア・パスポートの活用
412	氷見市立宮田小学校	教 諭	渡 邊 果 穂	互いに認め合い、共に学び合う子供の育成
413		教 諭	小 竹 裕 香	子供一人一人が、目的意識をもち、主体的に学ぶ授業の工夫
414	小矢部市 立石動小学校	教 諭	関 口 拓 真	「分かった」「できた」を実感できる授業づくり
415		教 諭	三 輪 憲 正	「分かった」「できた」を実感できる授業づくり
416		教 諭	藤 川 愛 子	「分かった」「できた」を実感できる授業づくり
417		教 諭	野 村 拓 未	「分かった」「できた」を実感できる授業づくり
418		教 諭	澤 由 佳 子	「分かった」「できた」を実感できる授業づくり

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
419	小矢部市立 大谷小学校	教 諭	石 野 昌太郎	児童および教員の双方に実益をもたらす新しい丸付け法の提案
420		教 諭	大 窪 真 也	内容を身近に感じ、説明的文章の工夫を考えようとする子供を目指して
421		教 諭	櫻 井 百合香	伝え合うための授業づくりの工夫
422		教 諭	西 尾 美 波	国語好きな子供の育成
423		教 諭	山 崎 泰 輝	友達と関わりながら自分の考えを深める子供の育成
424	小矢部市立 東部小学校	教 諭	小船井 瑞 穂	子供が主体的に考えを深めるための授業づくり
425		教 諭	安 田 達 広	道徳科における子供が主体的に考えを深める発問や板書
426	砺波市立出町小学校	教 諭	清 水 雄 斗	友達との関わりを通して、自分の読みを深める子供の育成
427		教 諭	荒 井 光 貴	自分の読みを深め、主体的に考えを話す子供の育成
428	砺波市立庄南小学校	教 諭	星 野 花 奈	全員参加型授業の実現のための指導の工夫
429	砺波市立 砺波東部小学校	教 諭	澤 田 彩 可	自分の考えを表現することを楽しみながら、生き生きと対話する子供の育成
430		教 諭	窪 田 稔 彦	一人一人の思いに寄り添った授業づくり
431		教 諭	前 田 稜	課題を「本気で解決したい!」と思い、話し合いで考えを深める授業づくり
432		教 諭	中 松 静 花	子供が主体的に取り組み、互いの読みの違いから学びを深める授業づくりの工夫
433		教 諭	高 田 岬	子供の「やりたい」を引き出し、学んだことを生活や学習に生かすための指導の工夫
434		教 諭	大 橋 光 貴	子供が「やりたい」「楽しい」と思える学習活動の工夫
435		教 諭	金 子 真 弓	音楽科の実践を通して、思いを音で表現する楽しさに気付く子供の育成
436		教 諭	牧 山 香菜子	子供たちが対話を通して新しい発見を楽しむ授業の工夫
437		教 諭	棚 田 千 夏	自分の考えをもち、表現できる授業の工夫
438		砺波市立 砺波北部小学校	教 諭	竹 智 大
439	教 諭		畠 中 綾 奈	進んで表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
440	教 諭		河 西 徹	進んで活動し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
441	教 諭		竹 倉 彩 希	進んで表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
442	教 諭		村 田 光	「進んで表現し、友達と関わりながら学ぶ子供」の育成を目指して
443	教 諭		宮 田 知菜実	進んで表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
444	教 諭		坂 井 佑	進んで表現し、友達と関わりながら学ぶ子供の育成
445	砺波市立鷹栖小学校		教 諭	和多利 真 一
446	砺波市立庄川小学校	教 諭	練 合 拓 人	自ら学び ともに学び、深く学ぶ授業づくりを目指して
447		教 諭	原 野 友香梨	子供の思考のスイッチを働かせるための教師の手立て
448		教 諭	篠 原 天 馬	豊かに運動に取り組み、動きを高める子供の育成
449	南砺市立城端小学校	教 諭	上 野 琢 磨	自分の考えをもち、協働的に学びを深める子供の育成
450		教 諭	梅 原 沙 織	主体的に考え判断し、行動する力の育成
451		教 諭	砂土居 裕 貴	自治的集団育成に向けた、自他を認め合う人間関係づくりの工夫
452		教 諭	高 口 和 士	自分の考えを様々な視点で見つめたり、より深く考えたりする工夫
453		教 諭	石 塚 千 里	児童が見通しをもって学習するための手立て
454	南砺市立利賀小学校	教 諭	三 部 晴 夏	主体的に学ぶ子供の育成
455	南砺市立井口小学校	教 諭	沼 田 涼 平	プログラミング的思考を育成するための授業の工夫
456		教 諭	五十嵐 彩 夏	子供の思考を深めたり広めたりできる板書の工夫
457	南砺市立福野小学校	教 諭	今 村 優 一	文字や文章を書くことの抵抗感を減らす支援の工夫について
458		教 諭	新 屋 步	仲間と共に、豊かに運動に取り組む子供の育成
459		教 諭	中 田 直 毅	文章構成を理解させるための授業の工夫
460		教 諭	津 田 哲 志	自分の思いや考えを発言する子供を目指して

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
461	南砺市立福野小学校	教 諭	野 澤 寛 人	楽器演奏への抵抗感を少なく、誰もが楽しんで合奏を行うための工夫
462		教 諭	朝 日 志 穂	学習の有用性を味わうことができる授業を目指して
463		教 諭	宮 崎 立	音楽科の基礎・基本の定着を図りながら、感じ取ったことや考えたことを伝え合う授業を目指して
464		教 諭	石 畠 みさき	音楽づくりの学習に意欲的に取り組むことのできる授業・学級づくり
465		教 諭	畠 山 薫	子供たちが安心して表現することができ、表現する楽しさを感じられる授業・学級づくり
466		教 諭	齊 藤 遥	子供たちの知的好奇心を高める授業を目指して
467	南砺市立福光中部小学校	教 諭	本 多 翔	主体的に仲間と学び合い、考えを深めていく児童の育成
468		養護教諭	飯 田 育 実	「自分の命を自分で守る」児童の育成を目指して
469		教 諭	大 原 真 帆	主体的に仲間と学び合い、考えを深めていく子供の育成
470		教 諭	中 島 昇 平	主体的に仲間と学び合い、考えを深めていく子供の育成
471		教 諭	真 栗 一 嘉	主体的に仲間と学び合い、考えを深めていく児童の育成
472		教 諭	杉 本 愛 華	主体的に仲間と学び合い、考えを深めていく子供の育成
473	南砺市立福光東部小学校	教 諭	岸 澤 靖 子	共に学ぶ喜び、分かる楽しさを実感し、主体的に学びを深めていく子供の育成
474		教 諭	田 中 慶	友達の考えから自分の考えを見直し、「分かる」楽しさを味わう子供の育成
475		教 諭	太 田 千 秋	他者と協働しながら、主体的に音楽と関わろうとする子供の育成
476		教 諭	田 中 朋 代	伝え合う力を育てる指導の工夫
477		教 諭	下 田 勝 也	共に学ぶ喜び、分かる楽しさを実感し、主体的に学びを深めていく子供の育成
478		教 諭	山 崎 春 花	共に学ぶ喜び、分かる楽しさを実感できる授業づくりにするためにはどうすればよいか
479	教 諭	愛 宕 竜 生	共に学ぶ喜び、分かる楽しさを実感し、主体的に学びを深めていく子供の育成	
480	朝日町立朝日中学校	教 諭	岩 崎 将 展	ICT を利用し、生徒が主体的に学ぼうとする授業づくり
481		教 諭	中 西 勇 太	話し合い活動を通じた、主体的な課題解決学習に向けて
482		教 諭	岩 田 寿 浩	ICT を利用した生徒が主体的に学ぼうとする授業づくり
483		教 諭	小 坂 健 太	互いに学び合い、国語への興味・関心を高める授業展開の工夫
484	入善町立入善中学校	教 諭	梅 津 詩 織	国語科における ICT 活用
485		教 諭	藤 木 将 人	身近な課題を通じた2乗に比例する関数の指導
486		教 諭	西 川 ゆりの	生徒が主体的に学び合う授業の工夫
487	入善町立入善西中学校	教 諭	開 沢 佳 弘	ICT を活用した資料活用授業の研究
488		教 諭	宇 野 美 菜 子	ICT を活用した理科の授業研究
489		教 諭	舩 田 翔	科学的な思考を深めることのできる教材の活用
490		臨任講師	濱 田 将 平	器械運動の技能を高めるための ICT 機器の活用の工夫
491	魚津市立西部中学校	教 諭	植 木 惇	思考ツールを用いた科学的な思考力、表現力の育成
492		教 諭	橋 北 駿	数学的な見方・考え方を働かせ、深い学びを実現する指導の工夫
493		臨任講師	三 上 卓 宏	数学の授業における学習意欲を高める教材の工夫
494	魚津市立東部中学校	教 諭	相 田 健 悟	主体的に学び合い、運動の楽しさを味わえる体育の授業づくり
495	滑川市立滑川中学校	教 諭	金 森 淳 史	主体的によりよい生活や人間関係を築こうとする力を育てる話し合い活動の工夫
496		教 諭	浜 田 翔 太	生徒が主体的に取り組む授業を目指して
497		教 諭	宮 崎 裕 美	生徒が主体的に学ぶ授業づくり
498		教 諭	渡 邊 慎 也	SDGs を取り入れた、社会科授業の工夫
499		教 諭	濱 多 薫	反転授業の実践と今後の課題
500		教 諭	小 田 凜 乃	安心して発言ができる、受容的な学習集団の育成
501	教 諭	堀 瑶	生徒に興味をもたせる国語の授業のありかた	
502	滑川市立早月中学校	教 諭	猪 又 一 訓	トレーニングカードを利用した数学の基礎定着

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
503	舟橋村立舟橋中学校	教 諭	黒 坂 翔 子	自己の意見を適切に相手に伝える能力を身に付けさせるための指導の工夫
504		教 諭	大 木 琢 矢	事象を数学的に解釈する力を高め、一人一人が考えをもつことができる学習過程の工夫
505	富山市立芝園中学校	教 諭	寺 崎 宏 昭	生徒が主体的・対話的に取り組む授業を目指して
506		教 諭	岡 本 奎 一	生徒一人一人が主体的に学びを深める授業の工夫
507		教 諭	上 子 千 尋	ICTを活用した主体的な授業づくり
508		教 諭	村 崎 凌 也	国語教育の実践報告
509		教 諭	片 岡 南	思考スキルを明示した理科の授業実践
510		教 諭	長 倉 里佳子	ICTの活用による生徒の授業意欲を高める社会科の授業実践
511		教 諭	荒 谷 明日香	ICTを用いた効果的な保健体育の授業実践
512		教 諭	上 田 七 海	ICTを活用した英語科の授業実践
513		富山市立堀川中学校	教 諭	本 名 美貴子
514	教 諭		寺 中 翔 吾	理科において ICT を活用した授業の工夫
515	教 諭		関 岡 真 衣	国語科の授業における ICT の活用の有用性について
516	養護教諭		那須野 綾	生涯を通して主体的に心身の健康づくりに取り組む生徒の育成を目指して
517	教 諭		高 野 紗矢香	社会科における効果的な ICT の活用について
518	教 諭		島 上 翼	生徒同士の「学び合い」を通じた表現活動の指導の工夫
519	教 諭		福 島 侑 太	生徒一人一人の自己有用感を高める学級活動の工夫
520	教 諭		澤 村 祐 矢	生徒の主体的な学びに向けた社会科授業の工夫
521	富山市立新庄中学校		教 諭	山 内 智 和
522		教 諭	竹 田 周 生	社会に生きる一員として、主体的に学ぶ「総合的な学習の時間」の取組
523		教 諭	金 川 未 蘭	ユニバーサルデザインの板書づくり
524		教 諭	松 井 暉	生徒が自ら考え、行動する学級にするためにはどうしたらよいか
525		教 諭	西 本 晴 哉	社会科授業における ICT 機器の効果的な活用方法について
526		教 諭	浅 野 友 紀	保健体育の授業における ICT の活用について
527		教 諭	丸 山 遥	対話的な授業をつくるための効果的なワークシートの活用
528	富山市立岩瀬中学校	教 諭	碓 井 絵 美	思いやりの心を育む道德教育
529		教 諭	高 瀬 大	生徒が積極的に自分の考えを表現できる授業の工夫
530	富山市立山室中学校	教 諭	谷 口 貴 章	中学理科における動画による実験の実施
531		教 諭	吉 田 秀 徳	新しい生活様式における動画教材を用いた理科の授業の進め方
532		教 諭	堀 越 賢 樹	全ての生徒が問題解決に取り組めるグループ活動の工夫
533		教 諭	杉 本 裕 美	オンライン上でも主体的・対話的な学びを深めるために
534		教 諭	中 井 蛍	主体的に取り組める文法の授業を目指して
535		教 諭	穴 戸 勝 哉	運動が得意な生徒も苦手な生徒も楽しめる授業づくり
536		富山市立呉羽中学校	教 諭	今 市 恭 史
537	教 諭		末 上 裕 也	身体接触を避けるための ICT 機器を活用した保健体育の授業実践
538	教 諭		高 橋 泰 臣	コロナ禍における主体的・対話的で深い学びの工夫
539	教 諭		河 原 隆 史	ICTを活用した特別活動の実践
540	教 諭		江 尻 小 春	生徒の関心・意欲を高めるための授業実践の工夫
541	教 諭		奥 澤 敦 子	主体的に学ぶ生徒の育成を目指して
542	富山市立興南中学校	教 諭	佐 野 真 也	学び合いを意識し、全員が課題解決に向けて積極的に取り組む授業
543	富山市立速星中学校	教 諭	鎗 木 慶 之	生徒の関心と意欲を引き出す授業について
544		教 諭	佐 伯 美 香	生徒が主体的に取り組むための授業展開はどうあるべきか

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
545	富山市立速星中学校	教 諭	永 森 早 紀	古典作品に対する興味をもたせる教材開発について
546		教 諭	柿 畑 直 哉	学び合う態度を育てるための指導のあり方
547		教 諭	桶 谷 悠 祐	効果的に資料を活用した分かりやすい社会科授業の実践
548		教 諭	五 本 大 将	基礎・基本を高める社会科の授業づくりについて
549		教 諭	高 木 佐和子	言葉に対して自覚的になる授業づくり
550		教 諭	帯 刀 久瑠美	読解力を高める授業について
551		教 諭	中 村 美 穂	歴史と公民のつながりを意識した授業の実践について
552		教 諭	清 水 友 輝	ICT を利用した授業の効率化
553		教 諭	堀 田 真 志	理科の基礎・基本を身に付けさせるための観察・実験の実践
554	富山市立城山中学校	教 諭	服 部 雄 大	新たな体育大会様式
555		教 諭	庄 司 礼 菜	生徒の科学的思考を育てる理科授業の工夫
556		教 諭	新 夕 萌 美	基礎的・基本的知識や技能の習得に向けた授業の工夫
557		教 諭	和 田 直 也	粘り強く考える活動を取り入れた数学の授業
558		教 諭	越 前 匠 真	「食」への理解を深め、望ましい食生活を実践できる生徒の育成
559	富山市立楡原中学校	教 諭	鈴 木 友 之	保健体育の授業から楽しく学ぶ SDGs 「17 のゴール」
560		教 諭	清 崎 凌 太	一枚の資料の読み取りを通して、生徒の多面的・多角的なものの見方を育てる工夫
561		教 諭	宮 井 杏 理	生徒が互いに学び合い、高め合う授業の工夫
562	射水市立 新湊南部中学校	教 諭	筏 井 章太郎	ICT 機器を活用した授業についての研究
563		教 諭	杉 元 純 一	コロナウイルス感染拡大防止を行いながら、学びの質を高め、学習効果を上げるには
564	射水市立射北中学校	教 諭	茶 谷 美 香	習熟度別学習における学習課題の設定と理解を深める手立ての工夫
565	高岡市立伏木中学校	教 諭	平 野 剛 史	課題の発見と解決に向けて主体的に取り組める授業の実践
566		教 諭	大 窪 翔 子	英語で自分の考えを表現させるための授業づくり
567		教 諭	渡 邊 鈴 香	「音楽的な見方・考え方」を育む授業の工夫
568	高岡市立五位中学校	教 諭	棚 田 健 介	社会とのつながりについて考える授業実践
569	高岡市立福岡中学校	教 諭	田 賀 也功志	コミュニケーション能力の基礎を養うための「聞くこと」、「話すこと」を中心とした指導の工夫
570		教 諭	渡 邊 亜 仁	日常生活に役立つ体づくりを目的とした安全な授業づくり
571		教 諭	加賀見 智 子	生徒一人一人が自分の考えをもち、表現するための指導の工夫
572	小矢部市立 大谷中学校	教 諭	西 智 哉	語彙を豊かにする授業内容の工夫
573		教 諭	新 井 稜	身につけた知識を表現できる授業展開の工夫について
574		教 諭	小 森 裕 菜	英語で表現する力を高める授業の実践
575	砺波市立庄川中学校	教 諭	荒 俣 雄 輝	次時が楽しみになる家庭学習はどうあればよいか
576	南砺市立井波中学校	教 諭	永 田 倫 之	生徒が主体的に取り組む社会科の授業実践
577	南砺市立井口中学校	教 諭	岩 崎 和 寛	生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫
578	富山県立 中央農業高等学校	教 諭	橋 本 樹	環境教育における理科授業の在り方
579		教 諭	大 井 裕 介	AI 型授業における授業環境づくり
580	富山県立富山工業高等学校	教 諭	圓 山 圭	高校国語における重ね読みの実践とその工夫
581	富山県立小杉高等学校	教 諭	立 浪 祐	「総合的な学習の時間」における基礎的・汎用的能力に基づく授業実践
582	富山県立砺波工業高等学校	教 諭	島 勇 佑	生徒の主体性を伸ばす ICT を用いた授業法についての研究
583	富山県立富山聴覚総合支援学校	教 諭	干 場 慎 也	聴覚障害児における iPad を活用した数学科の学習について
584	富山県立 しらとり支援学校	教 諭	山 崎 雅 季	見通しをもって落ち着いて学習に取り組むための指導の工夫
585		教 諭	井 川 慎 吾	児童のよさを引き出す支援の工夫
586	富山県立高志支援学校	教 諭	棚 田 純 平	卒業後の生活を起点とした「学び」の実現

	学 校 名	職 名	氏 名	研 究 課 題
587	富山県立高岡高等支援学校	教 諭	長谷川 咲 希	高等支援学校における ICT を活用した音楽科授業の実践
588	龍谷富山高等学校	教 諭	船 坂 一 貴	ポートフォリオによる学習状況の可視化と評価
589		教 諭	榊 原 勇 人	計算で求めた確率を実際に確かめる
590		教 諭	宮 野 真理華	生徒の自主性を高める楽しい active learning
591		常勤講師	鍋 田 真 志	生徒が主体的に判断し、行動選択できる授業の工夫
592	高朋高等学校	教 諭	星 野 英 伸	寮生活を通し生徒の自主性を高める指導の工夫
593		教 諭	仲 里 美 咲	保護者と連携した進路指導について
594		教 諭	小 池 拓 斗	体育嫌いな生徒の意欲を高めるためには
595		教 諭	渡 邊 慎	高校生への生徒指導、接し方

あ と が き

今年度、弘済会事業でいろいろな学校を訪問させていただきました。そうした中、多くの学校で感じていることがあります。それは、コロナ禍において、児童生徒の健康と安全を守りながら、学びや居場所を保障しようと教職員が一丸となって取り組んでいること。そして、教職員が知恵を出し合い、学校行事を始め、様々な難局を乗り越えようと頑張っていることです。その原動力となっているのが、「子供にとって今できる最善の教育環境を整えていこう」とする教職員の熱い思いです。

正解のない変革の時代です。学校教育にも正解はありません。上からの指示に忠実に従ったり、周りにあわせて無難に取り組んだりしては、最善の学校教育はできません。地域の状況と目の前の子供たちの様子を見て、子供たちが安心できる学校、将来に向けて成長できる学校、そんな学校にしていくためのオリジナルな取組が、それぞれの学校で行われていることを、とてもうれしく思っています。

しかし、コロナ禍のために学校で行われていることは、教育的に見ると健全なことばかりではないようにも感じています。学校では新しい生活様式の中でソーシャルディスタンスを守って学習していますが、このままでよいのでしょうか。子供たちは敏感で多感です。周りの友達の動きや雰囲気は無意識に感受します。隣の友達の熱意が伝わるためには、座席は近いほうが良いし、話し合いが学級を巻き込んでいく勢いに発展していくためには、子供同士がお互いの表情を確かめ合えるような学習隊形が適しています。学校というところは、教師と子供や子供同士の人間関係が親密になるほど教育力が増大し、学力も規範意識も向上させることができます。学校での人との関わりは安心感や充実感、新しい気付きや感動など、たくさんのものをもたらしてくれます。

現在のコロナ対策の取組は、感染予防のためにやむを得ず制約していることをしっかりと認識することが大切です。ICT環境が整いオンライン学習が普及したとしても、不健全な取組や安易な対応の蔓延を容認しないように務めていくことが、これからの学校教育に求められることだと考えます。

今回入賞された論文には、子供の自主性や参画意識を高め、関わり合いを通して成長に結びつける取組が多く見られました。授業改善・経営改善にむけた本質的なヒントがたくさん含まれています。

各学校におかれては、このような教育の変革の時期の参考として、この実践事例集を日々の教育活動に生かしていただき、これまで以上に子供たちの成長に結びつける教育活動を展開していただければ幸いです。

富山支部では、これからも事業の充実を図り、児童生徒の学習環境の整備や学校・教職員への支援にむけ、様々な面で公益財団法人としての役割を果たしていきたいと考えております。今後ともよろしく申し上げます。

令和3年2月

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部
専任幹事 清 田 秀 夫

令和2年度
実践報告集

編集・発行 令和3年2月1日発行

公益財団法人 日本教育公務員弘済会富山支部

URL : <http://www.nikkyoko.or.jp/company/toyama>

〒930-0018 富山市千歳町1丁目5番1号

富山県教育記念館内

TEL 076-432-6562 FAX 076-432-1766

印刷 中村印刷工業株式会社
